

熊本県文化財調査報告 第76集

西谷遺跡

一般国道3号熊本北バイパス建設に伴う埋蔵文化財調査報告

1985

熊本県教育委員会

熊本県文化財調査報告 第76集

西谷遺跡

一般国道3号熊本北バイパス建設に伴う埋蔵文化財調査報告

1985

熊本県教育委員会

序 文

熊本県教育委員会では、建設省九州地方建設局によって計画された一般国道3号熊本北バイパス建設予定地内の埋蔵文化財調査を昭和58年度から進めてきました。本書は熊本市下南部町に所在する西谷遺跡の報告であります。

遺跡からは、弥生時代の住居址と奈良、平安時代にかけてのカマド付き住居が確認され、白川河岸段丘上に立地する遺跡解明の手がかりをつかむことができました。

この報告書が文化財の保護活動や地域の歴史を知るうえで活用していただければ幸甚に存じます。

発刊にあたりまして、建設省九州地方建設局熊本工事事務所当局をはじめ地元教育委員会、並びに多数の方々の御協力を賜りました。ここに心からお礼申し上げます。

昭和60年3月30日

熊本県教育長 伴 正 善

例 言

1. 本書は、熊本市下南部町に所在する西谷遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 調査は、一般国道3号北バイパス建設工事に伴う事前調査として、建設省九州地方建設局熊本工事事務所の委託を受けて、熊本県教育庁文化課が実施した。
3. 本書は、昭和58年度に実施したⅠ地区の調査結果と、昭和59年度に実施したⅡ・Ⅲ地区の調査結果を合わせて収録した。
4. 遺構番号は時代にとらわれず発見順とし、また通し番号とせず調査区別に独立してつけた。
5. 現地調査の実測及び写真撮影は、Ⅰ地区を森山栄一、Ⅱ・Ⅲ地区を浦田信智が行ない、本書に使用した図の作成は主に浦田が行ない、遺物の実測及びトレースに、藤崎伸子、瀬丸延子、六田育子、住田幸恵、本田まゆみ、前田志磨江の協力を得た。
6. 本書に掲載した写真の撮影・焼き付けは浦田が行ない白石巖氏の協力を得た。
7. 本書の執筆は主に浦田が行ない、第Ⅰ章Ⅰを平岡勝昭が行なった。
8. 本書の編集は熊本県教育庁文化課で行ない、浦田が担当した。

目 次

序 文	
例 言	
本 文 目 次	
挿 図 目 次	
表 目 次	
図 版 目 次	
第 I 章 序 説	1
1. 調査に至る経過	1
2. 調査組織	1
第 II 章 遺跡の位置と歴史的環境	3
第 III 章 調査の概要	7
1. 調査日誌抄	7
2. 層位	9
3. 調査地区の概要	10
(1) I 地区 (2) II 地区 (3) III 地区	
第 IV 章 遺構と遺物	15
1. I 地区	15
住居址と出土遺物	
2. II 地区	40
住居址と出土遺物	
3. III 地区	52
住居址と出土遺物	
4. 石器と鉄器	70
第 V 章 ま と め	77

挿 図 目 次

第1図	周辺遺跡図……………4	実測図……………34	
第2図	層位概略図……………9	第20図	調査Ⅰ区10号住居址実測図……………36
第3図	西谷遺跡周辺地形図 及び調査区位置図……………11	第21図	調査Ⅰ区12号住居址実測図……………37
第4図	西谷遺跡Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ調査区 遺構配置図……………13	第22図	調査Ⅰ区12号住居址内出土遺物 実測図……………38
第5図	調査Ⅰ区1号住居址実測図……………15	第23図	調査Ⅱ区1号住居址実測図……………41
第6図	調査Ⅰ区2号・3号・4号住居址 実測図……………16	第24図	調査Ⅱ区1号住居址内出土遺物 実測図(1)……………42
第7図	調査Ⅰ区2号住居址内出土遺物 実測図……………17	第25図	調査Ⅱ区1号住居址内出土遺物 実測図(2)……………44
第8図	調査Ⅰ区4号住居址内出土遺物 実測図……………19	第26図	調査Ⅱ区1号住居址内出土遺物 実測図(3)……………45
第9図	調査Ⅰ区6号住居址実測図……………20	第27図	調査Ⅱ区1号住居址内出土遺物 実測図(4)……………47
第10図	調査Ⅰ区6号住居址内出土遺物 実測図……………21	第28図	調査Ⅱ区1号住居址内出土遺物 実測図(5)……………48
第11図	調査Ⅰ区7号住居址実測図……………22	第29図	調査Ⅱ区2号住居址実測図……………50
第12図	調査Ⅰ区7号住居址内出土遺物 実測図(1)……………24	第30図	調査Ⅱ区2号住居址内出土遺物 実測図……………51
第13図	調査Ⅰ区7号住居址内出土遺物 実測図(2)……………25	第31図	調査Ⅲ区1号・2号・3号住居址 実測図……………53
第14図	調査Ⅰ区7号住居址内出土遺物 実測図(3)……………27	第32図	調査Ⅲ区1号・2号住居址カマド 実測図……………54
第15図	調査Ⅰ区7号住居址内出土遺物 実測図(4)……………28	第33図	調査Ⅲ区1号住居址内出土遺物 実測図……………54
第16図	調査Ⅰ区7号住居址内出土遺物 実測図(5)……………30	第34図	調査Ⅲ区2号住居址内出土遺物 実測図……………55
第17図	調査Ⅰ区7号住居址内出土遺物 実測図(6)……………32	第35図	調査Ⅲ区3号住居址№1・№2カマド 実測図……………56
第18図	調査Ⅰ区9号住居址実測図……………33	第36図	調査Ⅲ区3号住居址内出土遺物 実測図……………57
第19図	調査Ⅰ区9号住居址内出土遺物		

第37図	調査Ⅲ区 4号住居址及びピカマド 実測図……………58	第42図	調査Ⅲ区 6号住居址内出土遺物 実測図……………65
第38図	調査Ⅲ区 4号住居址内出土遺物 実測図(1)……………60	第43図	調査Ⅲ区 7号・8号住居址 実測図……………67
第39図	調査Ⅲ区 4号住居址内出土遺物 実測図(2)……………61	第44図	調査Ⅲ区 8号住居址内出土遺物 実測図……………68
第40図	調査Ⅲ区 5号・6号住居址 実測図……………63	第45図	出土石器実測図(1)……………71
第41図	調査Ⅲ区 5号住居址内出土遺物 実測図……………64	第46図	出土石器実測図(2)……………73
		第47図	出土鉄器実測図……………75

表 目 次

第1表	周辺遺跡一覧表……………5
-----	---------------

図版目次

- 図版 1 (1) 調査区遠景 (北西ヨリ)
(2) 調査区遠景 (白川対岸ヨリ)
(3) 調査区近景 (表土剥ぎ前)
(4) 調査風景
(5) 調査 I 区遺構検出状態 (調査前)
(6) 調査 I 区遺構検出状態 (完掘後)
- 図版 2 (1) 調査 I 区 7 号住居址 (完掘後)
(2) 調査 I 区 10 号住居址 (完掘後)
(3) 調査 II 区遺構検出状態 (調査前)
(4) 調査 II 区遺構検出状態 (完掘後)
(5) 調査 II 区 1 号住居址検出状態
(6) 調査 II 区 1 号住居址遺物出土状態
- 図版 3 (1) 調査 II 区 1 号住居址 (完掘後)
(2) 調査 II 区 2 号住居址検出状態
(3) 調査 II 区 2 号住居址 (完掘後)
(4) 調査 III 区遺構検出状態 (調査前)
(5) 調査 III 区遺構検出状態 (完掘後)
(6) 調査 III 区 1 号・2 号・3 号住居址
検出状態
(7) 調査 III 区 1 号・2 号住居址内遺物
出土状態
(8) 調査 III 区 1 号住居址 (完掘後)
- 図版 4 (1) 調査 III 区 1 号住居址カマド
(2) 調査 III 区 2 号住居址 (完掘後)
(3) 調査 III 区 2 号住居址カマド
(4) 調査 III 区 3 号住居址 (完掘後)
(5) 調査 III 区 3 号住居址 No 1 カマド
(6) 調査 III 区 3 号住居址 No 2 カマド
(7) 調査 III 区 4 号住居址
(8) 調査 III 区 4 号住居址内遺物
出土状態
- 図版 5 (1) 調査 III 区 4 号住居址カマド
(完掘後)
(2) 調査 III 区 4 号住居址内遺物
出土状態 (刀子)
(3) 調査 III 区 4 号住居址内遺物
出土状態 (坏)
(4) 調査 III 区 4 号住居址内遺物
出土状態
(5) 調査 III 区 5 号住居址
(6) 調査 III 区 5 号住居址内出土遺物
(刀子と蓋)
(7) 調査 III 区 6 号住居址
(8) 調査 III 区 7 号住居址
(9) 調査 III 区 8 号住居址
- 図版 6 I 区 2 号住居址出土遺物
I 区 4 号住居址出土遺物
I 区 7 号住居址出土遺物
I 区 9 号住居址出土遺物
- 図版 7 I 区 12 号住居址出土遺物
II 区 1 号住居址出土遺物
- 図版 8 II 区 1 号住居址出土遺物
II 区 2 号住居址出土遺物
III 区 1 号住居址出土遺物
III 区 3 号住居址出土遺物
- 図版 9 III 区 4 号住居址出土遺物
III 区 8 号住居址出土遺物
- 図版 10 出土石器
出土鉄器

第I章 序 説

1. 調査に至る経過

建設省九州地方建設局熊本工事事務所では、一般国道3号熊本北バイパスや松橋バイパス等の建設が計画されているが、路線内に所在する埋蔵文化財の取り扱い方については従来から事前に本県教育委員会と協議が続けられている。埋れた歴史資料は、長く保存されることが最も本来の姿であろうが、道路建設の場合はどうしても壊さざるを得ないので、事前に十分な調査を行って、報告書を作成し長く記録保存をする方法が取られている。

予定路線が計画される段階では、県内の埋蔵文化財包蔵地を網羅した「熊本県遺跡地図」が利用され、適宜の協議ははじめられる。予定路線が決まると、路線内の埋蔵文化財包蔵地の所在有無の確認作業が依頼される。確認作業は、文献調査と現地踏査を重ねて充分な検討ののち報告を行っている。この作業で、遺跡の所在や発掘調査対象面積まで確認される場合と、試掘調査を行って検討を行う場合とがあり、後者の場合がより確実となる。

熊本北バイパス関係では、早くから協議が続けられ、昭和57年3月、10ヵ所の遺跡が所在することが報告されている。以来、長い年月を経ているが、路線の正式決定や用地買収が済み、工事が実施される前に調査が行われる事になった。

今回の西谷遺跡は前記報告で、白川左岸の河岸段丘上に立地する縄文～弥生時代の住居跡群が予想されるが、I調査地区は河川氾濫によってや、また、II・III調査地区では耕作の深掘りなどが原因して、双方に遺跡破壊が進んでいることが考えられた。従って、双方とも試掘調査を行って、遺跡の所在確認と調査対象面積を明確にすることが最も適当であると判断された。

そこで、昭和58年度はI調査地区のボックス建設予定地の試掘調査を実施し、明確な遺構、遺物が出土することにより、発掘調査に移っている。また、II・III調査地区も昭和59年度に試掘調査ののち、対象面積の確認を終えて発掘調査に移行している。

2. 調査組織

調査主体	熊本県教育委員会
調査責任者	森 一 則 (文化課長) 米 村 嘉 人 (前文化課長)
調査総括	隈 昭 志 (文化課主幹・文化財調査係長)
調査担当者	平 岡 勝 昭 (文化課参事・主査) 森 山 栄 一 (文化課嘱託) 浦 田 信 智 (文化課嘱託)

調査事務局 佐々木正典（文化課長補佐）
林田茂一（前文化課長補佐）
柴田和馬（文化課主幹・経理係長）
大塚正信（前文化課主幹・経理係長）
花田隆二（文化課参事）
谷喜美子（文化課主事）

調査指導及び協力者

三島格（肥後考古学会会長）
白木原和美（熊本大学教授）
甲元真之（熊本大学助教授）
友口恵子（熊本大学学生）
廣松秀子（熊本大学学生）
藤崎周太郎（熊本大学学生）

建設省九州地方建設局熊本工事事務所

他に本報告書を作成するにあたり熊本県文化財収蔵庫の方々の協力を得た。また熊本県文化課諸氏には、多大な指導及び助言を頂き、ここに記して深く感謝するものである。

第二章 遺跡の位置と歴史的環境

西谷遺跡は、阿蘇の南郷谷を源とする白川の左岸河岸段丘上で、熊本平野のほぼ中央付近で白川沿いに広がる熊本市の東部に位置し、行政区での遺跡所在地は熊本市下南部町字西谷である。今回調査した地区は、所在地は下南部町字西谷であるが熊本市報文及び遺跡地名表によると、新南部遺跡群の中で白川左岸河岸段丘の第1段目上に所在する新南部D遺跡に該当するものと考えられる。白川は、熊本市のすぐ東方に位置する菊池郡菊陽町あたりから西方に下るにしたがって複雑に蛇行する箇所が多くなり、当遺跡付近においてもこれは例外ではない。また、白川を挟む遺跡の対岸に当たる北側には黒石原台地の一端が広がり、立田山を含む丘陵が東西に延びている。白川の南側には、託麻原台地が東西に広がり、遺跡はこの台地より落ちた白川の河岸段丘の第1段目で、一番低い部分に位置しており海拔標高約24m前後を測る。

当遺跡が位置する、白川流域の河岸段丘上や白川中流域の託麻原台地や黒石原台地上には、多くの遺跡が点在し熊本市でも有数の遺跡群地帯に数えられる。遺跡は、旧石器時代から縄文、弥生、古墳時代を含めた近世時期までの各時期にわたり、遺跡が重複しながら点在している状態である。ここでは、当遺跡周辺で白川を中心に述べることにする。まず旧石器時代であるが、白川北岸の立田山麓天拝山^{註1}斜面の天拝山遺跡よりサヌカイト製のポイントが発見され、また白川南岸の下南部^{註2}新南部遺跡では、東海第二高等学校近くの畑地からナイフ形石器が橋本誠二氏の手により採集されているが、まだまだ発見例が少なく不明な部分が多く今後の開発等により遺跡数が増えるのは必至であろう。縄文時代以降になると格段に遺跡数が増えるため、ここでは主要遺跡及び近年調査が実施された遺跡等の一部について述べたい。まず縄文時代は、新南部遺跡群^{註3}と呼ばれる早期から晩期に至る大量の遺物が採集された遺跡がある。この遺跡はA～D地区に別れており調査は行われていない。さらには、縄文後期の土器及びそれに伴う土偶が多く出土した上南部遺跡^{註4}、縄文後期の鐘ヶ崎式土器を中心とした遺物が出土した渡鹿貝塚^{註5}、縄文後期初頭の土器で把手の上にW字または逆W字に粘土紐を張り付ける特徴を持つ北久根山式土器の標識遺跡^{註6}となっている北久根山遺跡は、昭和48年に熊本市教育委員会の手により調査されている。他には、縄文早期～晩期に至るまでの土器を出土し知名度が高いカプト山A・B遺跡^{註7}、昭和37年熊本大学により調査が行われ縄文後期の土器を中心に土偶、土製勾玉、各種の石器等が出土し、配石遺構確認の報告がなされている竹ノ後遺跡^{註8}等がある。また対岸には、縄文時代早期の押型文土器から縄文時代後・晩期の遺物さらには古代までの遺物が採集されている竜田内遺跡^{註9}があり、この遺跡は当遺跡と同様一般国道3号熊本北バイパス関連の事業として、昭和61年度に一部調査を実施する予定である。弥生時代の遺跡としては、昭和53年熊本市教育委員会により調査された後期の堅穴住居址を主体として土器、大量の石包丁、磨製石鏃等が出土した下南部遺跡^{註10}、昭和35年熊本市教育委員会と熊本大学の合同により調査され、立田町の北側



第1图 周边遺跡図

丘陵斜面より人骨が残った須玖式の合口壙棺が出土した^{註11}迫ノ上壙棺遺跡、さらに昭和32年には乙益重隆・東光彦両氏により調査され人骨の残る中期の合口壙棺が出土した^{註12}竹ノ後壙棺遺跡、また前述した北久根山遺跡でも中期の須玖式の大型壙棺が検出されており、周辺には壙棺遺跡が多く点在している。古墳時代の遺跡の場合は、多くは埋葬施設で中でも横穴古墳がそのほとんどである。ただし、開発等により破壊を受けたものが数多くあるものと考えられる。付近には、昭和30年乙益・前田一洋両氏により緊急調査され、6世紀末と考えられる6基の横穴古墳^{註13}が検出された宇留毛小磯橋際横穴群、また他にもこの宇留毛の丘陵地帯には、宇留毛浦山第一横穴群等を含む多くの著名な古墳群が存在している。しかし、現在の所これに付随する竪穴住居址等の実際の生活に関連するような遺構の調査例は少なく、前述した下南部遺跡の調査により、カマドを付設する竪穴住居址が土師器等の遺物を伴って検出されている程度で、今後開発等による土木工事の増加により集落、水田址等の生活跡の解明は多いに期待されるものである。

註1 大城康雄・廣瀬正照他『下南部遺跡調査報告』熊本市教育委員会・熊本市住宅協会 1979年 の本文中に記載されている。

註2 註1と同じ

註3 上野辰男・東光彦他『熊本市東部地区文化財調査報告書』熊本市教育委員会 1971年

註4 富田紘一『上南部遺跡A地点調査報告』熊本市教育委員会 1979年

註5 富田紘一『渡鹿遺跡群発掘調査概報』熊本市教育委員会 1973年

註6 註5と同じ

註7 上野辰男・東光彦・平岡勝昭『熊本市北部地区文化財調査報告』熊本市教育委員会 1969年

註8 伊藤奎二 以下は註7と同じ

註9 一般国道3号熊本北バイパス道路建設工事に伴い、昭和61年度に一部発掘調査を実施する予定である。

註10 註1と同じ

註11 東光彦 以下は註7と同じ

註12 註8と同じ

註13 乙益重隆『宇留毛小磯橋際横穴群』熊本市北部地区文化財調査報告 熊本市教育委員会 1969年

註14 上野辰男 以下は註7と同じ

第三章 調査の概要

1. 調査日誌抄

昭和58年度の建設省事業計画の中に、一般国道3号熊本北バイパス予定路線である熊本市下南部地区の試掘調査を実施する計画が含まれていたが、一般国道3号松橋バイパスの曲野遺跡の調査との兼ね合いより、年明けの59年1月より調査員1名を派遣して試掘調査を実施することにした。試掘調査は、1月18日より開始し、調査予定の3ヶ所のボックス部分の畑に計5本の試掘トレンチを設定し、層序の確認、遺物の有無、遺構の有無の確認を行った。トレンチ内からは、それぞれ縄文土器、弥生土器等が検出され、またピット、住居址等の遺構も検出された。遺構の残存状態も良好であることより、2月7日までで試掘調査を終了し、調査結果を建設省九州地方建設局熊本工事事務所宛てに報告した。2月10日現地において、建設省と県文化課の両者による現地検討会を行い、試掘の結果報告と合わせて今後の本調査について協議を行った。協議の結果、早速Ⅰ地区については今年度中に本調査を実施することで両者が合意し、引き続き2月14日より本調査にはいることとなった。

2月14日 調査器材の運搬、作業員の依頼、調査区の設定を行う。

2月16日～20日まで機械による表土剥ぎを行う。

2月20日 グリッド杭打ちと平行して、遺構検出作業を開始する。

3月に入り、住居址が検出され始める。全体的に遺構の残存状態は良好だが、硬化面だけとか、カマドのみしか確認出来ない住居址が数軒認められる。いずれも時期的には新しく、平安時代の住居址と考えられ、中心となる弥生時代の住居址や土壌等の遺構は、残りが非常に良好である。

3月13日 ほぼ遺構の検出を終了。現在のところ確認した住居址は9軒であるが、あと数軒増えるものと考えられる。今後の調査工程の都合上、調査前の全景写真撮影を行う。

3月14日 住居址ごとの調査前の写真撮影を行った後、住居址の調査を開始する。

3月21日 住居址を新たに1軒検出。10号住居址と番号をつけ調査を開始する。

3月26日 新たに2軒の住居址を検出。調査を開始する。

3月31日 本日まででⅠ地区の遺構の発掘作業を終了し、実測作業を残すのみとなった。

4月中に残りの作業も終了し、Ⅰ地区本調査の全工程を無事終了する。

59年12月3日 本遺跡の残り地区、Ⅱ・Ⅲ地区の本調査を本日より開始する。まずⅡ・Ⅲ地区にトレンチを確定し、表土剥ぎ前の土層再確認作業を行う。平行して調査地区の範囲確認も行う。

12月10日より、機械による表土剥ぎ作業を開始し、13日までで終了。14日よりⅡ・Ⅲ地区の

遺構確認作業を開始する。遺構確認作業が思いの外手間取ったが、後の作業日程の都合により27日までで終わらせ、年明けの60年1月7日より各地区遺構の発掘調査を開始することで、27日の作業を終了する。確認された遺構は、II地区が住居址2軒+ a で、すべてが出土遺物より弥生時代の遺構であり、III地区は住居址9軒で弥生時代と平安時代両時期が認められる。

60年1月7日 年が明け、本日より調査を再開。II地区全体の調査前写真撮影及び各遺構ごとの調査前写真撮影を行う。

1月8日 III地区全体の調査前写真撮影、及び各遺構ごとの調査前写真撮影を行う。

1月9日 II地区の方から発掘作業を開始する。

1月26日 確認当初2軒切り合いと考えていた2・3号住居址は、調査の結果1軒単独の住居址と判明、番号を2号住居址とする。

1月28日 2号住居址と並行して、1号住居址の調査も開始する。

1月29日 2号住居址の遺物出土状態の写真撮影を行った後実測を開始する。住居址は大型で中央に炉を持ち、4本柱で西壁に幅80cm程のベッドが認められる。1号住居址の覆土中央付近より多量の遺物の集積が認められる。

2月7日 1号住居址の遺物出土状態写真撮影を行う。雨の日が多く作業がなかなかかからない。

2月12日 II地区の調査がほぼ終了したため、III地区の調査に移り調査を開始する。

2月14日 III地区の7～10号住居址の調査を開始する。

2月20日 III地区の1～3号住居址及び5号住居址の調査を開始する。5号住居址はカマドだけの検出で住居址の大きさは不明。またカマド内より須恵器蓋と鉄製刀子が出土している。

2月26日 II地区の住居址実測がすべて終了したため、全体の清掃を行う。全体の仕上げ写真撮影と、遺構別の仕上げ写真撮影を行い、II地区の調査を終了する。

3月2日 4号住居址と1号住居址のカマドの調査を開始する。

3月4日 1～3号住居址の調査をほぼ終了。1～3号住居址は互いに切り合っているが、調査の結果3号住居址が一番古く、次に2号住居址、1号住居址と順になることが判明。この3軒の住居址は出土遺物等より、すべて平安時代の遺構である。また7号と8号及び1号住居址が互いに切り合っているが、土色の違いより1号住居址が1番新しく、次に7号住居址、8号住居址の順になることを確認。よってこの5軒の住居址の新旧関係は、新しい遺構より1号住居址→2号住居址→3号住居址→7号住居址→8号住居址となる。

3月6日 4号・6号住居址の調査を開始する。両住居址ともカマドの施設が確認されることより平安時代の住居址と考えられる。1～3号住居址およびカマドの調査を終了する。

3月12日 7号・8号住居址の調査を開始する。7号住居址は、小判形で中央付近に硬化面を確認。時期は出土遺物より弥生時代と考えられる。8号住居址も7号住居址と同じ弥生時代

であるが、7号住居址に切られているため古い時期である。

3月20日 1・2・3・4号住居址の仕上げ、写真撮影、実測も終了する。

3月22日 6・7・8号住居址の実測を開始する。

3月28日 5・6・7・8号住居址の仕上げ写真撮影及び全体の仕上げ写真撮影を行う。

3月29日 II地区、III地区の土層断面実測を行い、すべての調査を午前中に終了する。午後には器材の撤収を行う。

2. 層位

当遺跡の層序は、熊本平野に普遍的に見られるもので阿蘇山の火山灰堆積層である。しかし立地が白川の河岸段丘最下段である1段目であることから、河川の氾濫により間に砂層が含まれること、表土が厚いなどの特徴が認められる。当地は現在でも水田として利用されており、昔より肥沃な土壌として同じように利用されていたことが考えられる。ここではI地区・II地区・III地区の3地区共に、層の厚さに若干異なりがあったり、抜ける層があったりするが、基本的な層は同じであることから、以下は層ごとの説明を加えるものである。

I層 表土1 耕作土層である。調査地区により層の厚さは異なるが約30cm前後で、厚い所では約80cmを測る。

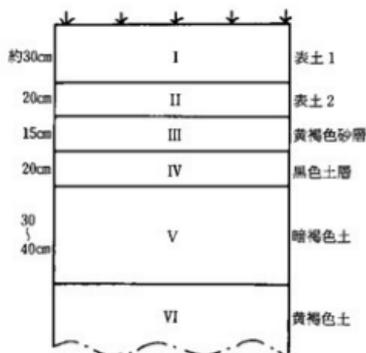
II層 表土2 本来はI層と同色であることから同じ層と考えられるが、ここでは一応、耕作を受けた層と受けていない層に分層し、II層は表土の耕作を受けていない層に当る。厚さは全地区共にほぼ同じで16cmから20cmを測る。

III層 黄褐色砂層 白川の氾濫による砂の堆積層

IV層 黒色土層 粘性が少なくサラサラしており、火山灰土の黒ボクと呼ばれるものである。厚さは約20～22cmを測る。中には古代以降の遺物が含まれる。

V層 暗褐色土層 IV層同様粘性が少なくサラサラしている。厚さは約22～28cmを測り、中には弥生時代の遺物が含まれる。IV層からVI層の暫移層と考えられる。

VI層 黄褐色土層 粘性が弱く乾燥するとサラサラしており、通称「キナコ」と呼ばれる層



第2図 層位概略図

である。この中には、Ah（アカホヤ）と呼ばれる鬼界アカホヤ火山灰の火山ガラスが含まれる。当遺跡の住居址等の遺構確認面は、この層で中には縄文時代の遺物が含まれている。

3. 調査地区の概要

(1) I地区

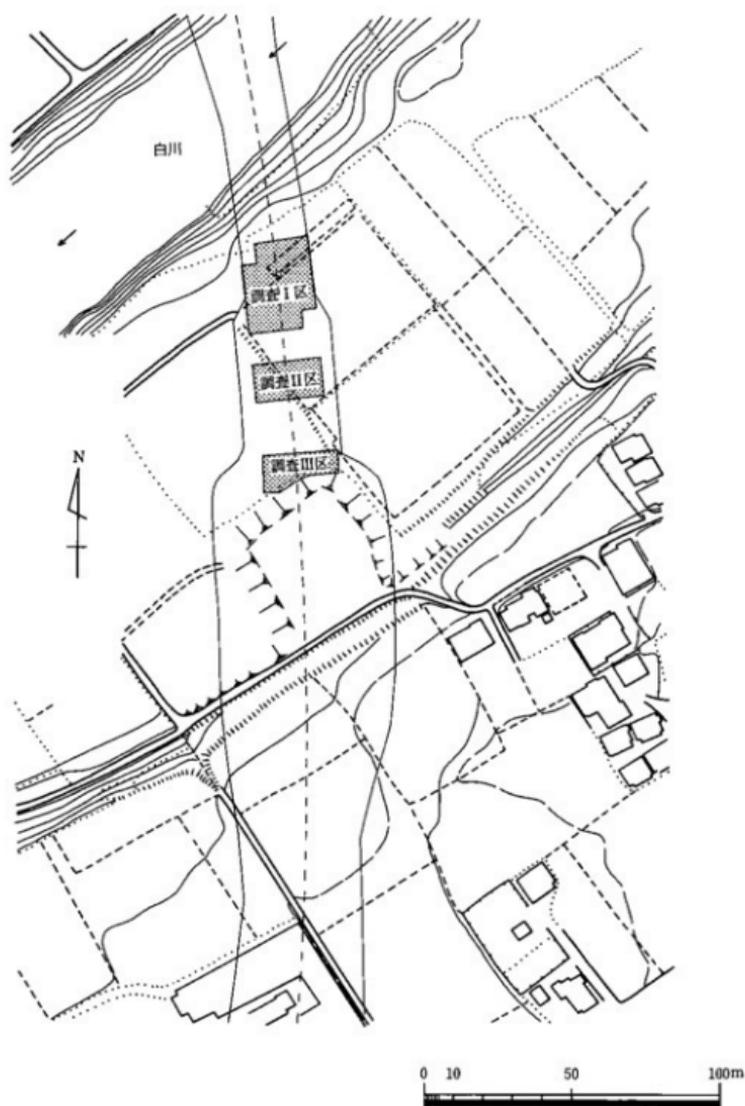
白川が一番低い河岸段丘上で、3つの調査地区の中では一番北側の白川近くに位置している。調査面積は、調査地区の中で一番広く600㎡程である。当地区より検出された遺構は、竪穴住居址9軒およびピット群で、住居址は調査区全体に広がっている。住居址の時期は、弥生時代と平安時代の2時期が認められた。弥生時代の住居址は遺構の残存状態は非常に良好であるが、平安時代の住居址は残存状態が悪く、硬化面だけおよびカマドだけの検出である。遺物は、多量に出土しており、弥生土器、平安時代の須恵器・土師器の他、弥生時代の磨製石鏃・石匙・石斧等の石器、鉄製品が出土している。

(2) II地区

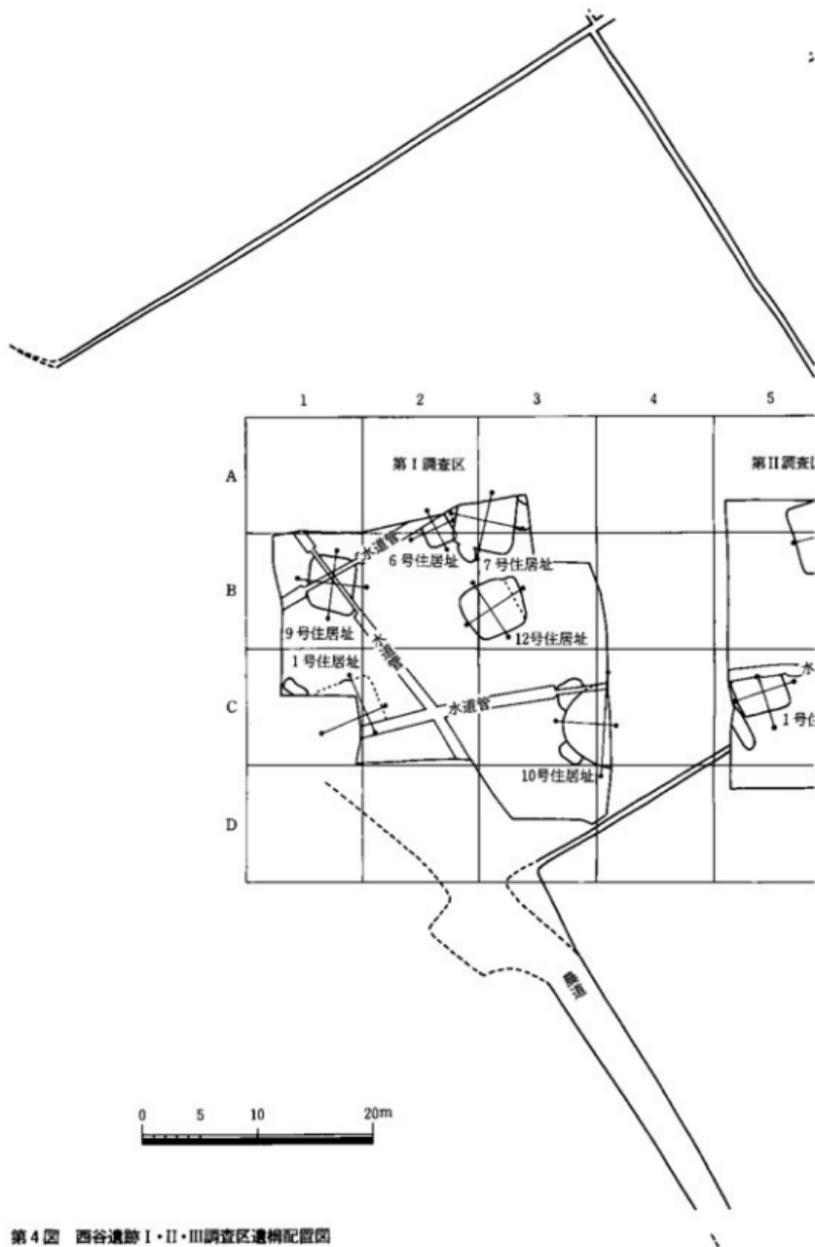
I地区の南へ10m程離れた場所で、水田の中である。当地区の調査面積は、東西約25m×南北約14mのほぼ長方形で400㎡程になり、I地区より狭い面積である。遺構確認面は、河川の氾濫による土砂の堆積によるためか深く約80～90cmを測る。当地区より検出された遺構は、竪穴住居址2軒およびピット群で、住居址の在り方は希薄であるが、遺跡の範囲はまだ周辺に広がるものと考えられる。竪穴住居址は2軒共に弥生時代のもので、互いに離れており切り合いはない。また竪穴住居址の残存状態は非常に良好である。遺物は、弥生土器、磨製石鏃、砥石、鉄製品等が出土している。

(3) III地区

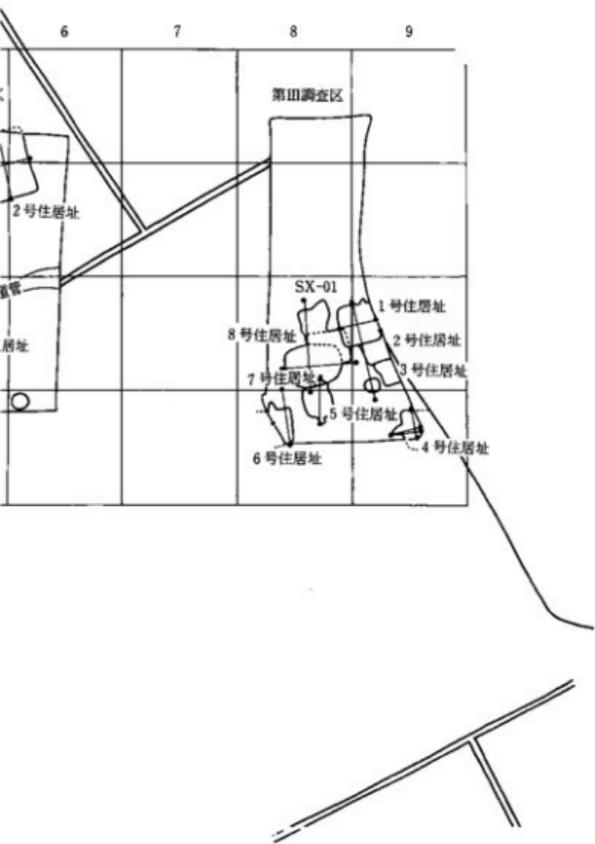
II地区の南へ18m程離れた場所で、II地区同様水田の中である。当地区の調査面積は約500㎡で、調査地区のすぐ南側は高さ5m程の土盛りがあり土棄て場となっている。よって一部調査を行うことが出来ないため、調査面積が当初の予定面積より少々狭くなっている。遺構確認面は、II地区同様河川の氾濫でかなり土砂が堆積しているためか深く、120～140cm程を測る。当地区より検出された遺構は、竪穴住居址8軒とピット群で、住居址は調査区の半分より西側に集中して作られており、東側半分には全く認められない。このことより遺跡は、西側および南側にはまだ広がるが、東側へは広がらず、遺跡範囲の東限とも考えられる。遺構の密度は濃く、ほとんどの住居址が互いに切り合っている。竪穴住居址は出土遺物等より、弥生時代のものと、カマドの施設を住居址内に持つ平安時代のものとの2時期に分けられるが、互いに切り合っているため、遺構の残存状態はあまり良くない。遺物は、弥生土器、平安時代の須恵器・土師器、布目瓦、石器、土製品、鉄製品等が多量に出土している。



第3図 西谷遺跡周辺地形図及び調査区位置図



第4図 西谷遺跡I・II・III調査区遺構配置図



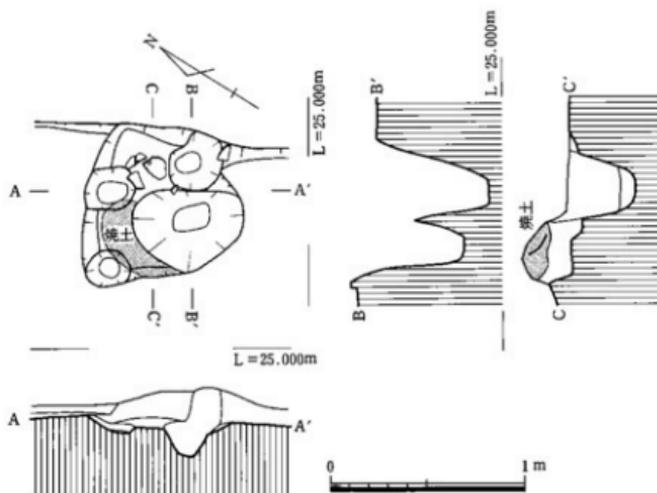
第IV章 遺構と遺物

1. I地区

住居址と出土遺物

1号住居址 (第5図)

調査I区、1-Cグリッド内に検出した竪穴住居址である。住居址は、かなり削平を受けており、壁面部分の検出はできずカマド部分だけの検出である。このため住居址の平面形および規模については不明であるが、カマドの位置関係より、東西に主軸を取った隅丸方形又は隅丸長方形の住居址と考えられる。検出されたカマドは、東壁であろうと考えられる部分に検出されたが、後世のピットによりかなり攪乱を受け主部分が破壊されているため、カマドの形態については不明である。またカマド周辺には硬化面、柱穴等の検出はなかった。住居址の時期については、遺物の出土が少ないのと、遺構全体が削平されていることより不明であるが、カマドの形態から平安時代の住居址と考えられる。

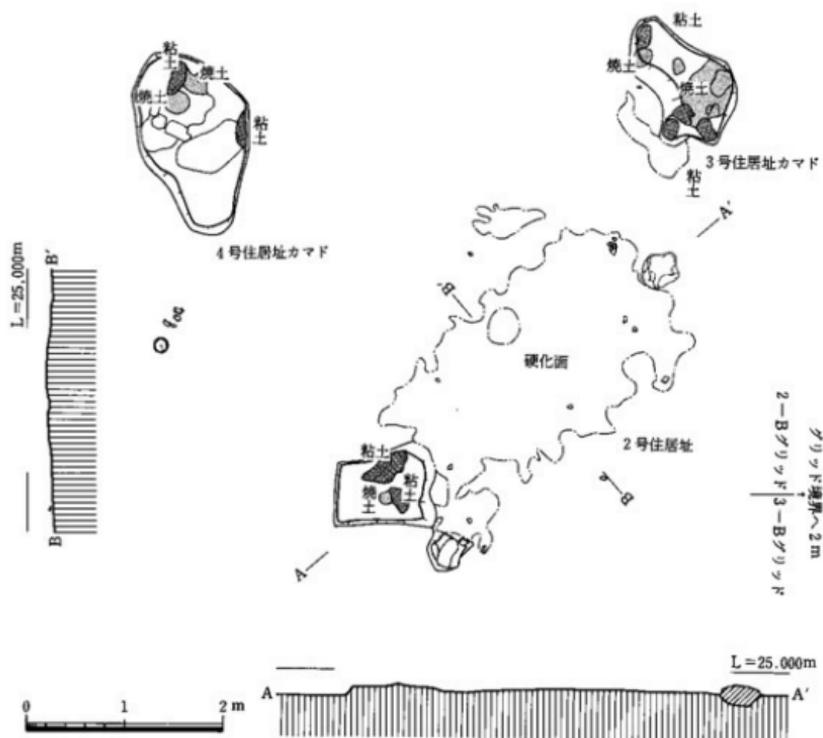


第5図 調査I区1号住居址実測図

2号住居址 (第6図)

調査I区、2・3-Bグリッド内に検出した竪穴住居址である。住居址は、かなり削平を受けており、カマドの跡と硬化面の範囲しか確認できなかった。検出されたカマドは、破壊され

ており、黄灰色粘土と焼土が確認されただけで、原形はとどめていない。硬化面は、かなりの範囲で残っているが住居址の規模及び軸方向を推定するには至らない。また、柱穴にしても1本も検出されなかった。遺物は、硬化面部分より土師器片が数点出土していることから、平安時代の住居址と考えられる。

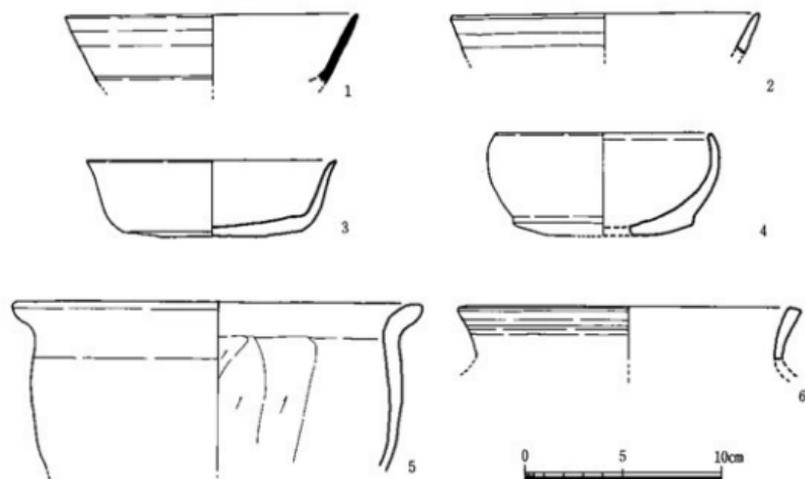


第6図 調査1区2号・3号・4号住居址実測図

出土遺物 (第7図)

1. カマド内より出土した須恵器環の口縁部片である。底部が欠失しているため高台が付くかどうか不明で、ここでは一応環とした。法量は復原口径15cm、現存高3.6cmを測る。体部は、底部より外傾しながらほぼ直線的に立ち上がり口縁端部に至る。口縁端部は、やや尖がり気味で外面には稜が残る。器面調整は、内外面共にヨコナデで、胎土は緻密、焼成はやや不良である。
2. 1と同じく環または高台付環と考えられる口縁部片で土師器である。法量は、復原口径

15.2cm、現存高1.9cmを測る。体部は、1と同じく底部から外傾しながらほぼ直線的に立ち上がり口縁端部に至るもので、口縁端部はやや尖がる。器面調整は、内外面共にヨコナデで、胎土は小石を多く含み、焼成は良好である。



第7図 調査Ⅰ区2号住居址内出土遺物実測図

3. 土師器杯のほぼ完形品である。法量は、口径12.7cm、底径9.1cm、器高3.8cmを測る。体部は、底部より外傾しながら立ち上がり口縁部で外反し口縁端部に至る。口縁端部は、尖がり気味である。器面調整は、内外面共にヨコナデで胎土は密で赤色土粒を含み、焼成は良好である。
4. 体部が外傾しながら立ち上がり、中位付近で大きく内湾しそのまま口縁端部に至る土師器で、坏であろうと考えられる。土器は、ほぼ完形で法量は口径10.9cm、底径9.1cm、器高5.2cmを測る。器面調整は、内外面共にヨコナデで外面の体部下半にはスが付着している。胎土は密で赤色土粒を含み、焼成は良好である。
5. 土師器甕の口縁部片である。法量は、復原口径21cm、現存高8.5cmを測る。器形は、胴部がやや膨らみ内湾しながら頸部に至り、頸部から口縁端部にかけて大きく外反する。口縁端部はやや尖がり気味である。器面調整は、内面の口縁部がヨコナデ、胴部から頸部にかけては上方向のヘラ削り、外面はヨコナデである。胎土は密で砂粒を含み、焼成はやや不良である。
6. 土師器壺の口縁部片である。法量は、復原口径17.4cm、現存高2.7cmを測る。器形は、頸部より下半が欠失しているが、胴部が大きく膨らみくの字状に口縁部が大きく外反するも

のと考えられる。器面調整は、内外面共にナデで、胎土は密、焼成は良好である。

3号住居址 (第6図)

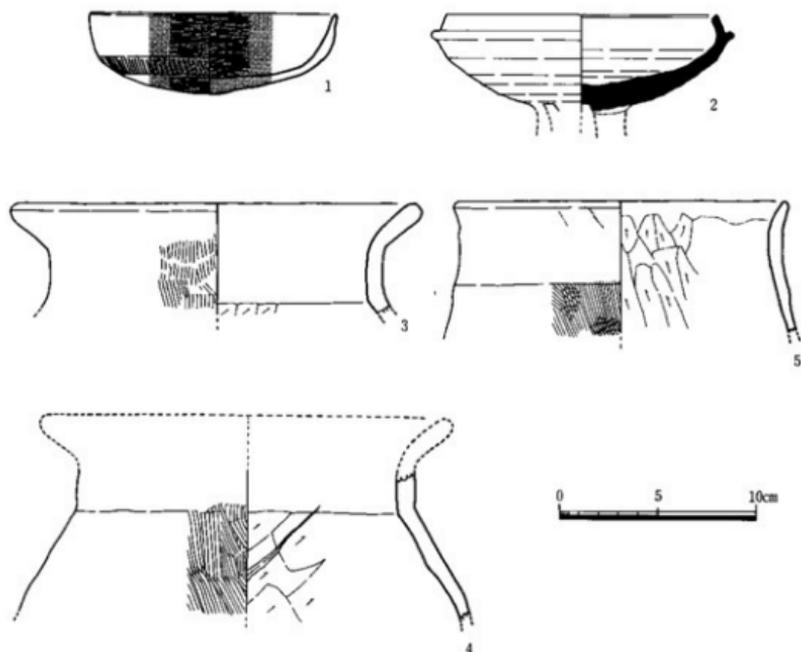
調査I区、2-Bグリッド内に検出した竪穴住居址である。住居址は、かなり削平を受けており、そのほとんどが残らず、カマドの跡と硬化面が少し検出されたのみである。また柱穴についてもまったく検出できなかったため、住居址の規模および軸方向等についてはまったく不明である。検出されたカマドも、かなり破壊されており黄灰色粘土が散乱している状態で原形はとどめていなかった。カマドの南側約1mの部分に別の硬化面の広がり認められたが、カマドが設けられていることから、別住居址と考え3号住居址と遺構番号を付けた、住居址カマド付近からは、遺物の出土がないため時期判断はできないが、残存しているカマドより平安時代の住居址であろうと考えられる。

4号住居址 (第6図)

調査I区、2-Bグリッド内に検出した竪穴住居址である。住居址は、3号住居址同様かなり削平を受けており、カマドの跡だけの検出である。カマド部分には、黄灰色粘土と焼土が残っておりその痕跡をとどめるだけである。周囲には、硬化面および柱穴等まったく認められないことより、住居址の規模および軸方向については不明である。遺物は、カマドの南側より、土師器、須恵器が数点出土しており、これを即座に当住居址の時期判断に用いることはできないが、カマドの特徴と考え合わせれば、時期は平安時代の住居址であろうと考えられる。

出土遺物 (第8図)

1. カマド付近より出土した土師器坏で、ほぼ完形品である。法量は、口径12.6cm、器高4.2cmを測る。器形は、底部が丸く、体部がやや外傾しながらストレート気味に口縁端部に至り、口縁端部は丸味を持ちながらやや尖がり気味である。器壁は薄く、口縁部はあまり広がらない。器面は、内外面共に細いヘラ状の工具で丁寧に研磨されており、また外面の底部と体部の境には、幅8mm程の区画細沈線の中に暗文らしきものが観察できる。また内外面全体に黒色の漆を塗っている。胎土は密で、焼成は良好である。
2. 1と同じくカマド付近から出土した。須恵器高坏の坏部片である。法量は、復原口径13.7cm、現存高5.1cmを測る。坏部は、やや内湾気味に立ち上がり、口縁部より1cm下に受け部が短かくやや斜め上方につまみ出され、口縁部は受け部よりストレート気味に内斜する。外面には、稜が明瞭に残る。脚部は、ほとんど欠失しており接合部付近がわずかに残るだけにすぎないが、脚部には、3個の透かしが坏部との接合部から下方に細長くはいるものと考えられる。器面調整は、内外面共にヨコナデで、胎土は密、焼成はやや不良である。特徴より古墳時代で六世紀前半のもので住居址の中にはいり込んだものであろう。



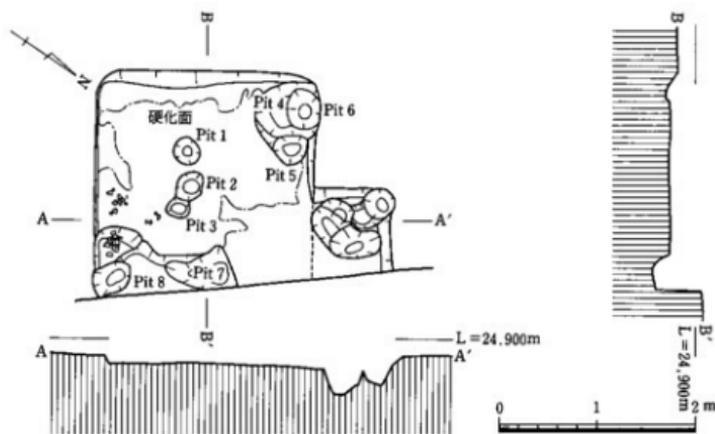
第8図 調査Ⅰ区4号住居址内出土遺物実測図

3. カマド付近より出土したもので、土師器壺の口縁部片と考えられる。法量は復原口径20.3cm、現存高5.8cmを測る。器形は、頸部で一度締まりそのままほぼ直に立ち上がり口縁部で外反する。器面調整は、内面がへら削りとナデ、外面がハケ目である。胎土は密で径1mm程の石粒を含み、焼成は良好である。
4. 同じくカマド付近より出土した土師器壺の口縁部と考えらる。口縁部は欠失するが器形の特徴は3と全く同じである。法量は、復原口径20.4cm、現存高7.4cmを測る。器面調整は、内面がへら削りとナデ、外面がハケ目とナデである。胎土は密で、焼成は良好である。
5. 同じくカマド付近より出土した土師器壺と考えられる口縁部片である。法量は、復原口径16.6cm、現存高6.8cmを測る。器形は、胴部から内傾しながら立ち上がり、口縁部で若干外反するもので、器面調整は内面が上方向へのへら削り、外面がハケ目とヨコナデである。胎土は、密で径1mm程の石粒を含み、焼成は良好である。

6号住居址 (第9図)

調査Ⅰ区、2-Aグリッド内に検出した竪穴住居址である。住居址東側が調査区外へ延びる

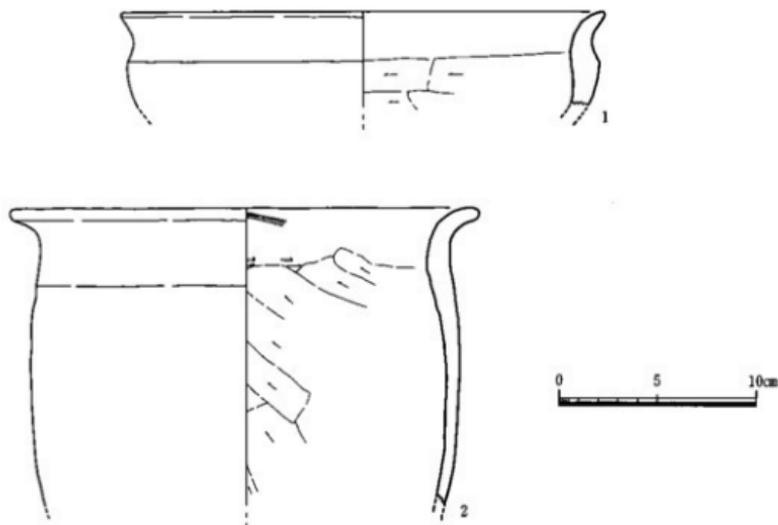
為、完全には調査できなかつたが住居址の規模はある程度推定できる。住居址は、主軸をN-54°-Eに取り作られ、南壁が2.23m、東壁が検出長で2.32mの隅丸方形または隅丸長方形プランの住居址と考えられる。住居址内からは、ピットが8個検出されたが、明らかに当住居址に伴う柱穴と判断されるものはない。住居址のほぼ中心に3個のピットがあるが、その内のピットNo 2を中心に硬化面が住居址全体に広がり、西側と東側は壁近くまで広がっている。ピットNo 2内埋土に、焼土粒、炭化粒の混入は認められなかつたが、炉址の可能性が十分考えられる。住居址内からは、遺物の出土は少なく、また小型であることより一般的な居住遺構より、特別な遺構とも考えられる。時期は出土遺物より平安時代の住居址である。



第9図 調査I区6号住居址実測図

出土遺物 (第10図)

1. 土師器の口縁部片である。土師の法量は、復原口径24.7cm、現在高4.4cmを測る。器形は、胴部が膨らみ、頸部は内側に屈曲した後口縁端部に向って外反する。口縁端部はやや尖がり気味である。底部は不明であるが、胴部がわりと大きく内側に湾曲しながら延びていることから浅い形態の土器で、鉢または浅鉢と考えられる。器面調整は、内面の口縁部がヨコナデ、下半がヘラ削り、外面はヨコナデでありススが付着している。胎土は、1~2mm程の石粒を多く含み、焼成は良好である。
2. 土師器壺の口縁部から胴部にかけての破片である。法量は、復原口径24cm、現存高15cmを測る。器形は、胴部が直線的であり膨らまないスマートな形で、頸部から大きく外反し口縁端部が丸くなる。土師の最大径が口縁部にある。器面調整は、内面の口縁部がハケ目

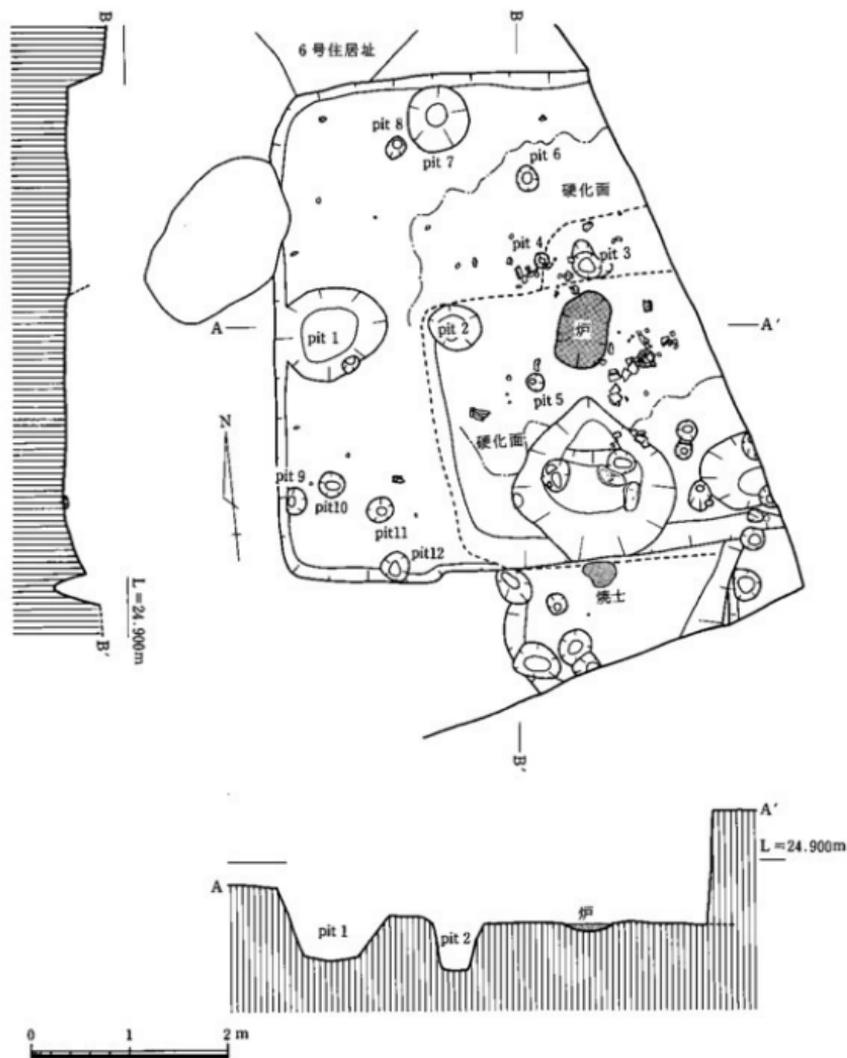


第10図 調査I区6号住居址内出土遺物実測図

の後ヨコナデ、下半部が左上がりのヘラ削り、外面はヨコナデである。胎土は小石を多く含み、焼成は良好である。

7号住居址 (第11図)

調査I区、2・3-A・Bグリッド内より検出した竪穴住居址である。住居址は、東側部分が調査区域外へ延びる為、東南コーナー部と東北コーナー部が調査できず正確な規模は不明であるが、長辺が5.1m以上で、短辺が5.04mの隅丸方形か隅丸長方形プランの住居址と考えられ、主軸をN-82°30'-Eに取り作られている。深さは約20cmを測り、わりと残りは良い方である。住居址内からは、いくつかのピットが検出されたが、柱穴と断定できるものはコーナー部分には見当らず、中心軸に乗るピットNo 2が位置及び深さから柱穴の可能性が強く、2本柱の住居址と考えられる。住居址のほぼ中央部には、80cm×50cmで断面が浅い皿状で楕円形プランを呈し、中に焼土の詰まった炉址を検出した。硬化面は、この炉址を中心に四方に広がっている。住居址西壁中央付近には、1m×0.94mで深さ45cm程の楕円形ピットが検出された。これは、中より遺物の出土がないため断定はできないが、貯蔵穴の可能性が十分考えられる。また住居址内の南側床面に、2.8m×3.2m以上の長方形の段落ち部分が認められ、これは調査当初、別の住居址の床面ではないかと考えられたが、埋土観察および遺物の出土状態、硬化面の延び方等により、別住居址が切り込んでいるのではなく、当住居址1軒単独であると判断した。

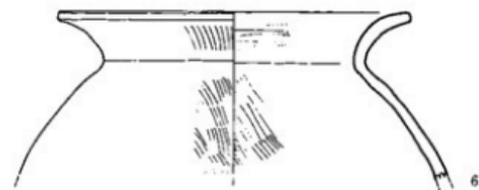
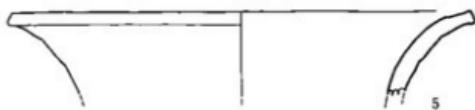
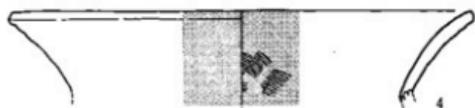
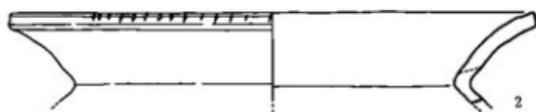
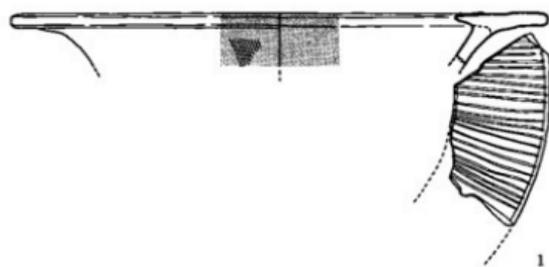


第11図 調査I区7号住居址実測図

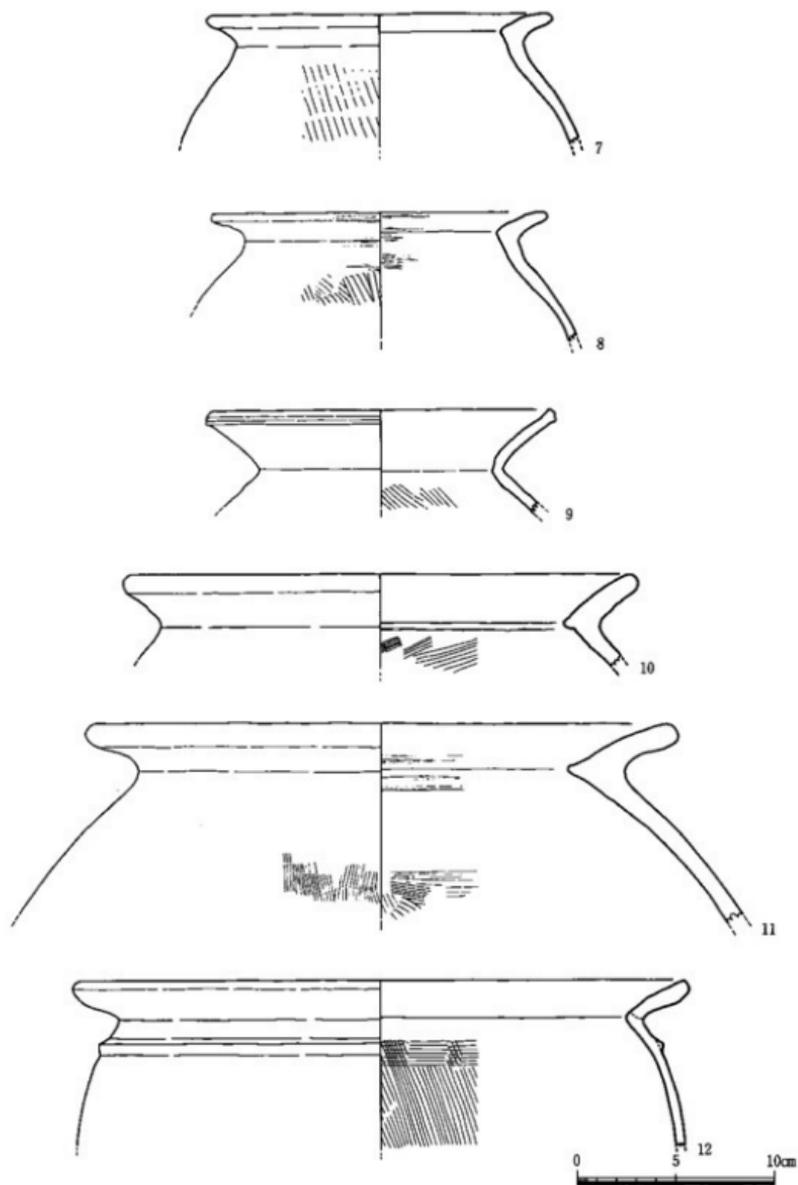
住居内からは、多くの遺物が出土したが、その特徴より当住居址は弥生時代後期の時期と考えられる。

出土遺物 (第12～17図)

1. 高坏の坏部と考えられる口縁部片である。土器の大部分は欠失するが、法量は、復原口径27.6cm、現存高2.8cmを測る。体部より外傾しながらストレート気味に立ち上がってきた先端部に、幅4.7cmの口縁部を内面に1cm程突出させ水平に取り付け、変形のT字形口縁を作り出している。器面全体には赤色顔料を塗布しており、また、口縁内面部分には暗文を施している。器面調整は、ハケ目痕が一部認められることからハケ目の後ナデで仕上げたものと考えられる。胎土は密で径1mm程の石粒を若干含み、焼成は良好である。
2. 壺の口縁部片である。頭部より下方を欠失するため全体は不明であるが、復原口径27.1cm、現存高4.8cmを測る。頭部は、くの字状に屈曲した後口縁部が外反しながら開き、口縁端部はナデで平坦にした後ヘラによる刻目を施している。器面調整は、内外面共にナデで、胎土は密で径1mm以上の石粒を多く含み、焼成は良好である。
3. 同じく壺の口縁部片で、復原口径23.0cm、現存高4.1cmを測る。口縁部は、頭部より大きく開きながら外反し、口縁端部は平坦にナデている。器面調整は、内外面共にハケ目の後ヨコナデで胎土は密で砂粒を含み、焼成は良好である。
4. 同じく壺の口縁部片で、復原口径23.9cm、現存高5.0cmを測る。口縁部はやや外反気味に開き、口縁端部はナデで平坦にしている。内外面全体には赤色顔料を塗布しており、器面調整はハケ目の後ヨコナデで、胎土は密でわずかに砂粒を含み、焼成は良好である。
5. 同じく壺の口縁部片で、復原口径24.0cm、現存高4.3cmを測る。口縁部は、大きく開きながら外反し、口縁端部はナデで平坦にしている。器面調整は、内外面共にヨコナデで、胎土は密で砂粒を含み、焼成は良好である。
6. 同じく壺の口縁部片である。土器は、口縁部から胴部上半までのもので、復原口径18.2cm、現存高8.4cmを測り、若干小型になる。胴部は大きく膨らみ最大径が中位付近まで下がり球状になるものと考えられる。頭部は、くの字状に屈曲した後口縁部が外反しながら開く。口縁端部はナデで平坦にしている。外器面には、化粧土を塗布した痕跡が認められ、器面調整は内外面共にハケ目の後ヨコナデ、胎土は密でわずかに砂粒を含み、焼成は良好である。
7. 同じく壺の口縁部から胴部にかけての破片で、復原口径17.8cm、現存高6.7cmを測る。土器は小型のもので、胴部が大きく膨らみ最大径が中位付近まで下がるものと考えられる。頭部は、くの字状に屈曲した後口縁部が短かく外反する。器面調整は、内面がナデ、外面がハケ目の後ナデで、胎土は密で砂粒を含み、焼成は不良である。
8. 7と同様小型の壺の破片で復原口径17.3cm、現存高6.4cmを測る。土器は、胴部が大きく膨らむもので、頭部でくの字状に屈曲した後口縁部が短かく外反する。口縁内部には、わずかにスガが付着し、化粧土を塗布した痕跡が認められ、器面調整は内面がナデ、外面がハケ目の後ナデである。胎土は、密で砂粒および径1mm以上の小石を若干含み、焼成は良



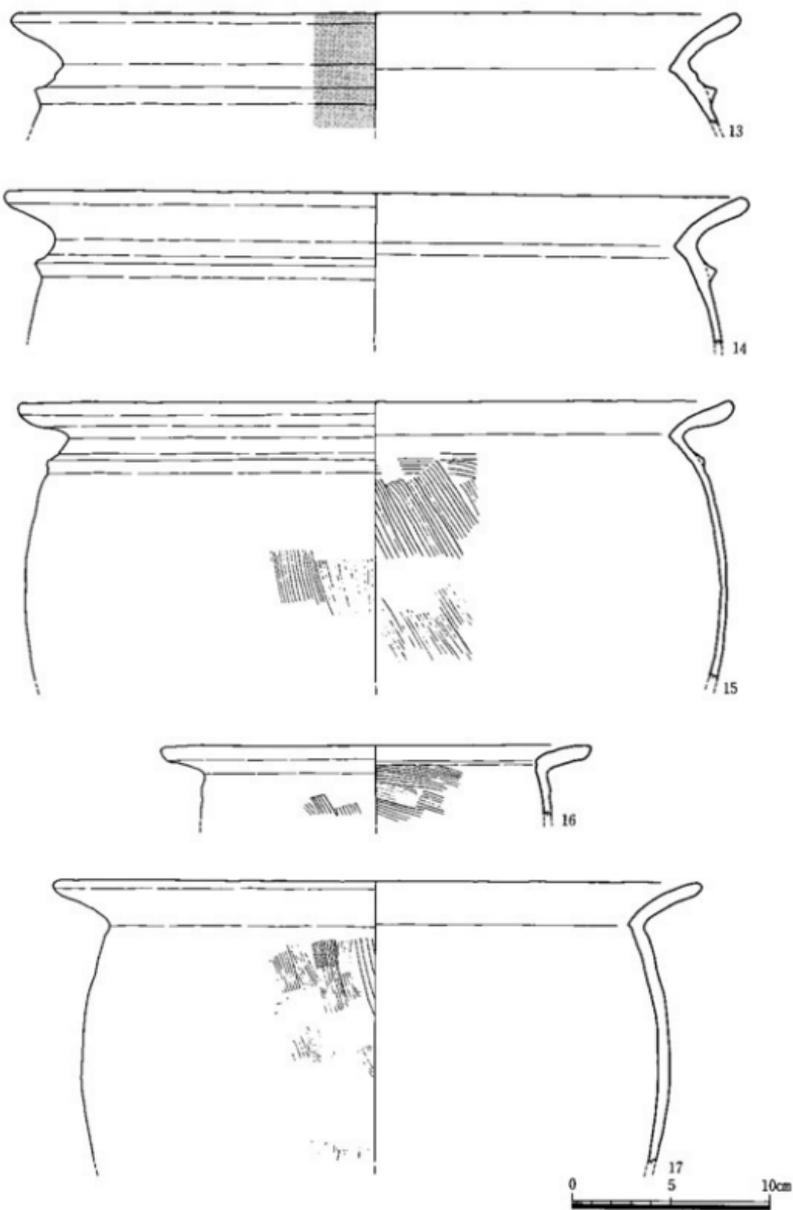
第12図 調査Ⅰ区7号住居址内出土遺物実測図(1)



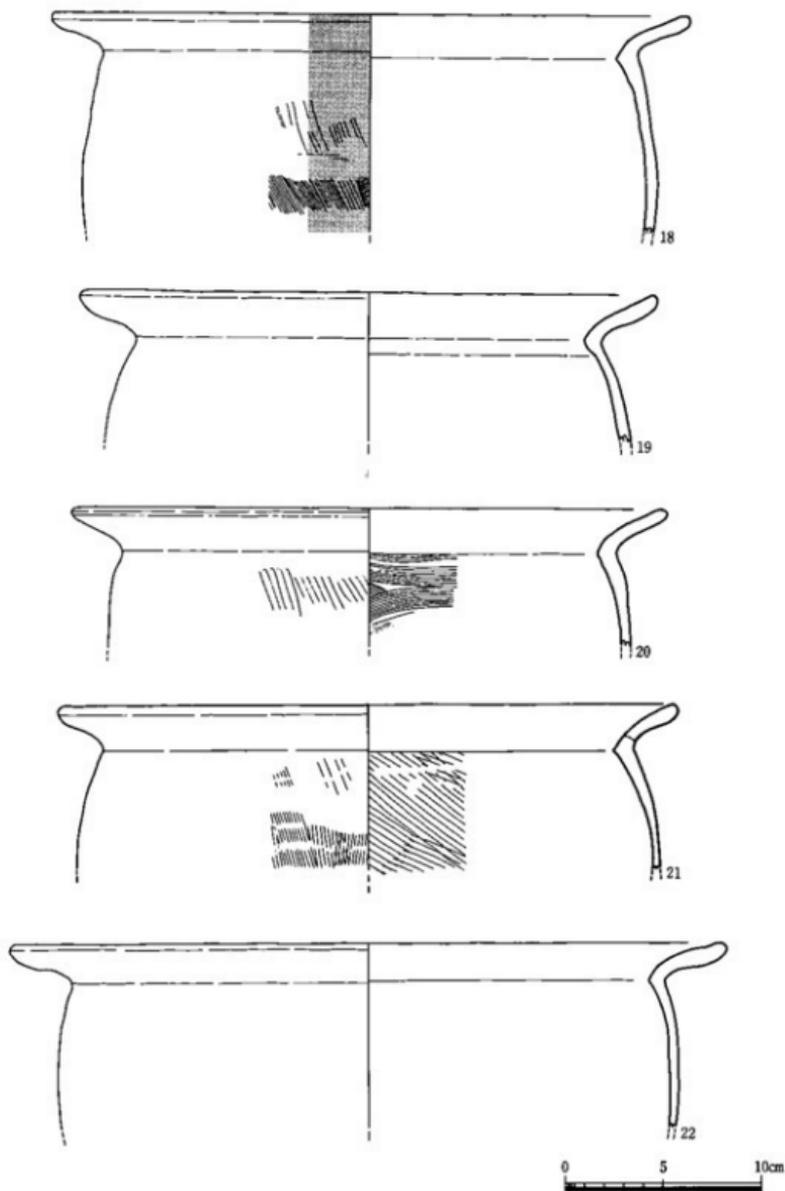
第13図 調査1区7号住居址内出土遺物実測図(2)

好である。

9. 小型の壺口縁部片で、復原口径18.0cm、現存高5.0cmを測る。土器は、胴部が大きく膨らむものと考えられ、頸部がくの字状に屈曲した後口縁部がほぼストレート気味に開いている。口縁部は、2～6と同様に長く口縁端部はナデで平坦にしている。土器の外面全体には、化粧土が塗布してあり、器面調整は、内外面共にハケ目の後ナデであり、内面の一部にハケ目が残っている。胎土は、密で砂粒を含み、焼成は良好である。
10. 壺か壺と考えられる口縁部片で、復原口径26.4cm、現存高4.8cmを測る。土器は、頸部がくの字状に屈曲した後、口縁部は短かくストレートに外傾して開く。口縁端部は丸く、器壁は厚手である。器面調整は、内面がヨコナデ、外面がハケ目の後ヨコナデで、胎土は密でわずかに砂粒を含み、焼成は良好である。
11. 10と同じく壺か壺の口縁部片で復原口径30.3cm、現存高10.0cmを測る。胴部は、大きく膨らみ、頸部はくの字状に屈曲した後口縁部がやや外反気味に短かく開く。口縁端部は丸く、器壁は厚手である。器面調整は、器面が荒れているため不明瞭であるが、内外面共にハケ目の後ナデと考えられる。胎土は、密で砂粒を含み、焼成は良好である。
12. 壺の口縁部片で、復原口径31.5cm、現存高8.7cmを測る。胴部は、やや膨らみ最大径が頸部近くまで上がるもので、頸部直下には1条の貼り付け突帯が付く。突帯は幅8mm、高さ3mmのもので断面は三角形を呈している。頸部は、くの字状に屈曲した後口縁部がほぼストレート気味に短かく開く。口縁端部は丸く、器壁は薄手である。器面調整は、内面がハケ目、外面がナデで、胎土は、密で砂粒を含み、焼成は良好である。
13. 壺の口縁部で、復原口径37.2cm、現存高5.9cmを測る。土器は、頸部直下より欠失するため下部の形態が不明であるが、12と同様最大径は頸部近くまで上がるものと考えられ、頸部直下には1条の貼り付け突帯が付く。突帯は幅8mm、高さ4mmのもので断面は三角形を呈している。頸部は、くの字状に屈曲した後口縁部が外反しながら開き、口縁端部は丸く、器壁は薄手である。また外面には、赤色顔料を塗布した痕跡が認められる。器面調整は、内外面共にヨコナデで、胎土は、密で砂粒を含み、焼成は良好である。
14. 壺の口縁部片で、復原口径37.9cm、現存高7.2cmを測る。同じく、胴部最大径が頸部近くまで上がり、頸部直下に幅1cm、高さ5mmの断面が三角形を呈した突帯を貼り付けている。頸部は、くの字状に屈曲した後口縁部が大きく外反しながら開き、口縁端部は丸く、器壁は薄手である。器面調整は、内外面共にヨコナデで、胎土は、密で砂粒、雲母粒等を若干含み、焼成は良好である。
15. 壺の口縁部から胴部にかけての破片で、復原口径36.5cm、現存高14.3cmを測る。胴部最大径は、頸部近くまで上がり35.6cmを測る。頸部直下には、幅1cm、高さ3mmの断面が三角形を呈した突帯を貼り付けている。頸部は、くの字状に屈曲した後口縁部が外反しながら



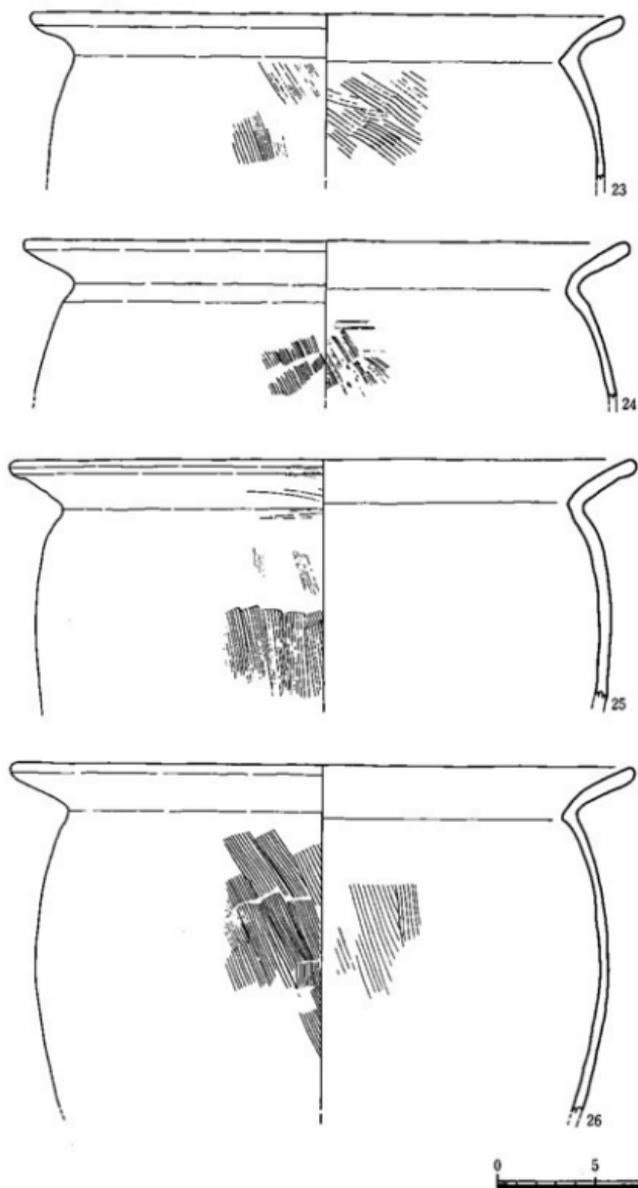
第14图 調査1区7号住居址内出土遺物実測図(3)



第15图 调查I区7号住居址内出土遗物实测图(4)

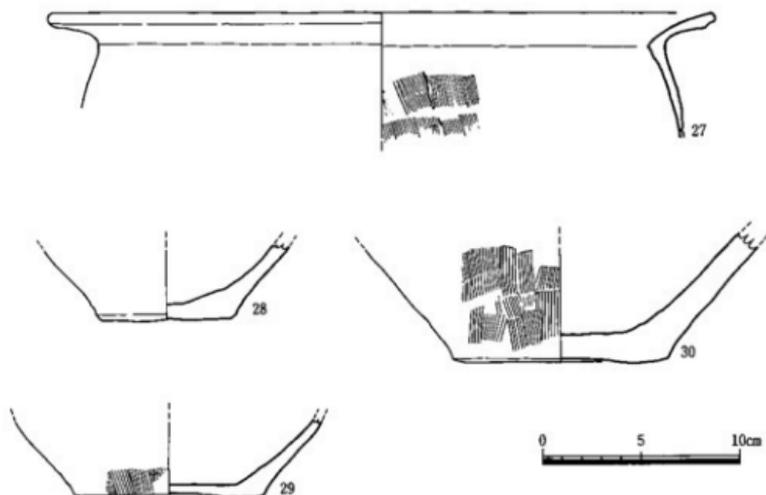
大きく開き口縁端部は丸くなる。器壁は、全体的に薄手であるが口縁端部近くが肥厚する。器面調整は、内外面共にハケ目の後ナデであり、胎土は、密で細かい砂粒を多量に含み、焼成は良好である。

16. 小型の甕口縁部片で、復原口径22.0cm、現存高4.1cmを測る。器形は、胴部にあまり張りがなく、頸部でくの字状に屈曲した後口縁部がやや外反気味に外側に大きく開く。器面調整は、内外面共にハケ目の後ナデで、胎土は、密で細かい砂粒を含み、焼成は良好である。
17. 甕の口縁部から胴部にかけての破片で復原口径33.0cm、現存高14.3cmを測る。胴部は、やや膨らみ、最大径は頸部近くまで上がり29.9cmを測る。頸部は、くの字状に屈曲した後口縁部が外反しながら大きく開き、口縁端部は丸くなる。口縁部内面には、化粧土を塗布した痕跡が認められ、器面調整は内面がナデ、外面がハケ目の後ナデである。胎土は、密で砂粒および径1mm以上の小石を含み、焼成は良好である。
18. 甕の口縁部から胴部にかけての破片で、復原口径32.7cm、現存高11.0cmを測る。胴部はあまり張りがなく、胴部最大径は頸部近くまで上がり29.3cmを測る。頸部は、くの字状に屈曲した後口縁部がほぼストレート気味に大きく開き、口縁端部は丸くなる。器壁は、全体的に薄手で、外面には赤色顔料を塗布した痕跡が認められる。器面調整は、内面がナデ、外面がハケ目の後ナデで、胎土は、密で砂粒を含み、焼成は良好である。
19. 甕の口縁部片で復原口径29.5cm、現存高7.6cmを測る。胴部は、やや膨らみ胴部最大径は頸部近くまで上がるものと考えられる。頸部は、くの字状に屈曲した後口縁部がほぼストレート気味に大きく開き、口縁端部は丸くなる。器壁は、全体的に薄手で、外面には化粧土を塗布した痕跡が認められる。器面調整は、内外面共にナデで、胎土は、密で砂粒を含み、焼成は良好である。
20. 甕の口縁部片で、復原口径30.4cm、現存高7.1cmを測る。胴部は、あまり張りがなく、胴部最大径は頸部近くまで上がるものと考えられる。頸部は、くの字状に屈曲した後口縁部がほぼストレート気味に大きく開き、口縁端部は丸くなる。器壁は、全体的に薄手で内面には化粧土を塗布した痕跡が認められる。器面調整は、内外面共にハケ目の後ヨコナデで、胎土は、密で砂粒、雲母粒等を含み、焼成は良好である。
21. 甕の口縁部から胴部にかけての破片で、復原口径31.7cm、現存高8.4cmを測る。胴部は、膨らみを持ち胴部最大径は頸部近くまで上がり、最大径29.6cmを測る。頸部は、くの字状に屈曲した後口縁部がやや外反気味に大きく開き、口縁端部は丸くなる。器壁は、全体的に薄手で、器面調整は内外面共にハケ目の後ナデで仕上げている。胎土は、密で砂粒を含み、焼成は良好である。
22. 甕の口縁部から胴部にかけての破片で、復原口径36.6cm、現存高9.5cmを測る。胴部は、あまり張りがなく胴部最大径が頸部近くまで上がり最大径31.6cmを測る。頸部は、くの字



第16図 調査Ⅰ区7号住居址内出土遺物実測図(5)

- 状に屈曲した後口縁部がやや外反気味に大きく開き、口縁端部は丸くなる。器壁は、全体的に薄手で、器面調整は、内外面共にハケ目の後丁寧なナデで、ハケ目はほとんど残っていない。胎土は、密で砂粒を含み、焼成は良好である。
23. 甕の口縁部から胴部にかけての破片で、復原口径30.5cm、現存高8.3cmを測る。胴部は、あまり張りがなく胴部最大径は頸部の近くまで上がり、最大径は28.4cmを測る。頸部は、くの字状に屈曲した後口縁部がやや外反気味に開き、口縁端部は丸くなる。器壁は、全体的に薄手で、器面調整は、内外面共にハケ目の後ナデである。胎土は、密で砂粒を含み、焼成は良好である。
24. 甕の口縁部から胴部にかけての破片で、復原口径31.0cm、現存高8.3cmを測る。胴部は、若干膨らみ胴部最大径は頸部近くまで上がるものと考えられる。頸部は、くの字状に屈曲した後口縁部がほぼストレート気味に外側に開き、口縁端部は丸くなる。器壁は、全体的に薄手で外面に化粧土を塗布した痕跡が認められる。器面調整は、内外面共にハケ目の痕跡が認められることから、ハケ目の後ナデている。胎土は、密で砂粒を含み、焼成は良好である。
25. 甕の口縁部から胴部にかけての破片で、復原口径32.1cm、現存高12.3cmを測る。胴部は、張りがなく胴部最大径は頸部近くまで上がり最大径29.4cmを測る。頸部は、くの字状に屈曲した後口縁部がストレート気味に大きく開き、口縁端部は丸くなる。器壁は、全体的に薄手で、外面には化粧土を塗布した痕跡が認められる。器面調整は、内外面共にハケ目の後ナデで、胎土は密で雲母粒、砂粒を含み、焼成は良好である。
26. 甕の口縁部から胴部下半にかけての破片で底部が欠失する。法量は、復原口径32.0cm、現存高17.5cmを測る。胴部は、やや膨らみ胴部最大径が頸部近くまで上がり最大径29.2cmを測る。頸部は、くの字状に屈曲した後口縁部がやや外反気味に大きく開き、口縁端部は丸くなる。器壁は、全体的に薄手で、器面調整は内外面共にハケ目の後ナデで、胎土は密で砂粒を含み、焼成は良好である。
27. 甕の口縁部片で復原口径34.0cm、現存高6.4cmを測る。胴部のほとんどを欠失するため不明だが、胴部にあまり張りがなく最大径が頸部近くまで上がるものと考えられる。頸部は、くの字状に屈曲した後口縁部が外反気味に大きく開き、口縁端部は丸くなる。器壁は、全体的に非常に薄い。器面調整は、内外面共にハケ目の後ナデで、胎土は、密で雲母粒、砂粒を含み、焼成は良好である。
28. 甕と考えられる底部片で、底部径7.2cm、現存高3.1cmを測る。土器は、底部のみでほとんどを欠失するため全体は不明である。底部は、平底でほとんど平坦、器壁は薄手である。器面調整は、器面が荒れているため明確ではないがハケ目であろうと考えられる。胎土は、密で砂粒を含み、焼成は良好である。

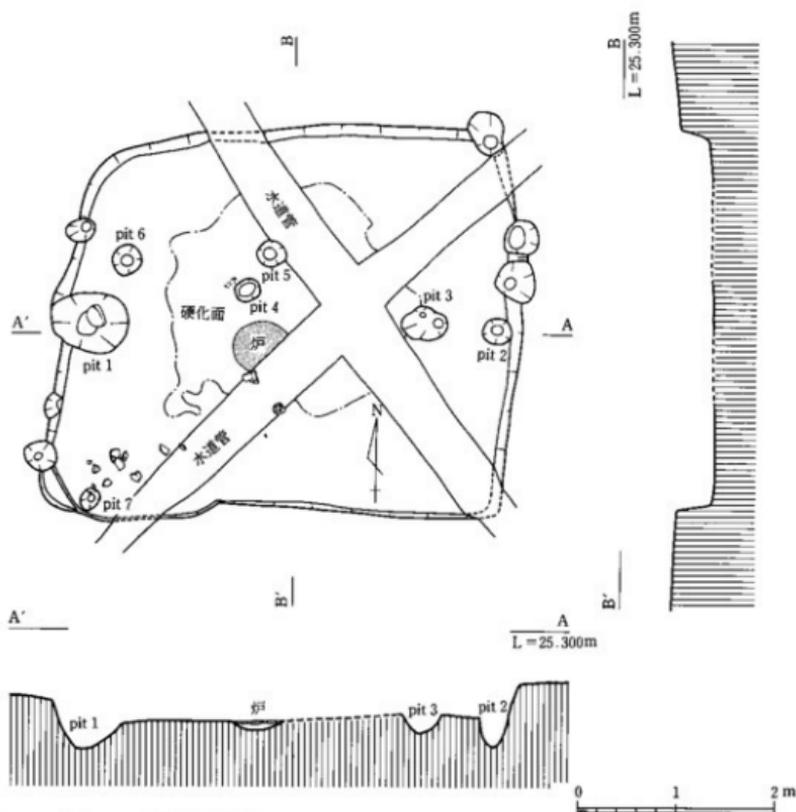


第17図 調査1区7号住居址内出土遺物実測図(6)

29. 同じく壺と考えられる底部片で、底部径9.6cm、現存高3.8cmを測る。土器は、底部のみでほとんどを欠失するため全体は不明である。底部は、平底でほとんど平坦であるが、中心付近がやや上げ底気味、器壁は薄手である。器面調整は、内面がナデ、外面がハケ目の後ナデで、胎土は密で砂粒、小石等を含み、焼成は良好である。
30. 同じく壺と考えられる底部片で、底部径11.0cm、現存高5.8cmを測る。底部は平底でほとんど平坦、器壁は1.3cmと厚手である。この土器は、底部径が大きく器壁が厚いことから比較的大型になるものと考えられる。器面調整は、内面がハケ目の後ナデ、外面がハケ目で、胎土は、密で砂粒、小石等を含み、焼成は良好である。

9号住居址 (第18図)

調査1区、1-Bグリッド内に検出した竪穴住居址である。この住居址は、中央付近で水道管が交叉し、十字に延びておりその部分だけは調査できなかったが、他はほぼ完全に調査することができた。住居址は、主軸をN-30°-Eに取り作られ、長辺4.78m、短辺3.85mの隅丸長方形プランを呈しており、深さは約40cmを測る。住居址内からは、ピットが7個検出されたが、4隅にはまったくピットがないことから、東壁際と西壁際の中央付近にあるピットNo1とピットNo2の2本を柱穴と考え、2本柱の住居址を想定した。住居址中央よりやや南寄りの所には、直径50cm程の円形炉址があり中には焼土が混じっていた。この炉址を中心に、硬化面が四方に広がっている。住居址内からは、少量であるが弥生土器が出土しており、その特徴より

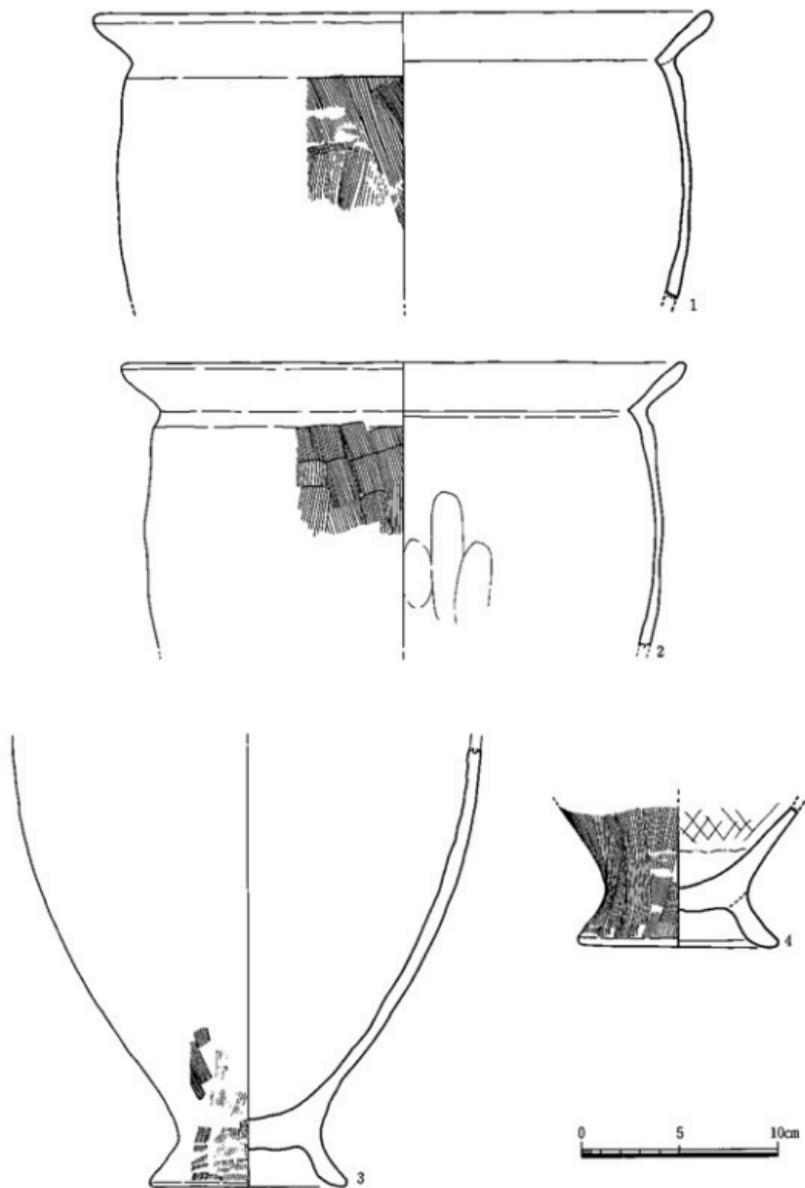


第18図 調査I区9号住居址実測図

住居址の時期は弥生時代後期と考えられる。

出土遺物 (第19図)

1. 甕の口縁部から胴部にかけての破片で、底部は欠失する。分量は、復原口径31.2cm、現存高14.8cmを測る。器形は、胴部にあまり張りがなく、胴部最大径が頸部近くに上がる。頸部は、くの字状に屈曲し、口縁部は頸部よりストレート気味に外傾しながら立ち上がる。外傾角度は、ほぼ45°位である。器壁は薄く、器面調整は内面および外面口縁部がナデ、外面胴部がハケ目で、胎土は粗く径1mm程の石粒を多く含み、焼成は良である。外面には部分的にススが付着している。
2. 1と同じく甕の口縁部から胴部にかけての破片で、底部を欠失するため器高は不明であるが復原口径28.3cm、現存高14.8cmを測る。器形は胴部があまり張らず、胴部最大径が頸部



第19图 调查I区9号住居址内出土遗物实测图

近くに上がる。頸部は、くの字状に屈曲し、口縁部は頸部よりストレート気味に外傾しながら立ち上がる。外傾角度は、ほぼ45°位である。器壁は薄く、器面調整は内面および外面口縁部がナデ、外面胴部はハケ目である。胎土は、密でわずかに砂粒を含み、焼成は良である。

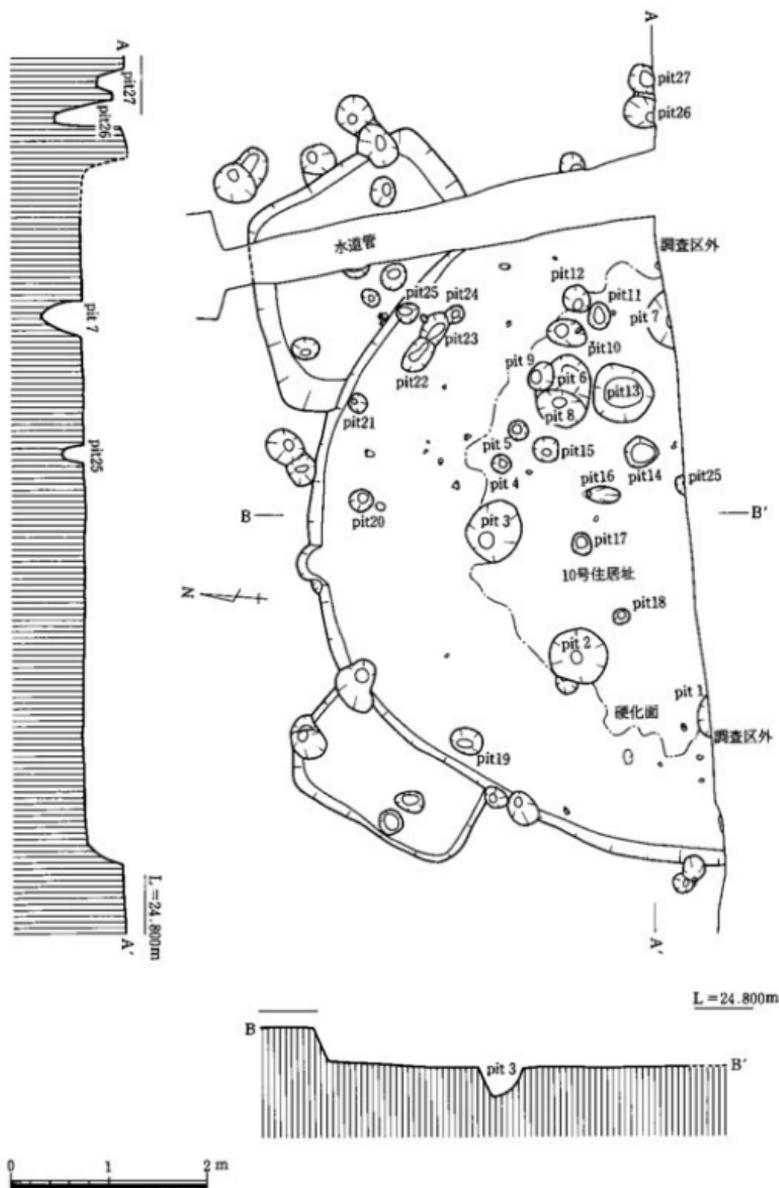
3. 壺の胴部から底部にかけての破片である。口縁部が欠失するため口径および器高については不明であるが、底径9.8cm、現存高22.8cmを測る。胴部は、底部より若干外側に開きながら内湾気味に立ち上がり、あまり張らないものと考えられる。器壁は、かなり薄い。底部には、端部が外に大きく開く高さ2cm程の低い高台が付く。器面調整は、器面がかなり磨滅しているため明確ではないが、外面にわずかにハケ目の調整痕が認められる。胎土は、密で雲母粒と砂粒を含み、焼成は良好である。
4. 3と同じく壺の底部片である。口縁部、胴部等のほとんどを欠失するため法量は不明であるが、底径9.6cm、現存高7.3cmを測る。底部には、端部が外に大きく開く高さ1.8cm程の低い高台が付く。器面調整は、外面はハケ目の後ナデで、胎土は粗く、焼成は良である。内外面にはススが附着している。

10号住居址 (第20図)

調査Ⅰ区、3・4-Cグリッド内に検出した竪穴住居址である。住居址の、南側1/2程が調査区域外へ延びることと、東壁の一部分が水道管の埋設により調査できず正確な規模は不明であるが、推定直径約6.9mの円形プランを呈した大型住居址である。住居址内からは、多数のピットが検出されたが、完掘ではないことより柱穴と断定できるものはない。ただ、硬化面が切れる境目付近にピット№1、2、3、6、7の5個のピットが円形に巡っており、これを柱穴と見てほぼ間違いないものとする。炉址は、調査した住居址中心付近には確認できなかったが、おそらく未調査地区に存在するのであろう。住居址内硬化面は、壁面から約1.2～1.6mで柱穴と考えられるピットの所まで均等に広がっている。当住居址の東側と西側部分には、1辺が2m程で隅丸方形プランの竪穴状遺構が在るが、当住居址に伴う遺構なのか、別時期の遺構なのかは調査段階では確認できなかった。当住居址は、今回調査したⅠ・Ⅱ・Ⅲ区全体の住居址の中で唯一の円形住居址である。遺物の出土が皆無であるため住居址の時期は特定できないが、住居址の形態等により弥生時代中期後半ぐらいと考えられる。

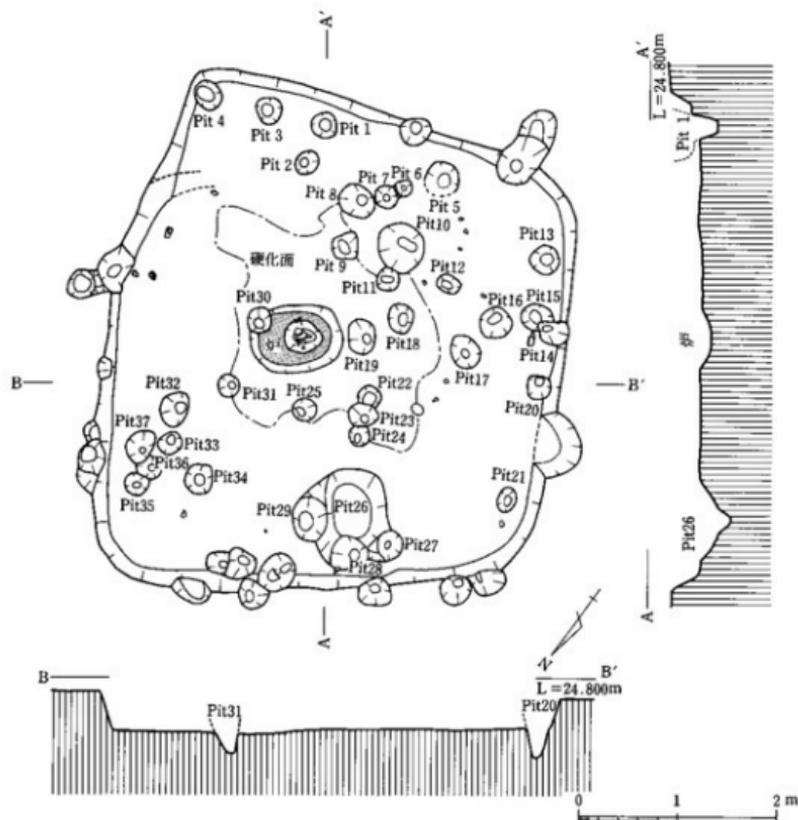
12号住居址 (第21図)

調査Ⅰ区、2・3-Bグリッド内に検出した竪穴住居址である。当住居址は、調査地区内に完全にはいり、他の住居址とも切り合っていないので完掘することができた。住居址の規模は、長辺5.28m～4.0m、短辺4.7mを測る。東壁が長く、西壁が短い不整長方形プランを呈



第20图 調査1区10号住居址実測図

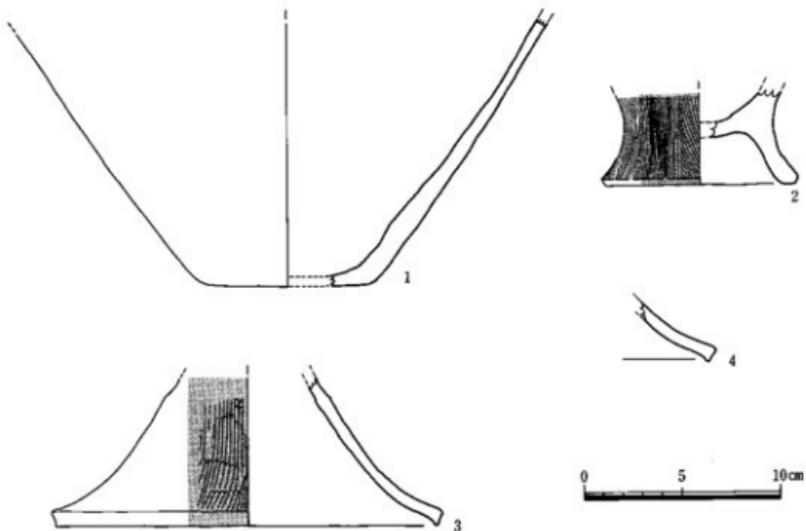
し、主軸をN-38°30'-Wに取り作られている。住居址の深さは、42cmを測り残りが良い方である。住居址南側が張り出し、東壁と西壁の長さが違うことより、検出当初は、別住居址との切り合いではないかと考えたが、硬化面の広がり方及び床面の状況を見た場合、複数ではなく、1基単独の住居址と考えた方がよさそうである。住居址内からは、多数のピットが検出された。これらのピットの中には、時期的に新しいものも含まれるが、特定はできない。また、住居址のコーナー部及び主軸に乗るようなピットもなく、柱穴の特定はできず不明である。炉址は、住居址の中心よりやや東側にずれた部分にあり、長径94cm、短径68cmの楕円形プランを呈した浅い皿状の掘り込みが確認され、中には焼土が詰まっていた。硬化面は、この炉址を中心に広がっている。住居址内からは、遺物の出土は少なかったが、住居址の特徴及び出土遺物より、時期は弥生時代後期の住居址と考えられる。



第21図 調査1区12号住居址実測図

出土遺物 (第22図)

1. 特徴より壺の底部片と考えられる。胴部上半と口縁部を欠失するため、口径、胴部径、器高については不明だが、底部径9cm、現存高13.4cmを測る。底部は、平底で大きく外に開きながらほぼストレート気味に立ち上がり、器壁は薄い。器面が荒れているため明確ではないが、表面の一部に化粧土を塗布した痕跡が認められる。また、内部にはわずかにススが付着している。器面調整は、表面が磨滅しているため不明確であるが、ハケ目の後のナデと考えられ、胎土はわずかに砂粒を含み、焼成は良好である。
2. 甕の高台部片である。土器は、口縁部や胴部を欠失するため全体の法量は不明であるが、高台部の復原底径9.7cm、現存高4.7cmを測る。高台部は、端部が大きく外側に広がり、高台部の高さは2.4cmと低い。器面調整は、内面がナデ、外面がハケ目で、胎土は砂粒を少量含み、焼成は良好である。
3. 高坏の脚部片と考えられるものである。土器は、上半部を欠失するため全体は不明であるが、底部径19.5cm、現存高7.6cmを測る。器形は、上部から裾部に向かって大きくラッパ状に開き、端部は鳥の嘴状に下方につまみ出され先端は尖がっている。外面には、赤色顔料が塗布され、器面調整は内面がヨコナデ、外面が細かいヘラ磨き調整、胎土は砂粒を含み、焼成は良好である。



第22図 調査I区12号住居址内出土遺物実測図

4. 3と同じく高坏の脚部破片と考えられる。土器は、細片であるため口径、器高、底径等については全く不明であるが、3とほぼ同じ大きさであろう。器形も3と同じで裾部が大きくラッパ状に開き、端部が鳥の嘴状に下方につまみ出され先端が尖がるもので、外面には赤色顔料が塗布されている。器面調整は、外面がヘラ磨き調整、内面がヨコナデ、胎土は密で砂粒を含み、焼成は良好である。

2. II地区

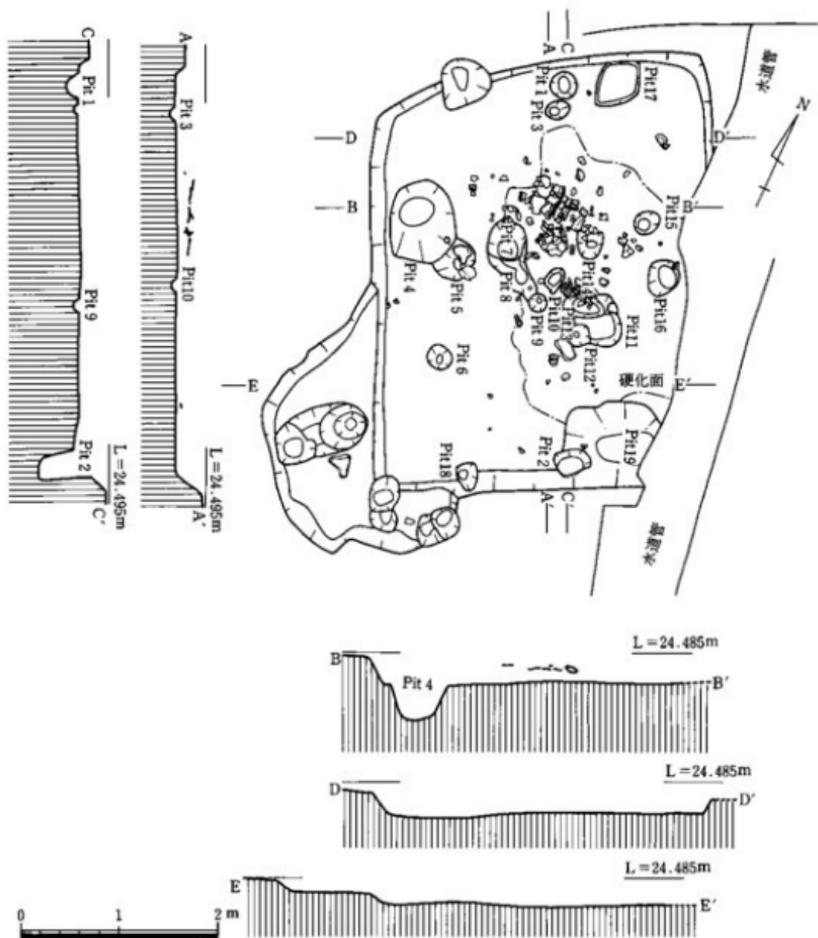
住居址と出土遺物

1号住居址 (第23図)

調査II区、5-Cグリッドに検出した竪穴住居址である。調査区中心付近を南北に水道管が走っており、住居址東南コーナー付近が水道管の下になる為完全には調査できなかったが、住居址の規模はほぼ推定できる。住居址は、主軸をN-26°25'-Wに取り作られ、平面プランは長辺4.34m、短辺3.48mの隅丸長方形をなし、深さは比較的浅く10~26cmを測る。住居址内には、合計17個のピットが検出されたが、柱穴と特定できるものはない。ただ、住居址の主軸方向である北壁と南壁のほぼ中心付近で、壁際に1個ずつ計2個のピットが検出され、2本柱の住居址を想定した。住居址のほぼ中央には、24cm×16cm程の楕円形のピットが検出された。焼土がはいっていなかったことより、炉址かどうか不明だが炉址の可能性もある。また床面には、硬化面が認められ、範囲が中央から東側壁面の方へ延びていることより、住居址への出入口が東壁の方向にあったのかもしれない。遺物は、かなりの量出土しているが、住居址の中央付近に固まっており、また出土レベルが床面より10cm程浮いた状態で出土していることから、当住居址が使用されていた時期とは考え難く、土器等の遺物は、住居址が廃絶され埋没した後くぼみに投棄されたものと考えられる。上記より、住居址の年代を直接知る手がかりはないが、出土遺物は形態の特徴より弥生時代後期初頭のもので、住居址の時期は遺物とほぼ同時期またはそれより古くなり、弥生時代中期頃から後期初頭頃と考えられる。

出土遺物 (第24~28図)

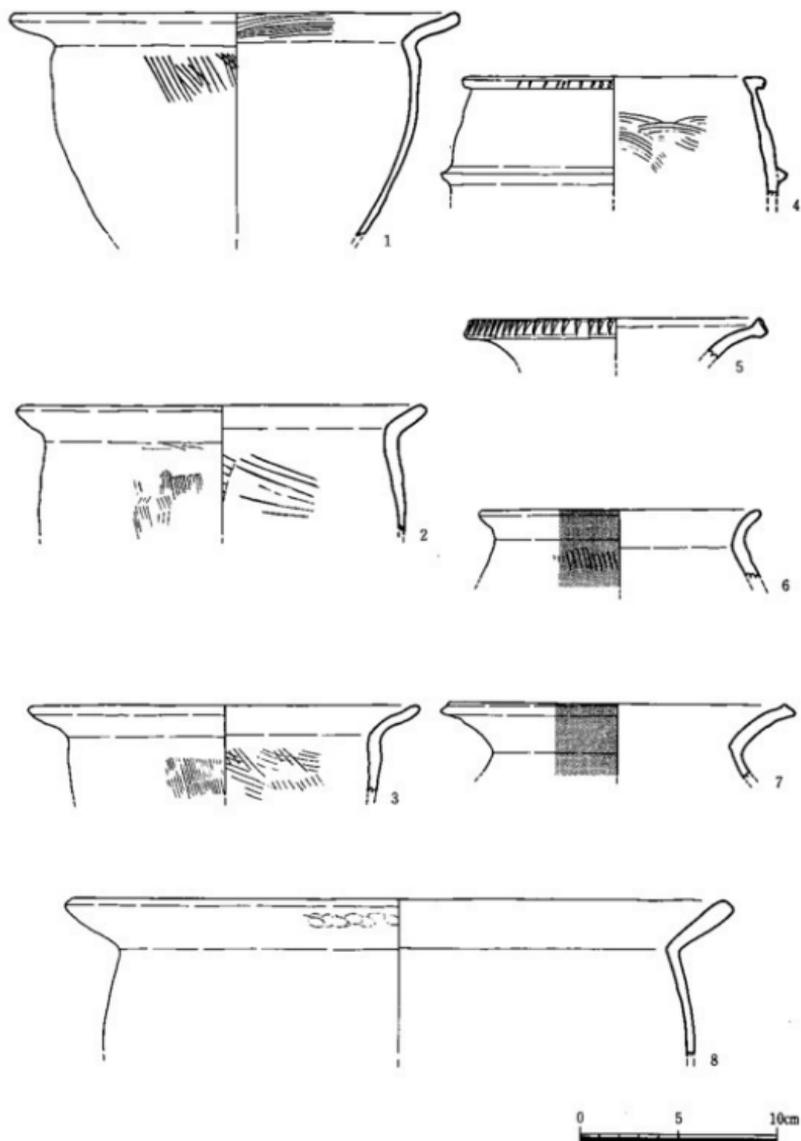
1. 鉢の破片である。土器は、底部を欠失するため全体の量量は不明であるが、復原口径23.0cm、現存高11.2cmを測る。器形は、小型で頸部がくの字に屈曲したあと口縁部が大きくストレート気味に外傾しながら立ち上がり、胴部は若干膨らんだ後底部に向かって内湾しながら降りていく。器高は、14cm前後と推定される。器面調整は、表面の剥離が著しいため明確ではないが、内外面共にハケ目と考えられ、胎土は密で砂粒を含み、焼成は良好である。
2. 小型甕と考えられる口縁部片である。土器は、口縁部の破片であるため全体の量量は不明であるが、復原口径21.0cm、現存高6.6cmを測り、器高は1と同じ14cm前後と考えられる。器形は、胴部に張りがなく、頸部でくの字状に屈曲した後口縁部が短く外傾する。器面調整は、内外面共にハケ目の後ナデであり、外面全体にススが附着している。胎土は、密で雲母粒及び砂粒を含み、焼成は良好である。
3. 2と同じく小型甕と考えられる口縁部片である。土器は、口縁部から胴部上半のみで、下



第23図 調査Ⅱ区1号住居址実測図

部を欠失するため全体の法量は不明であるが、復原口径20.0cm、現存高4.5cmを測る。器形は、小型で胴部に張りがなく、頸部で一度締まった後くの字状に屈曲し、口縁部が大きく外傾する。器面調整は、内外面共にハケ目の後ナデしており、外面には部分的にススが付着している。胎土は、密で砂粒を含み、焼成は良好である。

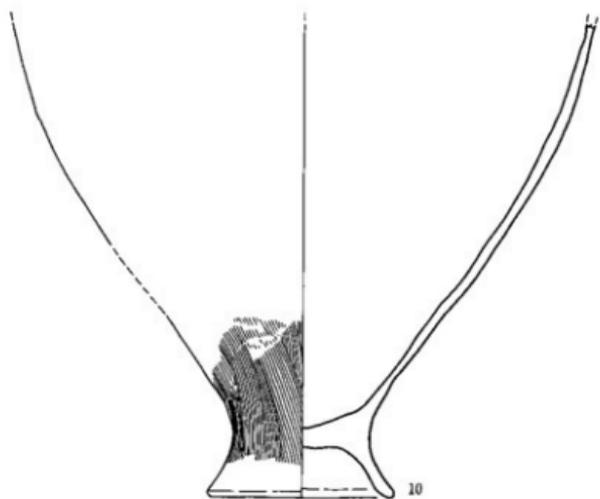
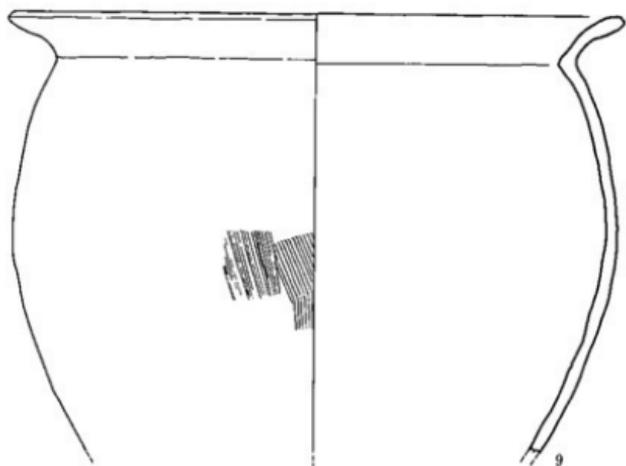
4. 小型の甕口縁部片である。土器は、下部を欠失するため全体の法量は不明だが、復原口径15.4cm、現存高6.1cmを測る。器形は、口縁部が胴部より内湾しながらそのまま端部に至



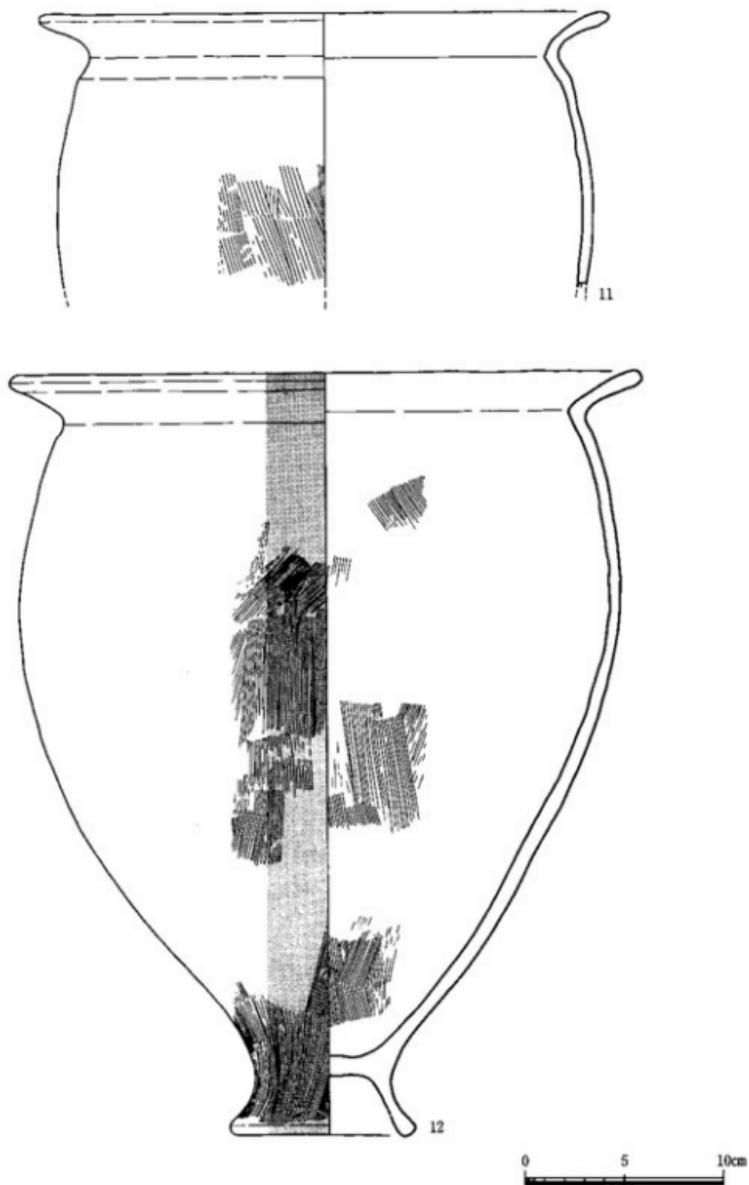
第24图 調査II区1号住居址内出土物実測図(1)

り、口縁端部と胴部に2条の突帯が付く。端部に付く突帯は、つまみ出されたもので断面が長方形を呈し、刻目は器面が荒れているため不明確である。器面調整は、内外面共にハケ目の後ナデている。胎土は、密で雲母粒及び砂粒を含み、焼成は良好である。

5. 長頸壺と考えられる口縁部片である。土器は、口縁部のみの破片で全体は不明であるが、復原口径15.4cm、現存高2.2cmを測る。器形は、口縁部が大きく外反し、頸部は細くなるものと考えられる。口縁端部は肥厚し、端部には刻目が施されている。器面調整は、内外面共にヨコナデで、胎土は密で砂粒を含み、焼成は良好である。
6. 小型の壺と考えられる口縁部片である。法量は、復原口径14.3cm、現存高4.0cmを測る。頸部付近より下を欠失するが、胴部の傾きよりかなり膨らむものと考えられる。頸部は、くの字状に屈曲し、口縁部はやや立ち気味に外反する。また、外面には赤色顔料を塗布している。器面調整は、内外面共にハケ目の後ナデしており、胎土は密で砂粒を含み、焼成は良好である。
7. 小型の壺と考えられる口縁部片である。法量は、復原口径18.0cm、現存高3.7cmを測る。頸部より下半を欠失するため形態は不明であるが、胴部は大きく膨らむものと考えられ、頸部がくの字状に屈曲した後口縁部が大きく外反する。口縁端部は、平坦にナデている。また、外面には赤色顔料を塗布している。器面調整は、ヨコナデで、胎土は密で雲母粒、砂粒等を含み、焼成は良好である。
8. 壺の口縁部から胴部上半にかけての破片である。法量は、復原口径34.0cm、現存高7.8cmを測る。胴部より下半を欠失するが、胴部はあまり膨らまず胴部の中心より上半に胴部最大径がくるものと考えられ、頸部はくの字状に屈曲し、口縁部はほぼストレート気味に立ち上がり大きく外傾するもので、口縁端部はほぼ平坦にナデている。また、外面の一部にはスガが付着している。器面調整は、丁寧に行っているが部分的にハケ目の痕が認められることより、ハケ目の後ナデたものと考えられる。胎土は、密で砂粒を含み、焼成は良好である。
9. 8と同じく壺の口縁部から胴部下半にかけての破片である。土器は、底部付近を欠失するだけで復原口径31.5cm、現存高22.2cmを測る。胴部は、かなり膨らんでおり、胴部最大径が中心より上部に上がり、最大径は30.8cmを測る。頸部は、くの字状に屈曲し、口縁部は外反しながら大きく開き、また、外面全体と内面の一部にはスガが付着している。器面調整は、内面はヨコナデ、外面はハケ目の痕跡がわずかに認められることより、ハケ目の後ナデたものと考えられる。胎土は密で雲母粒や砂粒を含み、焼成は良好である。
10. 上記と同じく壺の胴部から底部にかけての破片である。土器は、胴部下半から底部にかけてのみで、上半部を欠失するため口径、器高については不明であるが、現存胴部径29.8cm、底径9.7cm、現存高24.0cmを測る。器形は、底部よりやや内湾気味に外側に開きながら立



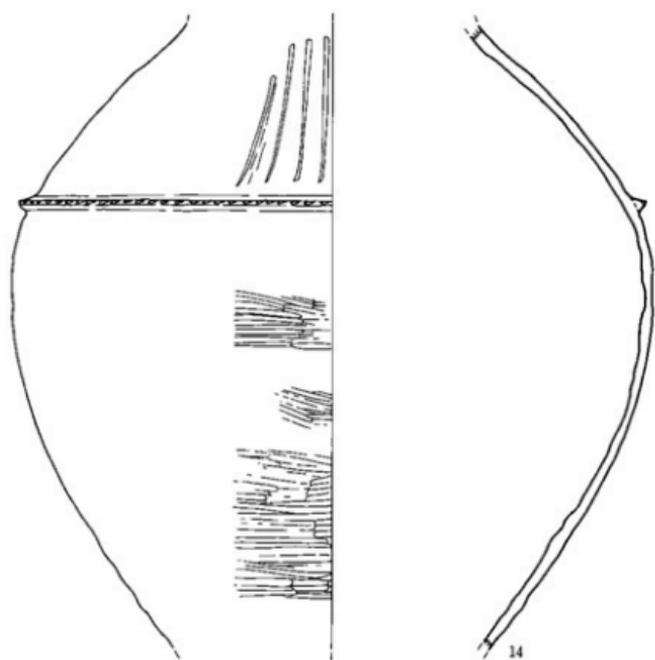
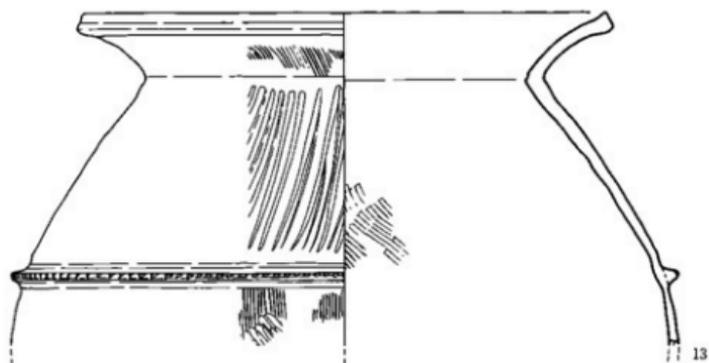
第25图 调查II区1号住居址内出土遗物实测图(2)



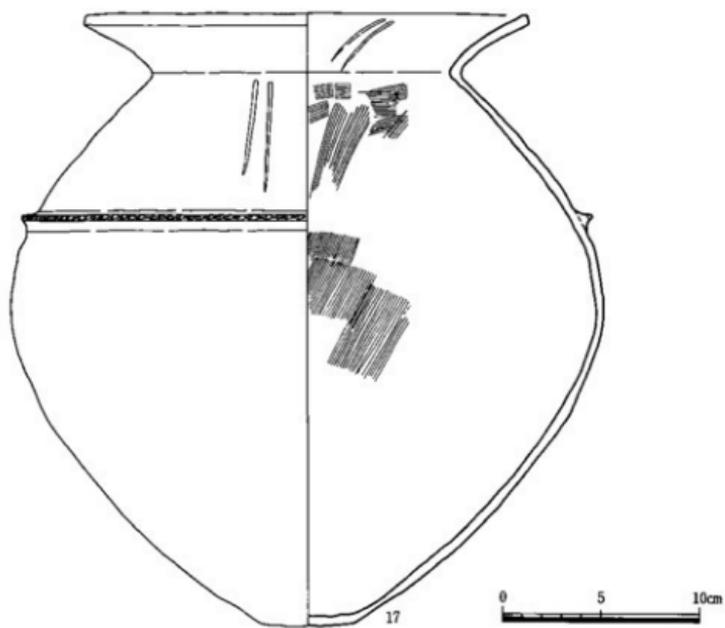
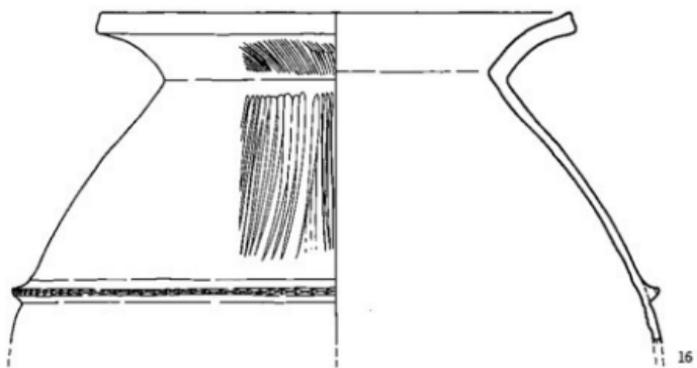
第26図 調査Ⅱ区1号住居址内出土遺物実測図(3)

ち上がり、底部には2.5cm程の低い高台が付く。高台は、器壁が薄く、やや外反気味で外側に開きながら端部に至るもので、端部は丸くなる。全体的に、器壁は薄く形態はスマートな感じを受ける。また、内外面には部分的であるがススが附着している。器面調整は、摩滅が著しいため不明確であるが、底部付近にハケ目の痕跡が残っていることより、外面はハケ目、内面はハケ目の後ナデと考えられる。胎土は、密で砂粒を含み、焼成は良好である。

11. 上記と同じく甕の口縁部から胴部上半部にかけての破片である。全体の法量は、不明であるが復原口径29.0cm、現存高14.0cmを測る。胴部はあまり張らないが、胴部最大径は中心より上半部に上がり27.2cmを測る。頸部は、くの字状に屈曲し、口縁部はやや外反気味に大きく開き、端部は丸くなる。器面調整は、内面がナデ、外面はハケ目の後ナデている。胎土は、密で雲母粒及び砂粒を含み、焼成は良好である。
12. 上記と同じく甕である。土器は、ほぼ完形で全体が復原出来た。法量は、口径32.2cm、底径9.5cm、器高38.8cmを測る。底部には、高さ3cm程の低い高台が付き、高台は器壁が薄くやや外反気味に下方に開き、端部は丸くなる。胴部は、ほぼストレート気味に外側に開きながら立ち上がり、胴部はやや膨らむ。胴部最大径は、中心より上部に上がり30.5cmを測る。頸部は、くの字状に屈曲し、口縁部はほぼストレート気味に大きく外側に開き、端部は丸くなる。外面には、赤色顔料を塗布した痕跡が認められ、器面調整は内外面共にハケ目で、胎土は密でわずかに砂粒を含み、焼成は良好である。
13. 甕の胴部上半から口縁部にかけての破片である。土器は、胴部下半から底部を欠失するため器高、底部径については不明であるが、復原口径27.4cm、現存高14.0cmを測る。胴部は、大きく膨らみ、胴部最大径は中心よりやや上方にあり、33.9cmを測る。胴部最大径の位置よりやや上方には、1条の突帯を張り付け、突帯には刻目を施す。頸部は、大きく縮まりくの字状に屈曲した後、口縁部は大きく外反する。口縁端部は、ナデで平坦にしている。土器の内外面全体には、化粧土が塗布され、頸部から刻目突帯の間には縦方向に暗文が施されている。器面調整は、内外面共にハケ目の後丁寧にナデしており、外面胴部にはヘラによるミガキ調整が認められる。胎土は、密でわずかに砂粒を含み、焼成は良好である。
14. 13と同じく甕の胴部片である。土器は胴部だけの破片で口縁部および底部を欠失するため、口径、器高、底径等については不明であるが現存高31.8cmを測る。胴部は、大きく膨らみ、胴部最大径は中心よりやや上方にあり32.6cmを測る。最大径がくる胴部のやや上方には、1条の突帯を貼り付け、突帯には刻目を施している。土器の内外面全体には、化粧土が塗布され、頸部と刻目突帯の間には縦方向に暗文が施されている。器面調整は、内面がハケ目の後ナデしており、外面はヘラによるミガキ調整である。胎土は、密で砂粒を含み、焼成は良好である。



第27図 調査Ⅱ区1号住居址内出土遺物実測図(4)

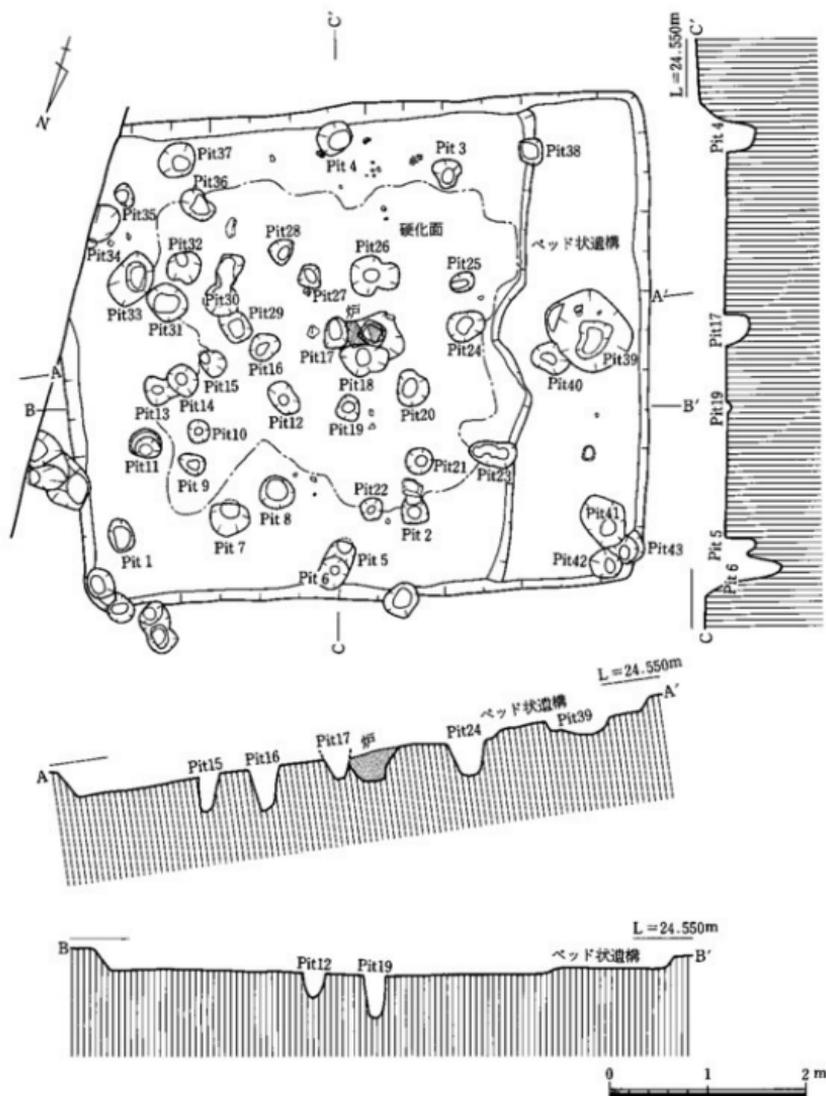


第28图 調査Ⅱ区1号住居址内出土遺物実測図(5)

15. 特徴より壺と考えられる底部片である。底部のみで大部分を欠失するため、全体については不明であるが底径8.8cmを測る。底部は、平底であるが平坦ではなく、中心付近が若干盛り上がりレンズ状になるのが特徴である。また、器壁は薄く、外面には赤色顔料を塗布した痕跡が残る。器面調整は、内外面共にナデで、胎土には砂粒を含み、焼成は良好である。
16. 上記と同じく、壺の口縁部から胴部にかけての破片である。土器は、胴部下半から底部を欠失するため全体は不明であるが、復原口径24.5cm、現存高16.8cmを測る。胴部は、大きく膨らみ、最大径は中心付近まで下がり、突帯には刻目を施している。頸部は、くの字状に屈曲した後、口縁部が大きく外反しながら開き端部に至るもので、口縁端部はナデで平坦にしている。土器の外面全体には、赤色顔料が塗布され、また、頸部と刻目突帯の間には縦方向に暗文が施されている。器面調整は、摩滅が著しいため不明確であるが、内外面共にハケ目の後ナデであろうと考えられ、胎土は密で砂粒を含み、焼成は良好である。
17. 同じく壺である。土器は、全体の約1/2を欠失するが主な部分が残っているため完全に復原することができた。法量は、口径22.7cm、底径4.8cm、器高31.0cmを測る。底部は、平底であるが中心付近が若干盛り上がりレンズ状になり、胴部に向かって大きく開きながら立ち上がる。胴部は、大きく膨らみ最大径は30.2cmを測る。胴部最大径は、ほぼ中心付近にあり球形に近い形態を呈している。頸部は締めまり、くの字状に屈曲した後、口縁部が大きく外反し端部に至る。胴部最大径の部分よりやや上方には、1条の突帯を貼り付け、突帯には刻目を施している。また、刻目突帯と頸部の間には縦方向に暗文を施し、土器の外面全体には化粧土が塗布されている。器面調整は、器面が荒れているため不明確であるが、内外面共にハケ目の後ナデしているものと考えられる。器壁は薄く、胎土は雲母粒、砂粒を多く含み、焼成は良好である。

2号住居址（第29回）

調査Ⅱ区、5・6-A・Bグリッドに検出した竪穴住居址である。住居址東南コーナー部分が調査対象区外へ延びる為調査出来なかったが、規模は推定できた。主軸は、ほぼ東西方向でN-72'-Eに取り作られ、平面プランは長辺4.93m、短辺4.99mの隅丸長方形を呈し、深さは28cmを測る。住居址内には、多くのピットが検出されたが、土色観察の結果、住居址が完全に埋没した後に掘り込まれたピットが存在することが判明した。しかし、この状態については完掘後に気付いた為、直接住居址に伴うものと違うものの判別ができなかった。柱は住居址の大きさから四本柱と考えられる。炉址は、住居址のほぼ中央部に長辺60cm×短辺50cmの長方形ピットがあり焼土が中に詰まっていた。また、硬化面は炉址を中心に四方に広がり壁面近くまで延びている。住居址の西壁にそって幅1m～1.2m、高さ10cm程の高まりが北壁から南壁ま

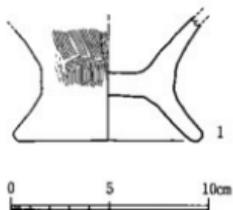


第29図 調査Ⅱ区2号住居址実測図

で広がっておりベッド状の遺構と考えられる。遺物は、量的にはかなり少ないが床面直上より出土しており、遺物及び遺構の特徴より、住居址の時期は弥生時代後期と考えられる。

出土遺物 (第30図)

1. 甕の高台部片である。土器は、高台部のみで口縁部および胴部を欠失するため、全体の法量は不明であるが、高台部の底径9.2cm、現存高6cmを測る。高台は、端部に向かってほぼストレート気味に大きく開き、高台の高さは2.3cmと低い。器面調整は、内面がナデ、外面がハケ目で、胎土は雲母粒と砂粒を含み、焼成は良好である。



第30図 調査Ⅱ区2号住居址内
出土遺物実測図

3. III地区

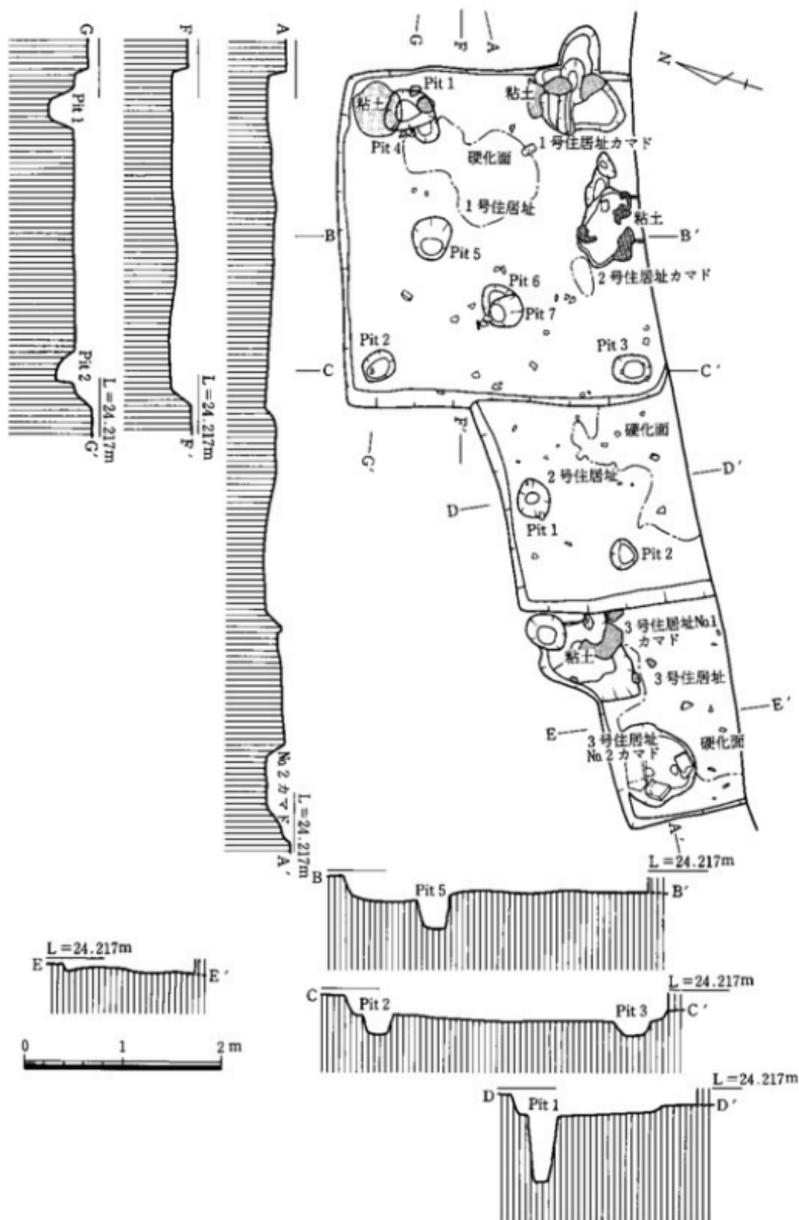
住居址と出土遺物

1号住居址 (第31図)

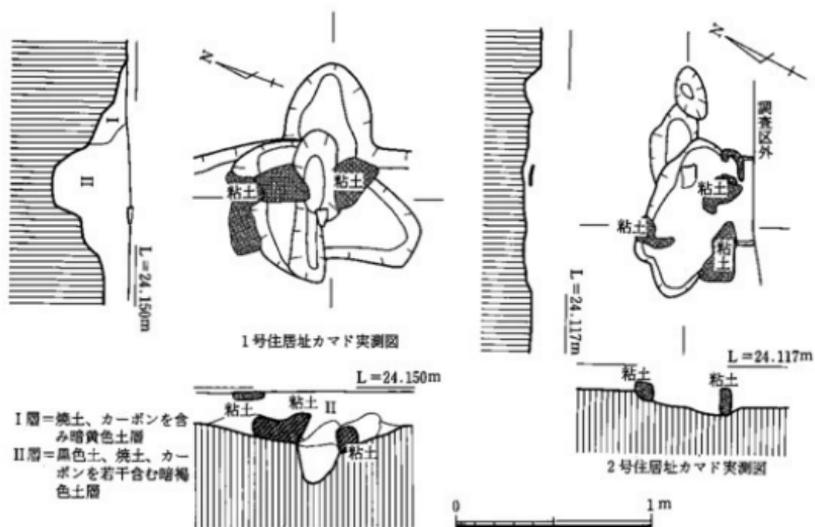
調査Ⅲ区、8・9-Cグリッド内に検出した堅穴住居址である。住居址は、東南コーナ一部分のみが調査区域外に出ることから完全に調査できなかったが、規模は復原できた。長辺3.44m、短辺3.40mの隅丸方形プランを呈し、主軸をN-72°50'-Eに取り作られた住居址で、深さは約20cmを測る。柱穴は、ピット№1とピット№2、ピット№3の3つが想定され4本柱の住居址と考えられる。硬化面は、住居址中央付近より東北側に広がり、明褐色の粘土を持ち込み張り床をしている。住居址の東壁には、作り付けのカマドが確認された。カマドは東壁の中心よりやや南側にずれた位置に作られており、壁面より内側に焚き口、袖、火床があり煙出しの煙道部のみ外側に延びている。当住居址は、2号住居址と切り合っており、床面レベルの違いおよび2号住居址の硬化面が当住居址によって切られていることより、2号住居址より時間的に新しく作られた住居址であることが判明した。また、住居址の中心よりやや南よりの所からも一つのカマドが検出されたが、カマドの方向が2号住居址の主軸に一致することや2号住居址内にカマドが認められないことなどより2号住居址のカマドであろう。当住居址は、出土遺物等により平安時代の住居址である。

出土遺物 (第32図)

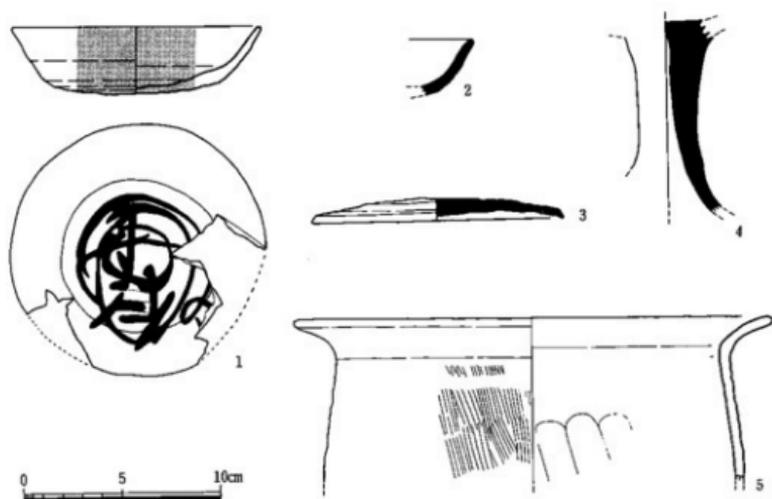
1. 土師器皿で、一部底部、体部、口縁部を欠失するがほぼ完全に復原することができた。法量は、復原口径12.5cm、底径8.4cm、器高3.4cmを測る。器形は、底部よりほぼストレート気味に外傾しながら立ち上がり口縁端部に至るもので、口縁端部は丸くなる。底部は、ヘラによる切り離して、土器の内外面全体には赤色顔料が塗布してある。土器の外表面底部には、墨書があり、墨の残りは良好だが、字の上より落書の要素の強い円のようなものを幾重にも描いてあり、字は読みにくくなっている。また、字は力強く書いているが、途中で書くのをやめているようにも受けとれる。以上のようなことより、現段階では字の判読は難かしく何を書いているかは不明である。
2. 須恵器皿の口縁部から底部にかけての破片と考えられる。破片であるため、法量は不明であるが、器高は3cm程度と考えられる。器形は、底部よりストレート気味に外傾しながら立ち上がり、口縁部がわずかに外反する。器面調整は、内外面共にヨコナデで、胎土は密で砂粒を含み、焼成は堅緻である。
3. カマド付近より出土した須恵器蓋である。法量は、復原口径12.9cm、器高1.1cmを測る。器形は、体部に稜線を明瞭に残し、口縁端部が外側につまみ出され先端が鋭く尖がっている。



第31図 調査III区1号・2号・3号住居址実測図



第32図 調査III区1号・2号住居址カマド実測図



第33図 調査III区1号住居址内出土遺物実測図

る。天井部は、厚く極端に低いのが特徴である。器面調整は、内外面共にナデで、胎土は密で白砂粒を含み、焼成は堅緻である。

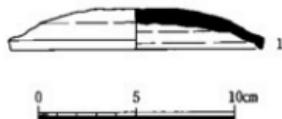
- 須恵器高坏の脚部片である。土器は、坏部および脚の下部を欠失するため法量は不明だが現存高9.4cmを測る。脚部は、全体的に細く、ほぼ直線的に裾部まで延び、裾部が外側に大きく広がる。器面調整は、内外面共にヨコナデで胎土は密で白砂粒を含み、焼成は堅緻である。
- 土師器甕の口縁部から胴部にかけての破片である。法量は、復原口径24.2cm、現存高8.5cmを測る。器形は、胴部があまり膨らまず、頸部でくの字状に屈曲した後大きく外反するもので、器面調整は、内面胴部がヘラ削り、内外面の口縁部がヨコナデ、外面胴部がハケ目で、胎土は密で砂粒を含み、焼成は良好である。

2号住居址 (第31図)

調査Ⅲ区、8・9-Cグリッド内より検出した竪穴住居址である。住居址は、調査区域の境付近に検出された為、南側の1/2程が調査区外へ延びている。また1号住居址により東側部分を切られ削平されている為、住居址の規模復原は難しいが、当住居址のもとと考えられるカマドより推定すると、長辺約4.2m前後、短辺が長辺と同じぐらいの隅丸方形または長辺より短い隅丸長方形プランの住居址と考えられ、主軸はN-59°30'Eを取り作られている。住居址の深さは浅く15cm程を測る。住居址の柱穴は、当住居址のピットNo.1と、位置関係より1号住居址のピットNo.6の2つが考えられ4本柱の住居址を想定した。カマドは、1号住居址内の南壁付近に検出したNo.2カマドが煙道の方向や、位置関係から見て、当住居址のカマドではないかと考えられる。カマドは、1号住居址により、かなり破壊を受けており、焚き口や火床、煙道の一部が残っているだけで中には焼土が詰まっていた。また、カマドの袖部分を作っていたと思われる黄白色粘土も残っていた。硬化面は、住居址の中央部分を中心に広がっているが、東側は1号住居址により切られ途切れている。当住居址は、東側を1号住居址と、西側を3号住居址と切り合っており、3号住居址の硬化面を切っていることより、当住居址が新しく、また、当住居址は1号住居址により硬化面を切られていることから、1号住居址より古く作られたことが判明した。この3つの住居址の新旧関係は、古い方より3号→2号→1号となる。当住居址内からは、遺物の出土は少なかったが土師器が出土しており、カマドや遺物から考えて平安時代の住居址である。

出土遺物 (第34図)

- カマド内より出土した、須恵器の蓋である。土器は、ほぼ完形で法量は復原口径12.7cm、器高2.1cmを測る。外面は、ヘラ削りの後横ナデで仕上げられ稜は残ら



第34図 調査Ⅲ区2号住居址内出土遺物実測図

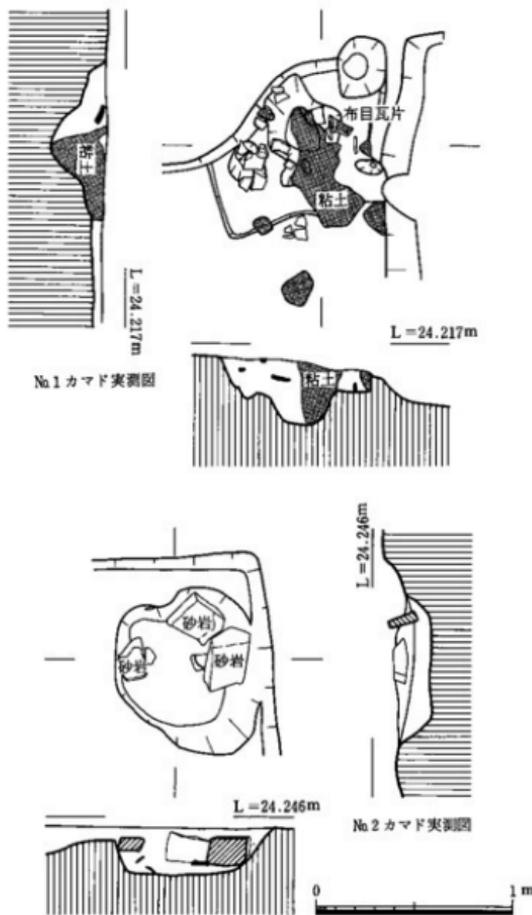
ないが、口縁部は明瞭な段をもち、口縁端部は短く尖っておりほぼ直下につまみだされ
ている。天井部は、低く肉薄である。土器の胎土は密で、焼成は堅緻である。

3号住居址 (第31図)

調査Ⅲ区、8・9-Cグリッドより検出した竪穴住居址である。当住居址も2号住居址と切り
合い関係にあることや、南側の大半が調査区外へ延びていることより、規模の復原はできな
いがカマドより測り出してみると、1辺3.6m前後の隅丸方形、またはそれより少し大きい隅
丸長方形プランの住居址と考

えられる。主軸はN-25°-
Eを取り作られ深さは約8cm
と浅い。当住居址からは、
ピットが全く検出されていな
い為、柱穴の数は不明だが、
2号住居址のピットNo.2が当
住居址の柱穴とも考えられ、
4本柱ではなからうか。なお、
カマドは2個検出された。

No.2カマドは、住居址西北
コーナー部に直径80cm程で床
面より深さ20cm程の浅い皿状
の円形ピットを掘り込み、三
方に板状砂岩を置いたもので
ある。埋土には、焼土粒はは
いり、砂岩はそれほど熱を受
けていない。また、当住居址
の北壁に作り付けのNo.1カマ
ドが検出されていることより、
当カマドは何か特別な作業に
使った炉ではないかと考えら
れる。No.1カマドは、北壁に
作り付けられたカマドでかな
り破壊を受けているが、袖部
分に使われた黄白色粘土及び

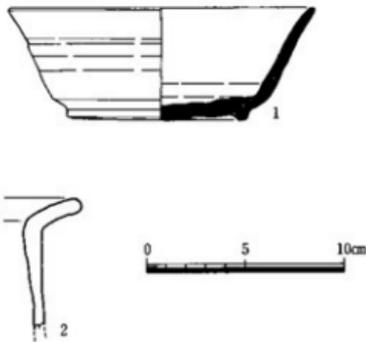


第35図 調査Ⅲ区3号住居址No.1・No.2カマド実測図

煙道の一部が認められた。中からは、軒平の布目瓦が10点程出土した。瓦は細かく割れており、また、カマド覆土上部より出土したことより住居址内に投棄したものであろうか。硬化面は、ほぼ全面に広がっている。住居址内からの遺物の出土量は少ないが、土師器が出土している。時期は、遺物およびカマド等より平安時代の住居址である。

出土遺物 (第36図)

1. カマド内より出土した、須恵器の高台付環である。土器は完形で、法量は口径15.5cm、底径9.1cm、器高5.7cmを測る。底部は、ヘラにより切り離した後断面が逆台形を呈した高台を貼り付けている。体部は、底部より外傾しながらまっすぐ立ち上がり口縁部に至る。また、口縁端部は丸くなりやや外反する。器面調整は、内外面共にヨコナデで、胎土は密、焼成は堅緻である。

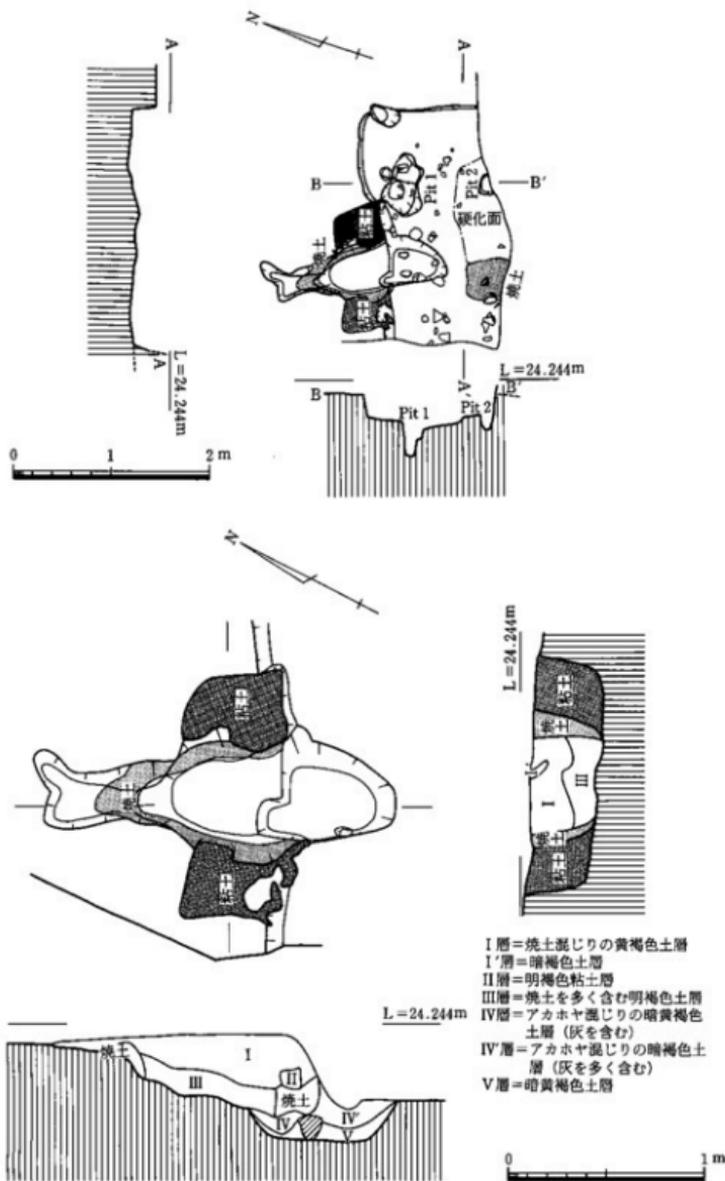


第36図 調査Ⅲ区3号住居址内出土遺物実測図

2. 1と同じくカマド内より出土した、土師器の壺口縁部片である。破片であるため法量は不明である。器形は胴部よりほぼ真すぐ立ち上がり、頸部でくの字状に屈曲した後に口縁端部にかけて大きく外反する。口縁端部は、丸くなる。器面調整は口縁部内外面がヨコナデ、内面胴部がヘラ削り、外面胴部がハケ目である。胎土は、密で砂粒を含み、焼成は良好である。

4号住居址 (第37図)

調査Ⅲ区、9-Dグリッドに検出した竪穴住居址である。住居址は、調査区の南西隅に検出された為、ほとんどが調査区域外へ延びるが、住居址の東北コーナー部及びカマド部分の住居址全体の1/4程調査ができた。住居址の主軸は、部分的な調査のため不明であるが、北壁にカマドがあることから南北と考えられN-1750-Wを取る。規模も、部分的な調査であることより不明だが、北壁のカマドを中心に考えれば3.2m前後で、隅丸方形または隅丸長方形を呈した住居址と考えられる。また、住居址の深さは26cmである。住居址内には、2個のピットが検出されたが、カマド近くにピットが検出されなかったことより、東北コーナー際のピットNo1を柱穴と考え、4本柱の住居址を想定した。また、住居址中央付近には硬化面が広がっている。北壁には、作り付けのカマドが設置されており非常によく残っていた。カマドの袖は、住居址北側壁面より外側に作り付けられ、焚き口部分のみ住居址内にあることより半屋内炉と思われる。カマドの袖は幅40cmずつ白黄色粘土を詰め込み、間の50cm程が火床となっている。火

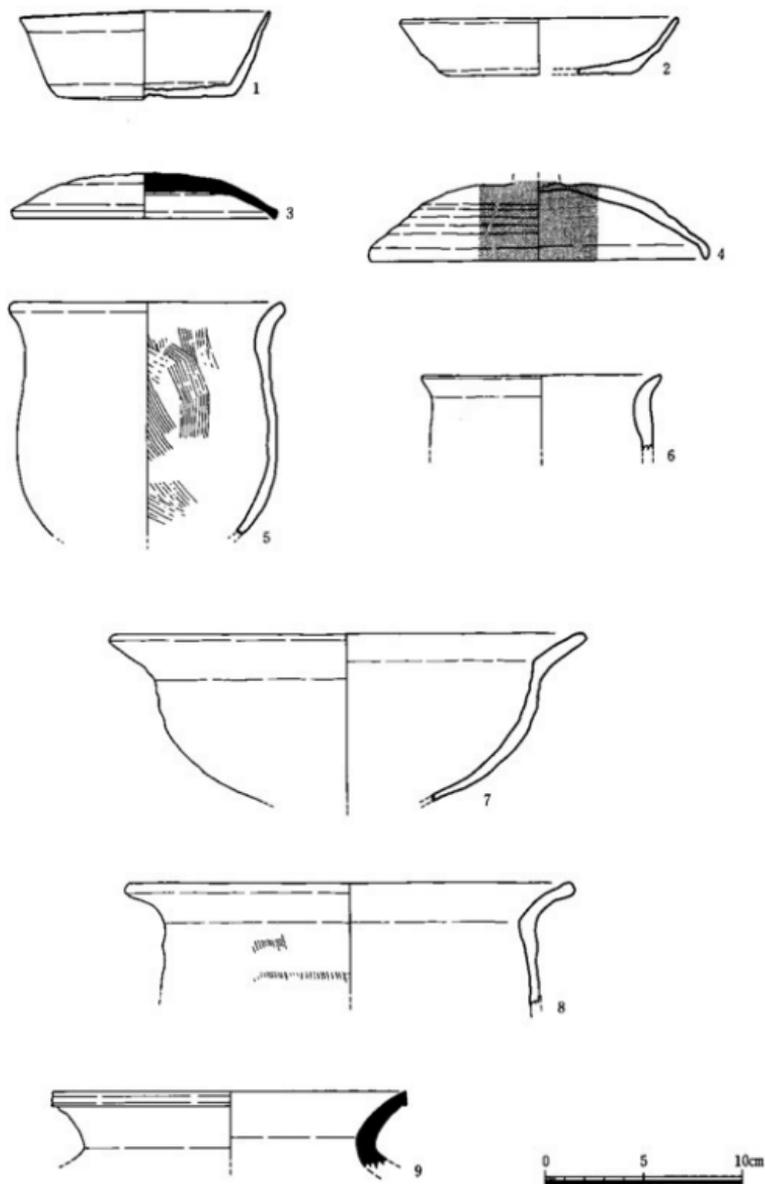


第37図 調査Ⅲ区4号住居址及びカマド実測図

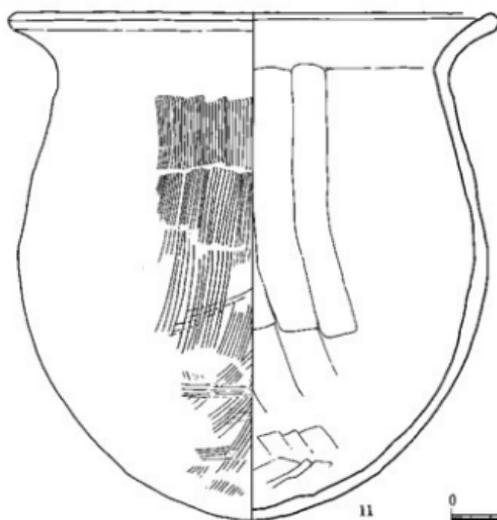
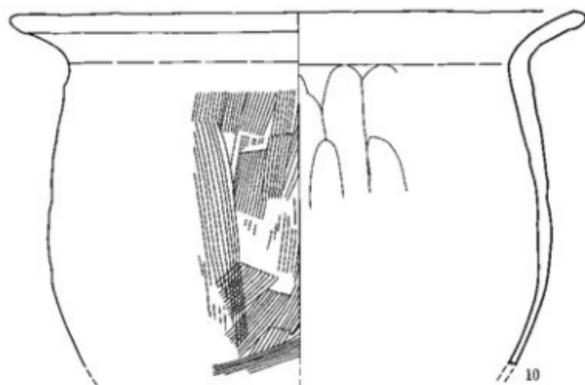
床の床面および袖の壁面で火床に面した部分は、焼けて赤く変色し固くなっている。火床の前
面には、60cm×50cmの楕円形で浅い皿状の焚き口があり、火床の奥には幅30cm、長さ70cmで地
表に向かってゆるく昇っていく煙出しの煙道が認められた。カマド袖の上には、鉄製刀子1本
と土師皿が乗っていた。住居址の時期は、土師器皿、須恵器等が出土していることより平安時
代の住居址と考えられる。また、住居址内には、もう一つの焼土が認められ、平面では確認で
きなかったが、もう1軒別の住居址が切り合っている可能性が十分考えられる。

出土遺物 (第38・39図)

1. 土師器の坏で、法量は復原口径12.7cm、底径9cm、器高4.5cmを測る。器形は、底部より
外傾しながらストレート気味に立ち上がり口縁部に至るもので、口縁部は若干外反し口縁
端部はやや尖がり気味である。器壁は薄く、器面調整は内外面共にヨコナデで、胎土は密
で砂粒を含み、焼成は良好である。
2. 土師器の皿である。法量は、復原口径13.9cm、底径10.2cm、器高2.9cmを測る。器形は、
底部よりほぼストレート気味に立ち上がり口縁部に至るもので、口縁端部は丸くなる。器
面調整は、内外面共にヨコナデで、胎土は密で砂粒を含み、焼成は良好である。
3. 須恵器の蓋である。法量は、復原口径13.3cm、器高2.3cmを測る。器形は、低いドーム形
をなし全体的に丸が残る。口縁部は、短かくつまみ出され口縁端部は断面三角形で先端
はやや尖がり気味である。天井部は、肉厚である。器面調整は、内外面共にヨコナデで、
胎土は密、焼成は堅緻である。
4. 土師器の蓋である。法量は復原口径17.2cm、器高4.1cmを測る。天井部には、鈕が付くも
のと考えられるが、欠失しているためどのような形態の鈕が付くかは不明である。形状よ
りおそらくボタン状の鈕であろうと考えられる。天井部は、高く、ドーム形で肉薄である。
口縁端部は、ほぼ直下に長くつまみ出し、先端は丸くなる。また、器面全体には赤色顔料
を塗布している。器面調整は、内面がハケ目の後にナデ、外面がナデで、胎土は密でわず
かに砂粒を含み、焼成は良好である。
5. 土師器の小型甕である。法量は、復原口径13.5cm、現存高11.9cmを測る。器形は、底部が
欠失するため形態は不明だが、形状より丸くなるものと考えられ、胴部は張りがなくやや
締まり、くの字状に屈曲した後口縁端部に向かって小さく外反する。器面調整は、内面が
荒いハケ目、外面がナデで胎土は密で砂粒を含み、焼成は良好である。
6. 5と同じく、土師器の小型甕の口縁部と考えられる。法量は、復原口径12.1cmを測る。胴
部は、張りがなくストレート気味に降りており、また、頸部もあまり締まらず、口縁部は
外反している。器面調整は、内外面共にヨコナデで、胎土は密で砂粒を含み、焼成は良好
である。
7. 土師器の浅鉢である。法量は復原口径24cm、現存高8.6cmを測る。土器は、底部を欠失す



第38图 調査Ⅲ区4号住居址内出土遺物実測図(1)

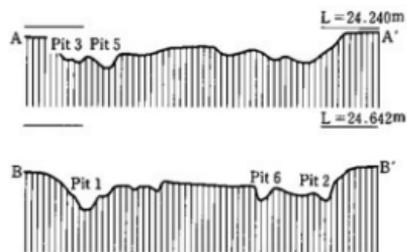
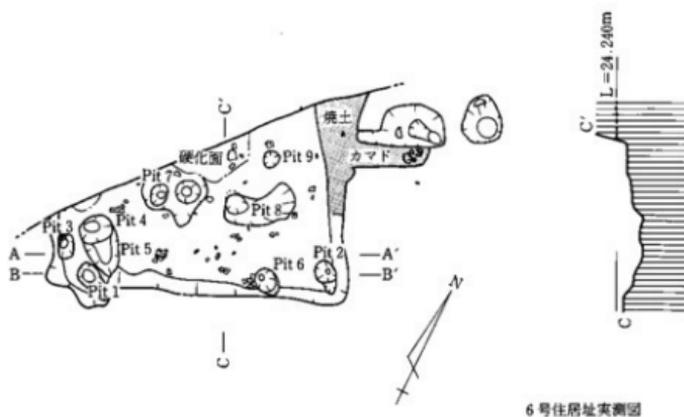
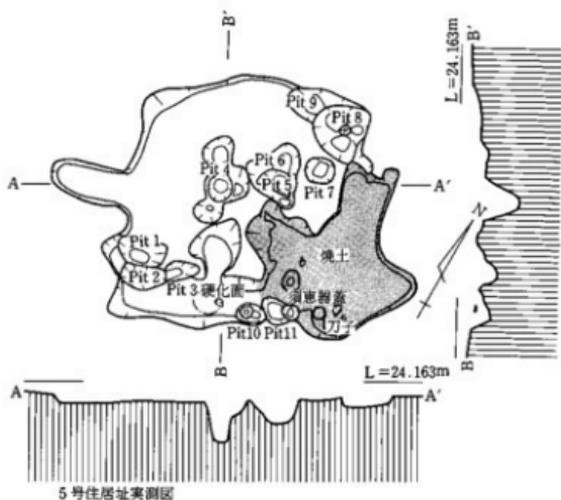


第39図 調査Ⅲ区4号住居址内出土遺物実測図②

- るが、底部より内湾しながら立ち上がり、頸部でくの字状に屈曲した後、口縁端部に向けてストレート気味に外傾する。器面調整は、内外面共にヨコナデで、外面のほぼ全面にススが付着している。胎土は、密で砂粒を含み、焼成は良好である。
8. 土師器甕の口縁部片である。法量は、復原口径22.6cm、現存高5.6cmを測る。土器は、口縁部および胴部上半を復原できるだけで、胴部下半は不明であるが、胴部はあまり膨らまず頸部にかけてほぼストレート気味にわずかに内傾しながら立ち上がり、頸部でくの字状に屈曲した後口縁端部に向かって口縁部が外反する。器面調整は、内面がヨコナデ、外面がハケ目の後ヨコナデで、ハケ目がかすかに残っている。胎土は密で砂粒を含み、焼成は良好である。
9. 須恵器甕の口縁部片である。法量は、復原口径18cm、現存高3.5cmを測る。器形は、頸部でくの字状に屈曲した後、外反しながら短く立ち上がり口縁端部に至る。口縁端部は、肥厚する。器面調整は、内外面共にヨコナデである。胎土は緻密で白砂粒を含み、焼成は堅緻である。
10. 土師器甕で、法量は復原口径28.5cm、現存高18cmを測る。土器は、底部を欠失しているが丸底と考えられ、胴部の最大径は胴部中位付近にあり、後にやや内湾しながら頸部に至る。頸部はくの字状に屈曲し、口縁端部にかけて大きく外反する。器面調整は、内面胴部がヘラ削り、内面と外面の口縁部がヨコナデ、外面胴部がハケ目で、外面胴部下半にはススが付着している。胎土は、密で砂粒を多く含み、焼成は良好である。
11. 10と同じく土師器の甕である。土器は、ほぼ完形で全体を復原できる。法量は復原口径24.3cm、器高25.8cmを測る。器形は、底部が丸底で、胴部中位付近に最大径があり、後に内湾しながら頸部に至る。頸部は、くの字状に屈曲し、口縁部は大きく口縁端部に向かって外反する。器面調整は、内面胴部がヘラ削り、内面と外面の口縁部がヨコナデ、外面胴部がハケ目で、外面胴部の下半には、わずかにススが付着している。胎土は、密で雲母粒や砂粒を含み、焼成は良好である。

5号住居址 (第40図)

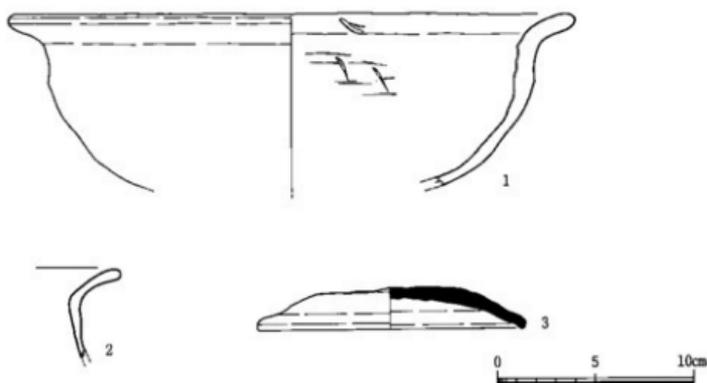
調査Ⅲ区、8-C・Dグリッド内に検出した竪穴住居址と考えられる遺構である。遺構は、深さ5cm程で不整形な平面形をしている。遺構内の東側には、薄い焼土の広がり認められ、焼土の部分より鉄製刀子1本と、須恵器蓋、土師器壺片が出土した。また、硬化面が南壁中心近くで部分的に認められることより、当遺構は大部分が削平を受けた竪穴住居址と判断した。住居址の平面形は、削平を受けてほとんど残っていないため不明だが隅丸方形か隅丸長方形と考えられ、規模は現存部分で2.5m×3.9mを測り、この数値より若干大きかったものと考えられる。住居址の時期は、焼土部分からの出土遺物より平安時代の住居址である。



第40図 調査山区5号・6号住居址実測図

出土遺物 (第41図)

1. 土師器の浅鉢片である。法量は、復原口径29cm、現存高8.7cmを測る。土器は、底部を欠失するが、底部より内湾しながら立ち上がり口縁部が大きく外反するもので、口縁端部は丸くなる。器面調整は、内外面共にヨコナデで、部分的にススが附着している。胎土は、密で砂粒を含み、焼成は良好である。
2. 土師器の壺と考えられる口縁部片である。破片であるため、法量は不明である。器形は、頸部で大きく外反し、口縁端部は丸く、器壁が薄いのが特徴である。胎土は、密で砂粒を含み、焼成は良好である。
3. 須恵器の蓋である。土器は、ほぼ完形で法量は復原口径13.5cm、器高2.1cmを測る。器面調整は、外面へら削りの後ナデ、内面はナデである。外面には、明瞭な稜は残らないが、口縁端部付近に段をもち、端部はやや尖り気味で直下につまみ出されている。天井部は、低く肉薄である。土器の胎土は、密で焼成は堅緻である。



第41図 調査Ⅲ区5号住居址内出土遺物実測図

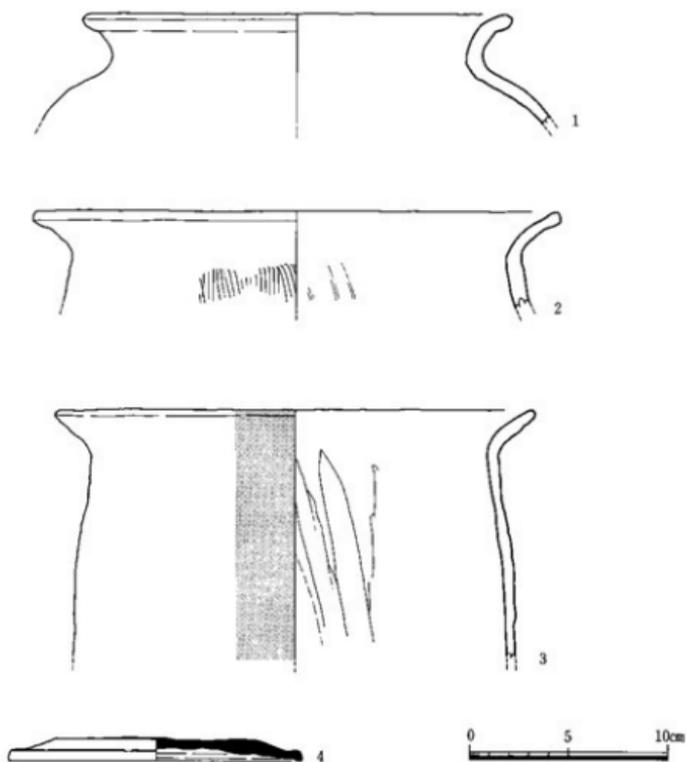
6号住居址

調査Ⅲ区、8-Dグリッド内に検出した竪穴住居址である。住居址は、調査区の北側境界部分に検出された為、1/2程が調査区外へ延びる。当住居址は、2ヶ所のコーナー部が検出でき、南壁の長さが計測できたことと、東壁のカマド部分が検出できたことより、住居址の規模はおおよそ推定できる。規模は、南壁が2.98mで、東壁が南壁と同じかやや長くなる隅丸方形または隅丸長方形プランの住居址と考えられ、主軸をN-64°-Eを取る。深さは、浅く20cm程である。柱穴は、4本柱と考えられピット№1とピット№2が相当するのではなかろうか。また、

住居址中央部には西壁近くまで延びる硬化面を確認できた。東壁には、作り付けのカマドが検出されたが、かなり破壊されており焼土が一面に広がっているだけにすぎず、わずかに煙出しの煙道が壁面より東側へ延びているのが検出されたにすぎない。この住居址のカマドも、4号住居址のカマドと同じく、焚き口だけが屋内にあり、袖及び火床を壁面より外に出す半屋内式のカマドと考えられる。住居址の時期は、カマドや出土遺物の特徴より見て平安時代である。

出土遺物 (第42図)

1. 土師器壺の口縁部片である。法量は、復原口径21.9cm、現存高5.6cmを測る。胴部から下半を欠失するため不明であるが、胴部がかなり大きく膨らむもので、頸部でくの字状に屈曲した後、短く外反しながら立ち上がり口縁端部に至る。口縁端部は、やや肥厚気味で丸くなる。器面調整は、内面がヘラ削りの後ヨコナデで、外面がハケ目のヨコナデである。



第42図 調査Ⅲ区6号住居址内出土遺物実測図

胎土は密で砂粒を含み、焼成は良好である。

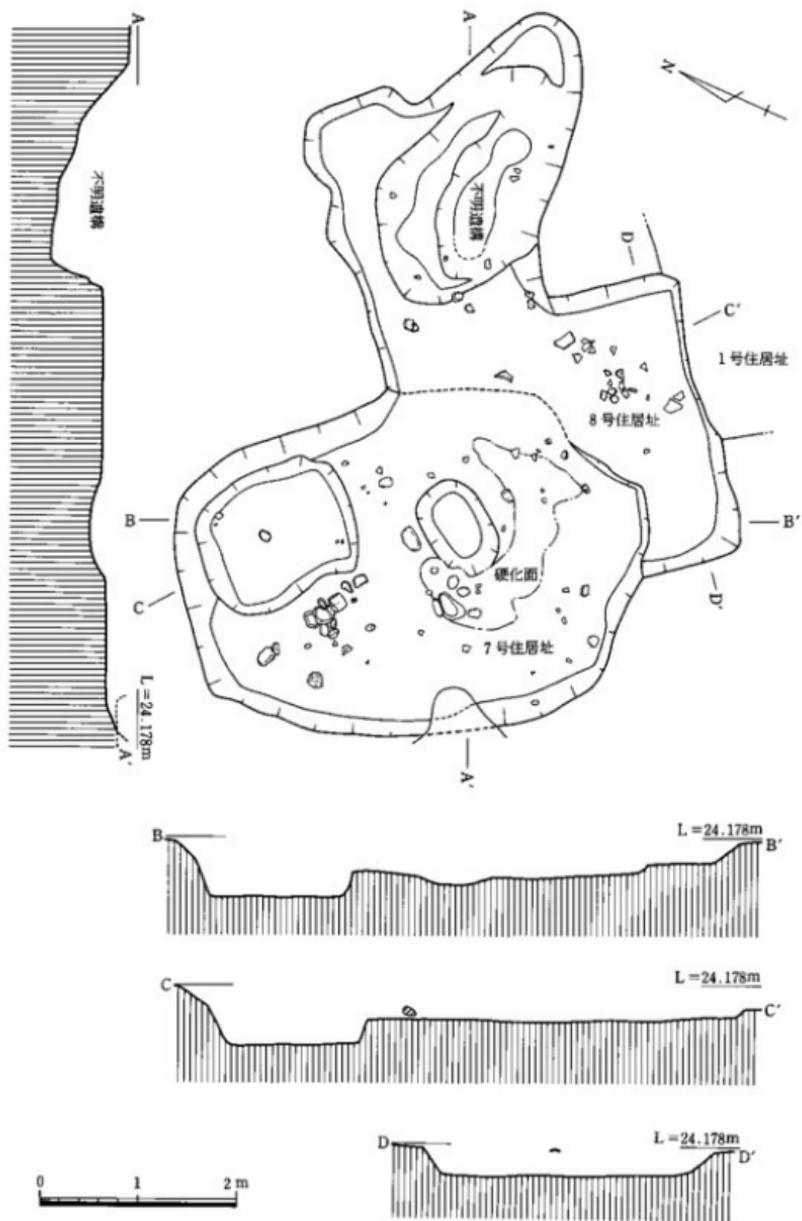
2. 土師器壺の口縁部片である。法量は、復原口径26.8cm、現存高4.9cmを測る。器形は、胴部があまり膨らまず、頸部で大きくくの字状に屈曲した後外反するもので、端部は面取りを行っている。器面調整は、内面胴部はハケ目の後ナデ、外面胴部はハケ目、内外面の口縁部はヨコナデで、胎土は密でわずかに砂粒を含み、焼成は良好である。
3. 2と同じく土師器壺の口縁部片である。法量は、復原口径24.5cm、現存高12.8cmを測る。器形は、胴部がほとんど膨らまずほぼ直線的に底部へ延びる。口縁部は、頸部でくの字状に屈曲した後大きく外反し、端部は丸くなる。また、外面にはかすかに赤色顔料を塗った痕跡が認められる。器面調整は、外面がヨコナデ、内面は口縁部がヨコナデ、胴部はヘラ削りで、胎土は密で雲母粒や砂粒を含み、焼成は良好である。
4. 須恵器蓋のほぼ完形品である。法量は、復原口径15cm、器高1.2cmを測る。外側には、明瞭な段をもち、端部は外側に短くつまみ出されやや尖がり気味である。また、天井部は極端に低く肉薄である。器面調整は、外面天井部がヘラ削り、他の部分はヨコナデ、内面はヨコナデ、胎土は密、焼成は堅緻である。

7号住居址 (第43図)

調査Ⅲ区、8-Cグリッド内より検出した竪穴住居址と考えられる遺構である。遺構は、長さ4.64m、短径3.31mを測る小判形のプランを呈し、主軸はN-33°-Wを取り作られている。深さは、30cmを測る。遺構内からは、柱穴と考えられるピットは1個も検出できなかった。また、中央よりやや南東よりに、1.0m×0.65mで浅い皿状を呈した楕円形プランのピットが検出され、中から焼土及び焼土粒、炭化物の検出はないがこのピットを中心に硬化面が約半周程回っており、他の所には認められない。このことにより、ピットを生活の中心としていたことが推察される。なお、このピットは炉とも考えられるが不明である。北側コーナー部には、1.6m×1.3mで隅丸長方形を呈した土壌が確認された。土層断面観察では、当遺構と土壌との前後関係は確認出来ず、当遺構に伴う土壌であると判断した。用途は不明であるが、貯蔵施設ではないかと考えられる。当住居址は、8号住居址と切り合っているが、床面に差異が認められず前後関係は不明である。住居址の時期は、遺物の出土がない為分からないが弥生時代後期頃と考えられる。

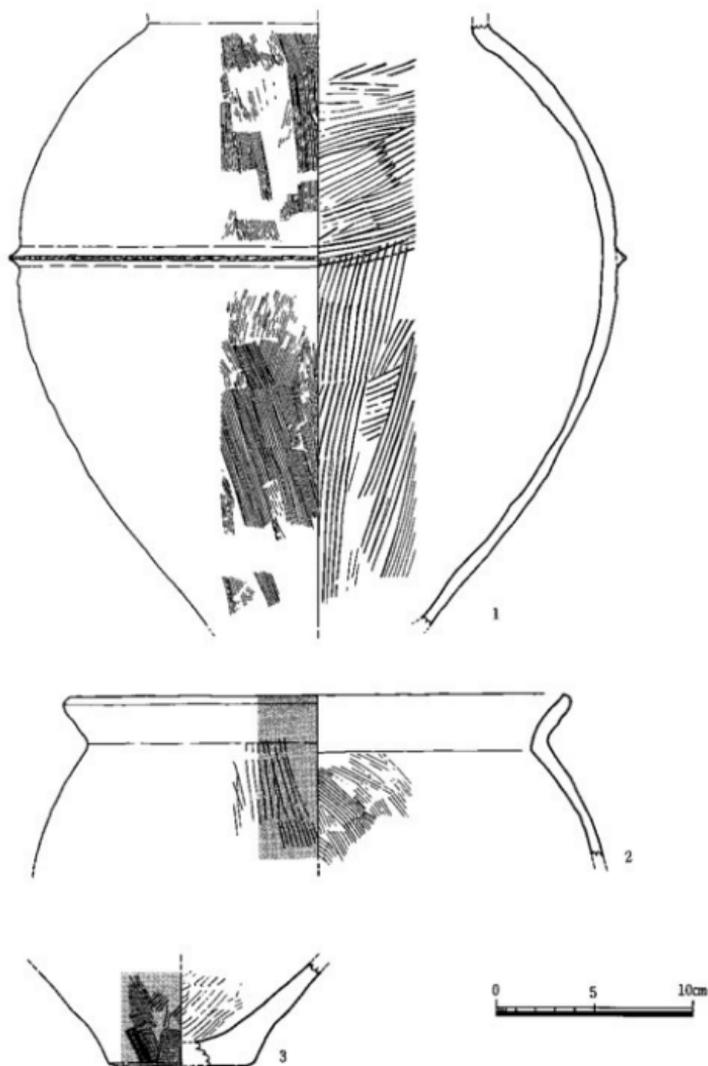
8号住居址

調査Ⅲ区、8-Cグリッド内に検出した竪穴住居址である。南側を1号住居址、東側を土壌状の不明遺構、北側を7号住居址と、切り合っていることより規模は分かりにくかったが、南壁および東壁の一部と北壁の一部が残っていたことにより、規模及びプランの復原は可能であ



第43图 調査III区7号・8号住居址実測図

る。住居址は長辺3.14m、短辺2.95mのほぼ隅丸方形プランで、主軸をN-52°30'-Eに取り作られている。東壁は、1号住居址と切り合っているが、埋土色の違いおよび出土遺物の時期差により、1号住居址が新しく、当住居址が古いことが判明した。しかし、7号住居址との前



第44図 調査Ⅲ区8号住居址内出土遺物実測図

後関係は、土層観察による土色の違いや遺物では全くわからず不明としか言いようがない。また、当住居址内には、炉址及び硬化面、柱穴は確認できなかった。住居址内からは弥生式土器が出土しており、弥生後期頃の時期の住居址と考えてよい。

出土遺物

1. 壺の胴部片である。土器は、口縁部および底部を欠失するため口径、底径、器高については不明であるが、胴部最大径30.5cm、現存高30.5cmを測る。器形は、胴部が大きく膨らみ球形に近いが、胴部最大径が中心より若干上方に上がり、底部近くになるとほぼストレート気味に底部へ延びていく。底部は、径10cm前後の平底と考えられる。胴部の最大径が来る部分には、1条の突帯を貼り付けて刻目を施している。外面全体には、化粧土を塗布しており、器面調整は、内外面共にハケ目であるが、外面のハケ目は細かく内面は荒いのが特徴である。胎土は、密で砂粒を多く含み、焼成は良好である。
2. 甕と考えられる口縁部片である。土器は、口縁部から胴部上半にかけての破片であるため全体は不明であるが、口径25.2cm、現存高8.3cmを測る。器形は、胴部が膨らむもので、胴部最大径が中心より上部にくるようである。頸部は、くの字状に屈曲し、口縁部は小さくストレート気味に外反する。外傾角度は小さい。外面には、赤色顔料を塗布した痕跡が認められ、器面調整は内外面共にハケ目の後にナデている。胎土は、密でわずかに砂粒を含み、焼成は良好である。
3. 底部のみの破片で、形状より壺の底部と考えられる。土器は、胴部や口縁部など大半を欠失するため全体は不明であるが、復原底径7.4cm、現存高4.8cmを測る。底部は、平底で胴部に向かって大きく開きながら延びていく。外面には、赤色顔料が塗布され、器面調整は内外面共にハケ目の後ナデている。胎土は、密で雲母粒及び砂粒を含み、焼成は良好である。

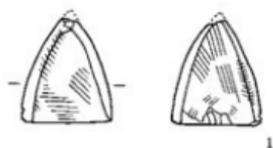
4. 石器と鉄器

石器 (第45・46図)

今回調査を実施した、I・II・III調査区内より弥生時代に属する石器が若干出土している。これらの石器は、大半が住居址等の遺構内より出土のものであるが、遺構外つまり包含層中より出土したのものも含まれるため、ここでは遺構内出土のものも含め、一括して弥生時代の石器としてまとめて説明を行いたい。

磨製石鉄 (第45図1～8)

1. 調査I区3-Bグリッド内でアカホヤ火山灰(Ah)に相当すると考えられるVI(黄褐色土)層中より出土したもので、先端部を若干欠失するが、基部に挟りを持たない平基式で、基部より二側縁部が長い長三角形鉄である。石鉄の法量は、長さ2.7cm、幅2.3cm、厚さ0.2cmを測り、断面は平坦である。石材は、片岩を使用している。
2. 調査I区2-Bグリッド内で1と同じくVI(黄褐色土)層中より出土したもので、基部に挟りを持たない平基式で、基部より二側縁部が長い長三角形鉄の完形品である。石鉄の法量は、長さ2.6cm、幅1.5cm、厚さ0.25cmを測り、断面は平坦である。石材は、片岩を使用している。
3. 調査III区4号住居址内の覆土中より出土したもので、先端部と基部の一部を欠失するため全体は不明だが、基部に挟りを持たない平基式の長三角形鉄と考えられる。法量は、そのほとんどを欠失するため不明だが厚さ0.25cmを測り、断面は平坦である。石材は、片岩を使用している。この石鉄が出土したI区4号住居址は、出土遺物や住居址の特徴より平安時代の時期に比定される。
4. 調査I区3-Bグリッド内でVI(黄褐色土)層中より出土したもので、先端部および基部から側縁部の1部を欠失するが、基部に浅い挟りを入れた細身で長くなる柳葉形の石鉄と考えられる。法量は、先端部および側縁部を欠失することから不明であるが、現存長3.2cm、厚さ0.3cmを測り、断面は平坦である。石材は片岩を使用している。
5. 調査I区12号住居址内の覆土中より出土したもので、先端部を欠失するが、基部に浅い挟りを入れた凹基式で、細身で身が長くなる柳葉形の石鉄である。法量は、先端部を欠失することから長さは不明だが、現存長3.0cm、幅1.9cm、厚さ0.3cmを測り、断面は表の中央付近に鑄がくることから三角形を呈している。石材は片岩を使用している。
6. 調査I区1-Bグリッド内でVI(黄褐色土)層中より出土したもので、先端部を欠失するが、基部に狭い挟りを持つ凹基式の石鉄である。法量は、先端部を欠失することから不明だが現存長1.6cm、幅1.6cm、厚さ0.3cmを測り、断面は鑄が側縁部にくると平坦である。石材は片岩を使用している。



1



I区3-BグリッドVI層中



2



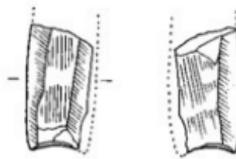
I区2-BグリッドVI層中



3



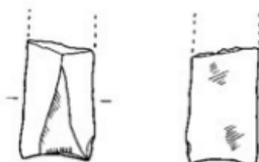
III区4号住居址内



4



I区3-BグリッドVI層中



5



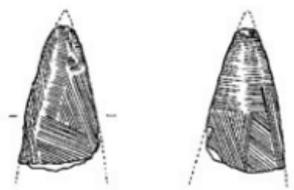
I区12号住居址内



6



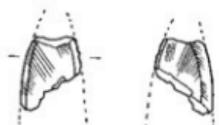
I区1-BグリッドVI層中



7



II区2号住居址内



8



I区9号住居址内



第45図 出土石器実測図(1)

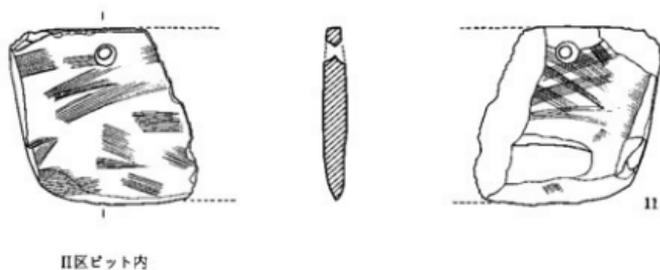
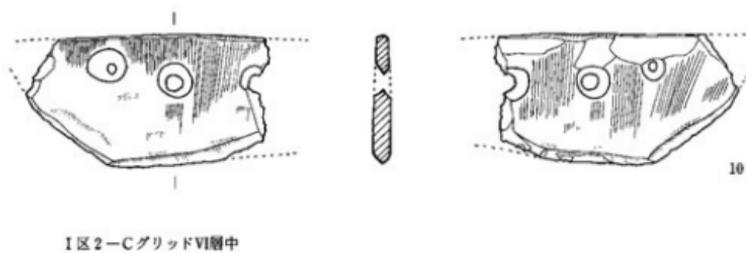
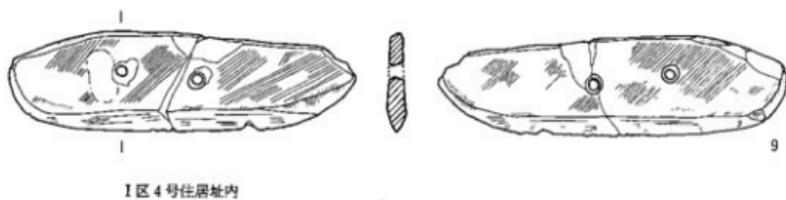
7. 調査II区2号住居址内の覆土中より出土したもので、先端部の一部と基部を欠失するため基部の形態は不明であるが、基部に比べて二側縁部が長い長三角形鉄と考えられる。法量は、先端部と基部を欠くことより不明だが、現存長3.7cm、厚さ0.3cmを測り、断面は平坦である。石材は、片岩を使用している。この石鉄が出土したII区2号住居址は、出土遺物より弥生時代に比定される。
8. 調査I区9号住居址内の覆土中より出土したもので、先端部や基部等そのほとんどを欠失するため形態や法量は不明であるが、二側縁部が長い長三角形鉄と考えられる石鉄片で、厚さは0.2cmを測り、断面は平坦である。石材は、片岩を使用している。この石鉄が出土したI区9号住居址は、出土遺物や住居址の形態より弥生時代に比定される。

石包丁 (第46図9~11)

9. 調査I区4号住居址内の覆土中より出土したもので、完形品である。身幅が狭く半月形に近い形をしているが、刃部はやや直線的で直刃に近い。刃部は、両刃で使用度が高いため刃こぼれしている。紐孔は、身幅のほぼ中心付近に有り両面からの回転による穿孔で、紐孔の周囲には紐ズレの痕跡が認められる。石包丁の法量は、長さ11.7cm、幅3.4cm、厚さ0.6cmを測り、石材は粘板岩を使用している。出土したI区4号住居址は、遺物より平安時代に比定されることから流れ込みと考えられる。
10. 調査I区2-Cグリッド内でVI(黄褐色土)層中より出土したもので、両側を欠失する。形状は、身幅が広い半月形のものと考えられ、刃部は両刃で使用度が高いため刃こぼれしている。紐孔は、身幅の中心よりやや上方に3個有り紐孔の部分で折れていることから、破損したのを再利用したのと考えられ、3個共に両面からの回転による穿孔を行なっている。法量は、両側が欠失するため長さは不明であるが、現存長8.3cm、幅4.4cm、厚さ0.6cmを測り、石材は粘板岩を使用している。
11. 調査II区のピット内より出土したもので、全体の1/2程右側が欠失している。形状は、長方形に近い形をしていると考えられ、刃部は直刃に近く、両刃である。紐孔は、身幅の中心よりかなり上方に有り側縁部に近くなる。穿孔は、両面からの回転で行われている。法量は、全体の1/2程欠くことから長さは不明であるが、現存長6.3cm、幅5.9cm、厚さ0.8cmを測り、石材は粘板岩を使用している。

砥石 (第46図12)

12. 調査II区2号住居址の覆土中より出土したもので、完形品である。法量は、長さ3.8cm、幅1.4cm、厚さ1.3cmを測り、長方形で、断面が正方形を呈する。この砥石は、非常に小型で4面共に使用しており、擦れて中央付近が窪んでいる。また2面には、長辺と平行して中央付近に幅1~1.5mm程の沈線が1条はある。石材は砂岩を使用している。出土したII区2号住居址は、遺物より弥生時代に比定される。



第46図 出土石器実測図(2)

紡錘車 (第46図13)

13. 調査Ⅱ区1号住居址内の床面付近より出土したもので、全体の1/2程欠失するが、推定直径約5cm、厚さ0.8cmを測り、中心に直径0.7cm程の穿孔を施す。紡錘車は、粘土を焼いて作られており、胎土は径1mm程の小石を少量、砂粒を多量に含み、焼成は良好、色調は両面共に赤褐色を呈している。出土したⅡ区1号住居址は、遺物より弥生時代に比定される。

鉄器 (第47図)

当遺跡からは、鉄製品が10点出土している。そのほとんどが、住居址等の遺構内出土であるが、一部包含層中からの採集資料も含まれることや、住居址の時期が弥生時代に属するものと平安時代に属するものの2時期に分かれることから、遺構内出土の鉄器であっても時期の判断が不明確である。ここでは鉄器に限って一括して取り扱った。

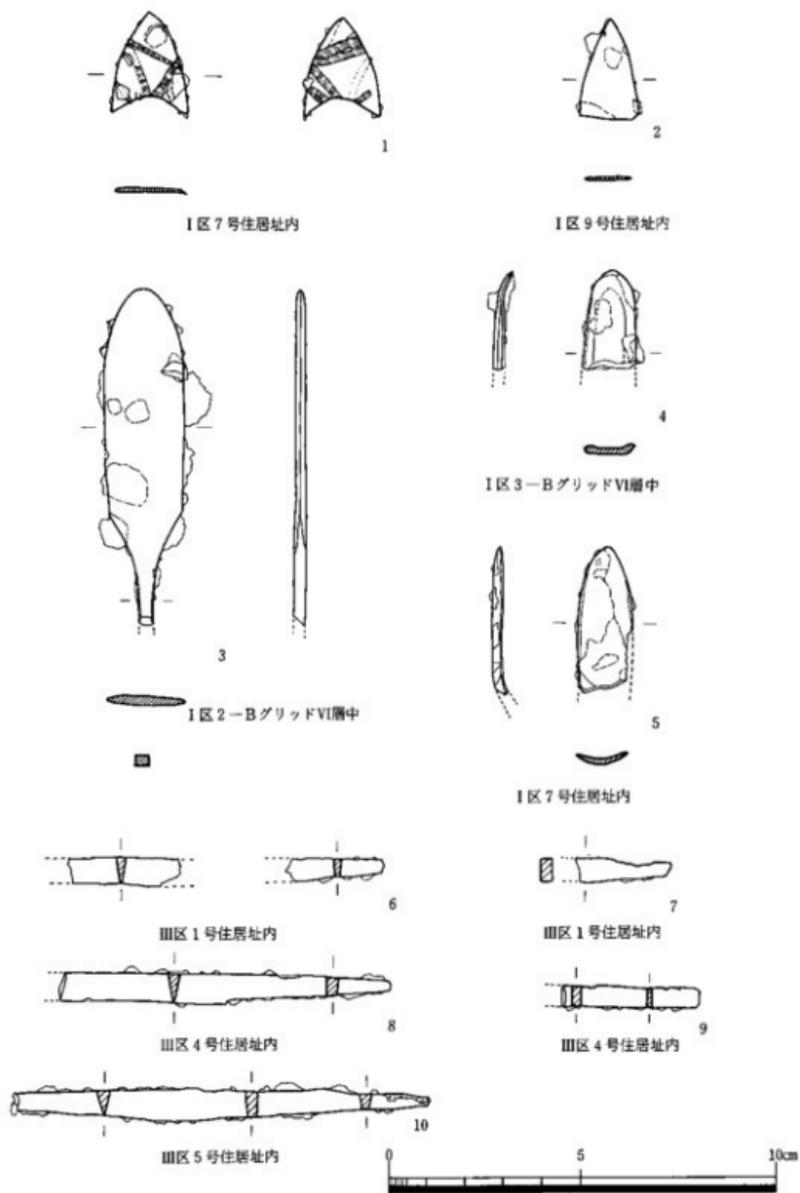
鉄鏃 (第47図1～3)

1. 調査Ⅰ区7号住居址内の覆土中より出土したもので、完形品である。法量は、長さ2.6cm、幅2.0cm、厚さ0.1cmを測る。鉄鏃は、無茎で凹基式、弧状の袂を持ち二側縁部が長い長三角形鏃である。側縁部は若干膨らみ、表裏面には紐の跡が残る。鉄鏃が出土したⅠ区7号住居址は、出土遺物等より弥生時代に比定される。
2. 調査Ⅰ区9号住居址内の床面付近より出土したもので、法量は長さ2.6cm、幅1.5cm、厚さ0.1cmを測り、完形品である。鉄鏃は、無茎で平基式の袂を持たない長三角形鏃である。この鉄鏃が出土したⅠ区9号住居址は、出土遺物より弥生時代に比定される。
3. 調査Ⅰ区2-Bグリッド内でアカホヤ(Ah)火山灰に相当すると考えられるVI(黄褐色土)層中より出土したもので、茎の一部を欠失するがほぼ完形品である。法量は、茎を含めた長さ8.7cm、身幅が2.0cm、茎幅が0.35cm、厚さは0.3cmを測る。鉄鏃は、鏃身部が長い柳葉形を呈するもので、茎が付く有茎柳葉形の鉄鏃である。茎は、断面が正方形に近い長方形を呈する。

鉈 (第47図4・5)

4. 調査Ⅰ区3-Bグリッド内でアカホヤ(Ah)火山灰に相当すると考えられるVI(黄褐色土)層中より出土したもので、先端部のみ残存し他の大部分を欠失する。法量は、現存長さ2.5cm、幅1.4cm、厚さ0.2cmを測る。先端部は内側に屈曲し、断面は浅いU字形を呈する。
5. 調査Ⅰ区7号住居址内の床面付近から出土したもので、先端部のみ残存し他の大部分を欠失する。法量は、長さ3.7cm、幅1.4cm、厚さ0.2cmを測る。先端部は、内側に屈曲し、断面は浅いV字形を呈する。出土したⅠ区7号住居址は、出土遺物等より弥生時代に比定される。

刀子 (第47図6～10)



第47図 出土鉄器実測図

6. 調査Ⅲ区1号住居址内の覆土中より出土したもので、刀子の刃部と茎部分の破片である。法量は、切先部分を欠失するが刃部の長さ3.8cm、身幅0.75cm、棟厚0.2cmで断面くさび形を呈し、茎部分は現存長2.5cm、幅0.5cm、厚さ0.2cmで断面長方形を呈している。関の部分は、欠失するため不明である。出土したⅢ区1号住居址は、出土遺物等より平安時代に比定される。
7. 6と同じく調査Ⅲ区1号住居址内の床面付近より出土したもので、刀子の茎部分と考えられる破片である。刃部を欠失するが現存長2.5cm、幅0.6cm、厚さ0.3cmを測り断面長方形を呈している。出土したⅢ区1号住居址は、出土遺物等より平安時代に比定される。
8. 調査Ⅲ区4号住居址内のカマド袖部分より出土したもので、切先部分のみを欠失する。法量は、現存長8.6cm、刃部の長さ4.2cm、身幅0.8cm、棟厚0.3cmを測り断面くさび形を呈し、茎部分は長さ4.4cm、幅0.65～0.3cm、厚さ0.3cmを測り断面長方形を呈している。関は、片関で刃部にあり、全体的に細身である。出土したⅢ区4号住居址は、出土遺物等より平安時代に比定される。
9. 8と同じくⅢ区4号住居址内より出土したもので、茎部分のみで他の部分を欠失する。現存長は3.5cm、幅0.55cm、厚さ0.2～0.1cmを測り、基部になるにしたがい厚さが薄くなる。断面は、長方形を呈している。全体の大部分が欠失するため器種は不明であるが、刀子ではないかと考えられる。出土したⅢ区4号住居址は、出土遺物等より平安時代に比定される。
10. 調査Ⅲ区5号住居址内の床面付近より出土したもので、刃部切先を欠失するだけでほとんど完形に近いものである。法量は、現存長10.8cm、刃部の長さ4.9cm、身幅0.8cm～0.5cm、棟厚0.3cmを測り断面くさび形を呈し、茎部分の長さ5.9cm、幅0.7cm～0.2cm、厚さ0.3cmを測り断面長方形を呈している。関は、片関で棟の部分にあり、刃部は切先の方に行くにしたがい身幅が細くなる。また、茎部分には木質が残っている。出土したⅢ区5号住居址は、出土遺物より平安時代に比定される。

第V章 まとめ

最後に、本遺跡の問題点について述べ若干の考察を加えてみたい。まず今回調査を実施した地区は、白川の左岸にあたる河岸段丘上で下段の部分にあたる。調査は、一般国道3号熊本北バイパス道路建設工事に伴う事前調査であり、また、今回の調査対象区は、架橋工事であることから橋桁の基礎部分に限ってのみ調査を実施した。調査は、橋桁の建設予定地区3ヶ所に調査区を設定し表土剥ぎを行った。調査区は、北側で白川に一番近い方から第I調査区、第II調査区、第III調査区と調査区名を付け、第I調査区を中心に10m四方のグリッドを設定し調査を実施した。調査を実施した3ヶ所の調査面積は、調査I区が約600㎡、調査II区が約400㎡、調査III区が約500㎡で合計約1500㎡である。今回調査を実施した地区は、面積が狭くまた調査地区が限定されていることなどから、遺跡の広がりや性格等について全体を十分把握するには至らなかったが、今回の調査により3地区合計19軒の竪穴住居址を検出できた。検出した19軒の竪穴住居址は、出土遺物より弥生時代のもの8軒と、平安時代のもの11軒の2時期に大別することが出来ることから当地区白川沿いの第1段目の河岸段丘上には、弥生時代と平安時代を中心に集落が営まれていたことが判明した。

弥生時代の住居址は、調査I区の7号・9号・10号・12号住居址の4軒、調査II区の1号・2号住居址の2軒、調査III区の7号・8号住居址の2軒で合計8軒を数える。ただし、調査I区の10号・12号住居址は、遺物の出土量が少なく、また、出土した遺物も細片であることから器形的特徴を見いだせるものはなく、住居址の形態及び内部施設、細片の出土遺物を総合して時期の判断を行った。この時期に属する住居址には、ほとんど切り合い関係がなく、わずかに調査III区の7号住居址と8号住居址の間に1例認められるだけである。この傾向は、調査区に限られた範囲内での調査結果であり、未調査である周辺部の状況確認を必要とするが、各調査区の住居址の密集度が薄いことから集落が広範囲に広がっているのか、それとも集落の営まれたのが極く短期間であるもののどちらかと考えられる。さて、この少ない住居址間の切り合いから住居址の時期差や前後関係を求めたいが、各住居址内から出土した土器の口縁形態、底部形態などの特徴を比較してみると形態的差異がほとんど認められないことから、同時期で時間差があまり開かないものと考えた方がよさそうである。これら、住居址内から出土した土器は壺、甕がほとんどで、セット関係がつかめるほど器種にバラエティはない。これら壺、甕の特徴を見ると、壺は口縁部が外反しながらラップ状に開き、大きく膨らむ胴部中位には刻目を施した1条の細い突帯を貼り付けている。また、頸部から胴部の突帯の間に暗文が施されており、底部は平底であるが若干レンズ状に膨らむ諸特徴が見られる。甕は、口縁部が大きく外側に外反し、高台は低くこの高台が若干外側に外反する特徴をもっている。これら壺、甕の形態的特徴は、中期とされる黒髪式土器の特徴を残しているが後期的な色彩がでており時期的には後期

前半に位置付けておきたい。このような特徴に酷似する土器が、当遺跡より少し上流で対岸の河岸段丘上に位置している^{註1} 下南部遺跡の3号、4号住居址内より出土している。したがって、白川の河岸段丘上で特に下段部分には、同時期の集落跡が連続して点在しているであろうということが判断される。次に竪穴住居址の方位、形態等について若干まとめてみたい。まず主軸方位であるが、これにはばらつきがあり特定な方向性を見いだすことは出来ない。次に形態であるが、調査I区の7号住居址が隅丸方形、調査I区の10号住居址が円形、調査III区の7号住居址が小判形、残りはすべて隅丸長方形またはそれと考えられるものである。これら住居址の形態は、バラエティにとんでおり時期的な差が開いているように見え、特に調査I区の7号、10号住居址が他の住居址より先行するものと考えられるが、住居址内から出土した遺物の特徴からはその差はあまり歴然としない。しかし、調査I区7号住居址内には、壺の頸部くびれ部付近に1条の突帯を貼り付けた中期的な様相を呈するものが混入しており、中期より集落が営まれていた可能性も考えられる。ただし、遺物の量が少ないことからこの時期に属する住居址群は、中期から後期前半にかけて短期間に営まれたものであろう。

次に平安時代の住居址は、調査I区の1号・2号・3号・4号・6号住居址の5軒、調査III区の1号・2号・3号・4号・5号・6号住居址の6軒で合計11軒を数え、調査II区からはこの時期に属する住居址は全く検出されていない。住居址間には、調査III区1号・2号・3号住居址の間に切り合い関係が見られその前後関係は、3号住居址が一番古く、次に2号、1号が一番新しいという順になる。ただし、出土土器に特徴的な差異は認められず他の切り合い関係のない住居址については前述の調査III区1号・2号・3号住居址とどう合致するのか又はどういう前後関係になるのかは全く不明である。次に住居址群の主軸方位であるが、そのほとんどが同方向またはほぼ直角に振った方向にまとまっており、この事実から考えると住居址間の時間差はそう広がるものではなく短い間に継続的に営まれていたものと考えられ、このことは住居址内から出土した土器に形態的差異が認められないことからその結果は合致する。出土土器は、土師器と須恵器の坏、蓋、壺、壺等で特に坏には高台を貼り付けたものがありこの高台の特徴及び他の器種の形態的特徴より実年代は九世紀の初頭頃と考えられる。さらに当遺跡の性格を考えるうえで、少々特異な遺物が出土している。それは、調査III区の1号住居址内から出土した墨書土器と、同じく調査III区3号住居址の北側壁面部分より検出されたカマド内より出土した布目の平瓦片である。まず前者であるが、土師器坏のほぼ完形品で底部外面全体に文字が書かれており力強く遶筆であるが、文字と見られる部分の上には重ねて落書きではないかと考えられる円のようなものが幾重にも書かれており、どのような文字が書かれているかは判読がしにくい。次に、後者であるが、瓦が出土したカマドは破壊を受けていたため形状を留めていなかったことから、瓦がカマドの一部に使用されていたのかそれとも全くカマドとは関係なく廃棄されただけのものなのかそのどちらなのかは不明である。近くの遺跡で新南部町小碓

に所在する新南部^{註2}A遺跡、新南部町上西原に所在する新南部^{註3}B遺跡からも布目瓦片が採集されており三つの遺跡には何等かの関連があるようである。上記の二つの遺物は、時期的にみると当時は一般的な所で使用されることはなく、特殊な要素を持っていることから寺院址とか官衙遺跡またはそれに関係した特殊な遺跡で出土することが多い。最後に、今回調査した当遺跡では、調査面積が狭く限られた範囲でしか調査を実施していないことから、遺跡の範囲や規模、集落の構造、性格、生活基盤である水田址等の確認などの問題点について解決できるような結果はあまり得られなかった。しかし、今回の調査で白川の河岸段丘上に立地する集落構造の一端を伺い知ることができた。弥生時代、平安時代には、ある程度大きな集落が営まれ各々の集落の存続期間は比較的短く、また、弥生時代、平安時代に営まれた集落には大きな時間的な隔りがあることが判明した。これは、遺跡が白川沿いの一番低い河岸段丘上に位置しているという立地条件と、河川の氾濫などの自然災害も一因と考えられるであろう。

註1 大城康雄・廣瀬正照他『下南部遺跡調査報告』熊本市教育委員会・熊本市住宅協会
1979年

註2 上野辰男・東光彦『熊本市東部地区文化財調査報告』熊本市教育委員会 1971年

註3 註2と同じ

写 真 图 版

図版 1



(1) 調査区遠景 (北西ヨリ)



(2) 調査区遠景 (白川対岸ヨリ)



(3) 調査区近景 (表土削ぎ前)



(4) 調査風景



(5) 調査Ⅰ区遺構検出状態 (調査前)



(6) 調査Ⅰ区遺構検出状態 (完掘後)

図版 2



(1) 調査Ⅰ区7号住居址(完掘後)



(2) 調査Ⅰ区10号住居址(完掘後)



(3) 調査Ⅱ区遺構検出状態(調査前)



(4) 調査Ⅱ区遺構検出状態(完掘後)



(5) 調査Ⅱ区1号住居址検出状態



(6) 調査Ⅱ区1号住居址遺物出土状態

图版 3



(1) 調査II区1号住居址(完掘後)



(2) 調査II区2号住居址検出状態



(3) 調査II区2号住居址(完掘後)



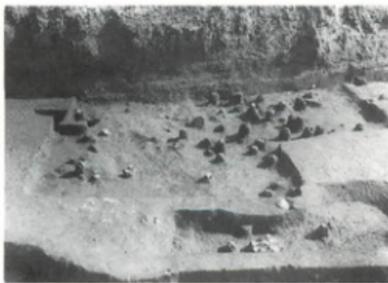
(4) 調査III区遺構検出状態(調査前)



(5) 調査III区遺構検出状態(完掘後)



(6) 調査III区1号・2号・3号住居址検出状態



(7) 調査III区1号・2号住居址内遺物出土状態



(8) 調査III区1号住居址(完掘後)

図版 4



(1) 調査III区 1号住居址カマド



(2) 調査III区 2号住居址 (完掘後)



(3) 調査III区 2号住居址カマド



(4) 調査III区 3号住居址 (完掘後)



(5) 調査III区 3号住居址No.1 カマド



(6) 調査III区 3号住居址No.2 カマド



(7) 調査III区 4号住居址



(8) 調査III区 4号住居址内遺物出土状態

図版 5



(1) 調査Ⅲ区 4号住居址カマド (完掘後)



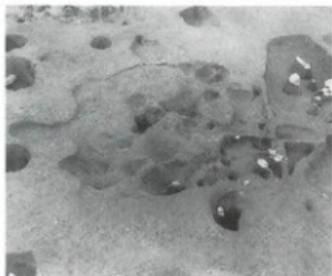
(2) 調査Ⅲ区 4号住居址内遺物
出土状態 (刀子)



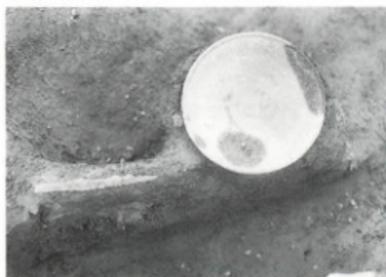
(3) 調査Ⅲ区 4号住居址内
遺物出土状態 (環)



(4) 調査Ⅲ区 4号住居址内
遺物出土状態



(5) 調査Ⅲ区 5号住居址



(6) 調査Ⅲ区 5号住居址内出土遺物 (刀子と蓋)



(7) 調査Ⅲ区 6号住居址



(8) 調査Ⅲ区 7号住居址



(9) 調査Ⅲ区 8号住居址

图版 6



3

I区2号住居址出土遗物

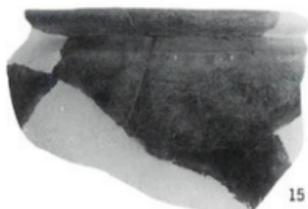


1

I区4号住居址出土遗物



8



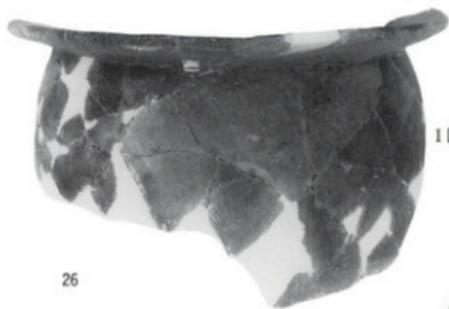
15



23

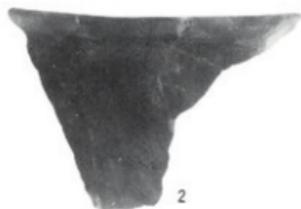


14



26

I区7号住居址出土遗物



2

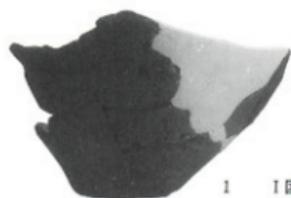


3

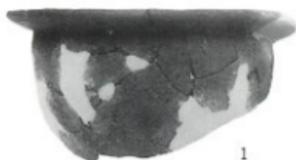
I区9号住居址出土遗物

$\times \frac{1}{4}$

图版 7



1 I区12号住居址出土遗物



1



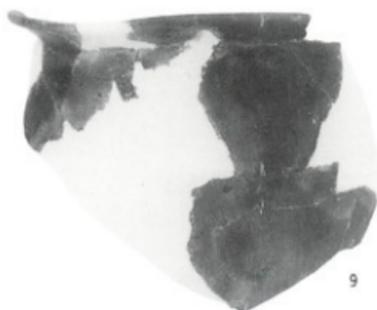
2



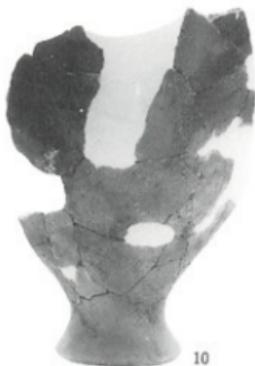
4



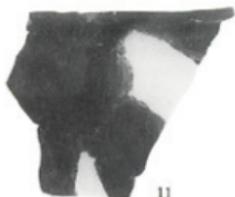
8



9



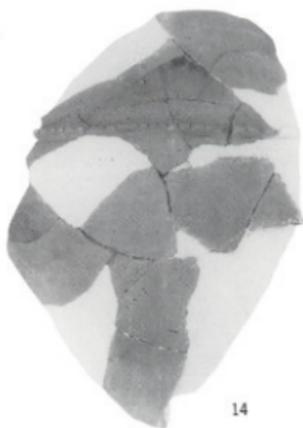
10



11

II区1号住居址出土遗物

$\times \frac{1}{4}$



14

II区1号住居址出土遗物 $\times \frac{1}{4}$



16 $\times \frac{1}{4}$

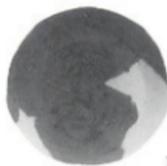


17 $\times \frac{1}{6}$



1 $\times \frac{1}{4}$

II区2号住居址出土遗物



1



4



1

III区3号住居址出土遗物 $\times \frac{1}{4}$

III区1号住居址出土遗物 $\times \frac{1}{4}$

图版 9



1



2



3



4

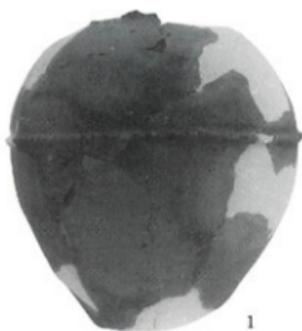
Ⅲ区 4号住居址出土遺物



10



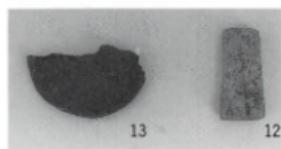
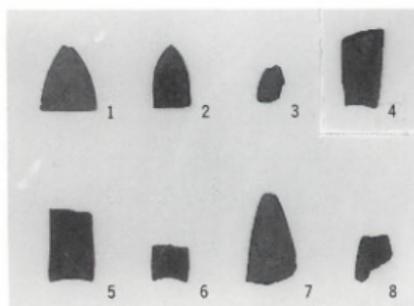
11 $\times \frac{1}{4}$



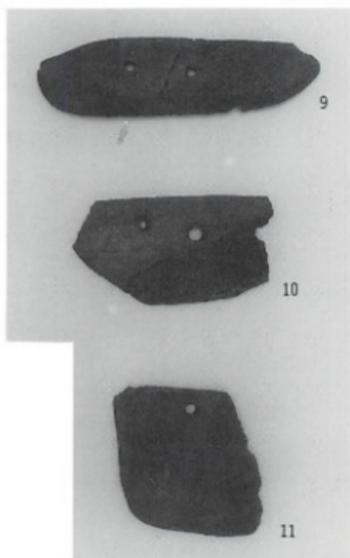
1

Ⅲ区 8号住居址出土遺物 $\times \frac{1}{6}$

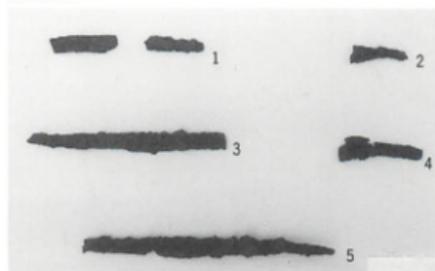
图版10



出土石器



出土铁器



$\times \frac{2}{3}$

熊本県文化財調査報告 第76集

〔西谷遺跡〕

一般国道3号熊本北バイパスに伴う
埋蔵文化財発掘調査報告

発行年月日 昭和60年3月31日

発行 熊本県教育委員会

〒862 熊本市水前寺6丁目18番1号

印刷 白木印刷株式会社

〒862 熊本市九品寺5丁目9番35号

この電子書籍は、熊本県文化財調査報告第76集を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：西谷遺跡

発行：熊本県教育委員会

〒862-8609 熊本市中央区水前寺6丁目18番1号

電話：096-383-1111

URL：<http://www.pref.kumamoto.jp/>

電子書籍制作日：2016年3月31日

なお、熊本県文化財保護協会が底本を頒布している場合があります。詳しくは熊本県文化財保護協会にお問い合わせください。

熊本県文化財保護協会

URL：<http://www.kumamoto-bunho.jp/>